
FAIRY TAIL 空の刀が目指すは雷の神

霊宮空刀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FAIRY TAIL 空の刀が目指すは雷の神

【Nコード】

N2342R

【作者名】

霊宮空刀

【あらすじ】

俺は死んだ、そして転生した。魔法がある世界へ――

第一話 始まり

side 俺

俺が目覚ますと、いつの間にか草原にいた。そこは、ただ草原が広がっており、俺の目の前には、大木があつた。俺はその木の近くまで行ってみると、紙とペンが落ちてきた。その神にはこんなことが書かれていた

『この紙の裏に自分の行きたい世界・欲しい物などを書いていいぞ。そこに直接転生をさせてやろう』

「偉そうな神だな、まあいいか。えっと、転生したい世界はFAIRY TAILと。次にほしい物はイケメンの容姿と世界のトップクラスの選手の身体能力×5人分だろ、2000万」と。あと魔法は、魔法、ねえ」

俺はしばし考え込むと、ある魔法を思いついた

「雷の滅竜魔法と。属性は雷で、技はナツ・ドラグニルと同じ。滅竜奥義だけは自分で作成すると。これでよし」

俺はペンを投げ捨てると紙をどこに置くのか探していたが、さっきが紙とペン落ちてきたところを見ると、ポストがあり、そこに紙を入れると、下に穴があいたが、俺はそれをすかさず落ちないように別の場所にジャンプした

「馬鹿め！そういうのは大体分かってら！」

しかし、俺は油断していた。ジャンプした先には穴がまた開いており、俺はそこに見事に落ちた

「だまされた！！！！！」

そして、俺は魔法の世界へと転生していった。

ちなみに、俺の名前は空刀。空刀聖夜だ

第二話 キーブレード

side 聖夜

「はああ・・・眠いし寝るか・・・」

そうして俺は夢の中へと行った

side out

side 神

だれだロリータとか言った奴は！でてこい、ぼこるから！！私これでも一応神なのよ！まったく・・・、仕方ないわね、

「聖夜・・・特典だよ、しつかりと受け取ってね」

私はそう聖夜に言う。聞いていないかもしれないが、私はもう聖夜に会えるほど力に残っていない。あの神に力を取られてしまったのだ。このせいでもう聖夜を見守ることが出来なくなってしまった。

あの神、ノーデンスのせいでも・・・じょじょに消えていく自分の体を見ながら私は少し考え、そして聖夜の隣に転がった。

「最後の最後で幸せになれるとはね・・・ありがとう、海人」

side out

side 聖夜

「ふあああ・・・よく寝た」

そして何気なく隣を見ると、キーブレードがおいてあった。さらに、それを握ると、温かくなった。

「ありがとう」

俺は見えない誰かにそう言った

第三話 雷の滅竜魔法とナツとの邂逅（であい）

side 聖夜

ただいま俺は、盗賊団殲滅の依頼を受け、その依頼を遂行するために、ただいまその盗賊団のアジトに殴り込み、盗賊団メンバーに囲まれている。

「はぁ、面倒だな」

俺はそういうと、キープレードを出さずに、かまえもせず立っていた。

「ああ、お前余裕こいてんじゃねえよ！」

その言葉に俺はうざったそうに返した

「これか、これはキープレードの構えを俺流に改造したんだ」

俺は、不敵に笑いながら、手で来いよ、という合図をした。無論、敵は全員ブッチンしてしまい、俺に迫ってきた。

「食らえ！！」

いきなり剣を刺そうとしたが、俺はそれを雷をまとった手ではじきながら、静かに技の体制をとった

side 第三者

「雷竜の鉄拳」

聖夜はそういうと、雷をまとった手で敵を殴り飛ばしていた。

「雷竜の鉤爪」

さらに足に雷をまとわせ、その足と手で蹴ったり殴ったりしながら応戦していた。そして聖夜は、口を膨らませながら、こういった

「雷竜の咆哮」

そして、口からぶつとい電流波を放ち、周りにいるもの全てをなぎはらった。そして、煙が晴れると盗賊団は全員ぶつ倒れており、泡を吹いている者も居た

side 聖夜

「ふう、おしまいおしまい」

そして、俺にたまたまついてきたナツとハッピーが戻ってきた

「お前、一人でこれ全員やったのか！すごいな！」

「あい、すごいですね」

だが、まだ気絶していないやつがいたようで、そいつが俺に迫ってきた

「雷竜の碎牙」

俺は雷の爪で切り裂くと、手を下げた。しかし、それをナツに見られてしまった

「おい、今の技って滅竜魔法か！」

俺はナツに説明すると、その場を離れようと促した
フェアリー テイル
妖精の尻尾

「すごいな、俺以外にも滅竜魔法使えるなんてな」

「まあな」

その日、俺とナツは滅竜魔法について語り合った

余談だが、報酬は普通にもらえた。

第三話 雷の滅竜魔法とナツとの邂逅（であい）（後書き）

どうも、ちなみにあと3話くらいで原作突入です

第四話 つながるころ（前書き）

今回は自分でも深い話にしようかと思えます

第四話 つながるころ

side 聖夜

俺は妖精の尻尾フェアリーテイルに入ってからはや1カ月がたつ。そして、俺はキングダムハーツをやっていたときの、主人公ソラの言葉をふと、思い出した

「繋がる心、か」

この意味は、俺にも全くと言っていいほどわからない。しかし、なぜか心が温まる。やはりこのギルドにいるとこんな感じになるのか。それとも、俺がこの鍵キーフレードを持っているからか。その意味は自分ですら分からない。マスターにでも聞いてみるか

「さてと、マスターにでも聞いてみますか」

そして、俺はカルティア大聖堂の鐘があるところから降り、ギルドへと向かった。

ギルド内

「マスター、繋がる心ってマスターはどういう意味だと思いますか」
俺がマスターに聞くと、マスターも顔をひねりながら考えていた

「繋がる心、か…、おぬしにはなんなのかわからんのか」

その時、俺は繋がる心の次の言葉を思い出した。それは『繋がる心が俺の力になる』だ。そして、だいたい分かった俺はギルドのクエストボードにより、依頼を受けてクエストに行った。

side out

side マカロフ

あいつはなんじゃのう、なんか、わしらとはどこか浮世離れしておるの。まるで、わしらとは別の世界に居て、そこから来たような奴じゃのう。しかし、まあいいがの。

side out

第五話 裏路地には気をつけよう by 聖夜

side 聖夜

「おらおらあ！！！！まわせまわせまわせ！！！！」

いま、俺は裏路地を通っていたときに、からまれたヤンキー？に雷の滅竜魔法の新技『雷竜の天秤』を試しているところだ。ちなみにこの技は今の自分の心で判別がつく。つまり普通のときは普通に円盤を投げつけるだけ。気持ちのいい時は回復。怒りのときはまさに円盤乱舞。円盤の威力が二倍近くになり、投げる量も二倍近い。なのでほとんどやばいですね

「助けてえ！！」

「ひいいい！！」

「許してえ！！」

「ひあああ！！」

叫び声が聞こえるけど無視。

30分後

「てなわけです」

「あい、やりすぎだと思います」

「猫はだまってニャーニャーないてろ！」

俺はギルドに戻りハッピーに愚痴ると、ハッピーがやりすぎ発言をしたのでほったたけをつねる。ま、猫みたいにならないのは分かるけど

「飯でも食うか。疲れたし」

「その前にオイラから手を離してよ」

「わりいわいい」

俺はハッピーから手を離すと、カウンターへいった

「あ、セイヤじゃないの」

すかさずミラに声をかけられた。俺ってそんなに存在薄かったわけ？仕方ないのでとりあえず普通の飯を頼むと3分くらいで出てきた。はや。しかも味がおいしい。最高。その日の俺は料理の幸せにずっ

と浸っていた

余談

あのヤンキーぽかった人は闇ギルドらしく、後日、からまれたが雷
竜の天秤によって瞬殺しました

第六話 できれば必殺技の練習したい by 聖夜

side 聖夜

「ついに原作始動、か…」

俺は今、原作が始まるところを目撃した。簡単に言うとなフェアリーテイル一巻を読みたまえ！さて、後は知ってるし、訓練しよう。一応前はめんどくさがりだったけどね。

「マグノリアの外れ」

「雷竜の鉄拳」

俺は自分で作った鉄製のかかしに雷竜の鉄拳を放つ。かかしは簡単に壊れた。これも訓練の一環だ。ちなみにこの訓練は技なれという訓練で、技を早く出せるようにするためだ。

「雷竜の鉤爪」

二体目のかかしに雷をまとった足で蹴りを入れる。

「雷竜の翼撃」

雷をまとった両手で三体目のかかしを二回横薙ぎにする。

「雷竜の剣角」

全身に雷をまとい、四体目のかかしに体当たりする。

「雷竜蒼天拳」

雷竜の鉄拳を五体目に連続で放つ

「雷竜の碎牙」

六体目のかかしを雷の爪で斬りさく

「そして、最後に、雷竜の皇雷！」

残っている他のかかしを手刀状にした雷で一気に切り裂く

「ふう、これで終わったと」

そして、帰ろうとしたが、後ろに気配がしたものだから、雷竜の天秤を放つ。

「危ないのう、セイヤ」

しかし、投げた相手がマスターだったので、もう一発投げるのをや

めた。

「マスター、危ないですね、何の用ですか」

俺はマスターに要件を聞くと、マスターが一枚の紙をとりだした。

俺はそれを見てすごい嫌な予感がした

「やはり始末書…」

「そのとおり、お前に報告書が5枚ほど請求されとるぞ。その全部がああ洋館の報告書じゃ」

やはり、俺5枚書いておいてよかった。

「書いてあるので評議院に出しておきます」

俺が言うと、マスターはやれやれという顔をした。見越してやったならやるなどとも言いたそうだ。でもやるのがフェアリーテイルだよ

「では出します」

そいうと俺は評議院に向かってはしりだした

第六話 できれば必殺技の練習したい by 聖夜（後書き）

初音ミクの唄を聖夜が歌うていう感じの話を出したいけど歌詞出しちゃいけないのかな？そこを見た人よろしくお願いします

第七話 原作とセリフ関連するがそこそこはよろしく！ by 聖夜

side 聖夜

「あれ、エバルー屋敷の一冊20万」の仕事・・・、誰かに取られちゃった？」

あ、これレヴィのセリフで原作通り。次はミラが言うはずだ

「ええ・・・、ナツがルーシー誘って行くって」

しかし、これをやすやすパクリ写しで終わらすような俺じゃない

「でもそれって10000%の確率でドロボーだよな」

俺、一応当たり前です

「そうだね・・・」

レヴィ、普通の反応よろしく。さて、次はマカロフが言うはずだ

「レヴィ・・・、行かなくて良かったかもしれんぞい」

「あ！ギルドマスター」

おい、真島どうなっている。初期の言動が違うのだが。でも俺も一応聞くふりをしておくことにした

「マスター、それってどういうことですか？」

俺がマカロフに質問すると、マカロフが原作と同じですが、少し違うことを言った

「そうじゃ、セイヤ。その仕事、ちと面倒な事になってきた・・・、たった今依頼主から連絡があつてのう」

うわ、最初以外同じ

「キャンセルですか？」

これ、ミラね

「いや・・・」

そして、マスターが原作通りだが、ギルドメンバーにはすごいことを言った

「報酬を200万」につり上げる。・・・だそうじゃ」

そこで俺も一応驚きます

「マジデ！」

後は原作通りです

「10倍！！？」

「本一冊で200万Jだと！！？」

ギルド内はざわついた。原作通りのギャラリーの声も聞こえてくる。最初はミラね

「な・・・なぜ急に、そんな・・・」

「討伐系の報酬並みじゃねえか・・・、一体どうなってんだよ・・・」

「ちイ・・・、おいしい仕事のがしたな」

しかし、俺はそんなギャラリーに声をかける

「しかしなあ、ある意味泥棒じゃねえかよ。しかしそんなたかが本一冊に200万Jもって、気になってきたな」

「泥棒って・・・」

しかし、そんな会話が紡がれている間に 그레이 は独り言をもう言ってしまったらしく、俺は聞き損ねた。しかし原作では後に明かされるのだがこのとき俺は忘れていたので、マスターに聞いてみた

「マスター、なぜいきなり報酬を200万Jまでに、どういうことですか？」

俺の問いにマスターは答えた

「早急に破棄したい、とのことじゃ」

やはりな、これでだいたい思い出した。俺もついていこう。俺はマスターにナツ達が行った場所を効くことにした

「で、ナツとルーシは一体どこへ」

「シロツメの街じゃ。別に行ってもいいが報酬はもらえんぞ」
マカロフが言ったことに俺は答えた

「新入りの初仕事じゃないですか。温かい目で見守るってやつですよ」

そう言っただけ俺はギルドを出て、キープレードライドを発動した。ちなみに俺のキープレードライドの乗り物はバイクだ。そして俺はそ

れに乗ってシロツメの街まで飛ばした

第八話 エバルー屋敷編 ? エバルーのアレはアレすぎると思う。タイトルに

side 聖夜

「ふう、まにあった」

俺はキーブレードライドで飛ばしまくり、なんとかシロツメの街までついた。横を見るとナツがドヤ顔なのはなぜ？あ、俺来たからか
「お前なんできたんだ？」

「いや、面白そうだから。あとビッグニュースもあるからそれは今いない新入りが来たらしいぜ」

「そ、そうか…」

レストラン

「脂っこいのはルーシイにとっておこっか」

いや、女の子は普通野菜とかじゃね

「脂っこいの好きそうだもんね」

へ、そーいしたう風に見えるんすか？肉食系ですかルーシイは

「おおっ！！！！これスゲー脂っこい！！！！」

さすがにツツコム

「いや、その新入りはそういうの嫌いじゃないのかな……………」

そろそろかな？お、来たぞこの気配

「あ…………あたしがいつ脂好きになったのよ……………」

「お！ルー…………シイ？」

ナツが絶句しました。俺も言葉が出ない

「結局あたしって何着ても似合っちゃうのよねえ」

ガシャンやバラツ、などの音がした

「お食事はお済みですか？御主人様。まだでしたらごゆっくり召し上がってくださいね」

「……………」

「うふ」

みるとナツとハッピーがヒソヒソ声で話し合っている

「どーしよぉー！！冗談で言ったのに本気にしてるよー！！メイド作戦」

「今さら冗談で言えねえしな、こ・・・これでいくか」

その声、聞こえていますよ。ちなみに俺がルーシーに気付かれないのは気配を感じないように消しているからである。

「あの、気付いていますか金髪メイドさん」

俺がルーシーに言うときとすげえ驚いた顔した。そんなに気付かなかったの？

「あの、空刀聖夜です。どうも、今回はマスターから連絡があり、お伝えに来ました」

「何？」

俺は本来メロンのところで分かることを原作無視で行くことにした
「依頼額が20万Jから200万Jに上がりました」

俺がそういうとナツ・ハッピー・ルーシーがすごい驚いている。セリフも結構変わるな

「につ！！？」

「ひゃ！！！！！」

「くう！！！！？」

相当驚いているな。心臓に悪いぞ

「というわけで依頼主の家にGOだ」

俺がまたキーブレードライドを発動した。今度はトヨタのフリードっぽいのだよ。

「乗れ「ありえないでしょ！」ぐほっ」

うわ、突っ込まれたよ。当たり前か。そして俺達は普通に依頼主のカービイ宅へ向かった

エバルー編？に続く

第九話 R & Nの潜入一本の秘密 エバルー編？ って仮面ライダーWっぽいな

side 聖夜

というわけで俺達はエバルー屋敷へとついた。カービィの話は依頼内容だけなので、特に書く必要もないだろう

「ここがエバルーの屋敷か」

俺が言うと、木陰に隠れているナツが、

「ルーシィ失敗した」

と、言った。あいつはブサイク好きだからな。エバルーは

「使えねえな」

ナツが言うと、ルーシィが必死で弁解する

「違うのよ！！！！エバルーって奴美的感覚ちよつと特殊なのよ！！

！！あんたも見たでしょ！？メイドゴリラ！！」

そしてハッピーが突っ込む。面白いから止めない

「いいわけだ」

「その通り」

俺がハッピーに同意すると、ルーシィが叫びだした

「キーーーー！！！！くやしーーーー！！！！」

そしてナツが言う

「こうなったら作戦Tに変更だ」

「突撃ー！！！！」

「あのオヤジ絶対許さん！！！！てゆうかそ・・・それって作戦なの？」

というわけで原作六話突入

「羽・・・まだ消えないわよね」

「あい」

ちなみに俺はまたキープレードライドで背中に羽を作りそれで飛んだ

「それにしてもアンタの力ってズルイわよね・・・」

うわ、普通に言われた

「それを突っ込まれると傷つく」

と、俺が会話している間にナツが鍵を開けた

エバルー宅内部

それにしてもコソコソしているな。ナツの作戦のほうが楽そう。
(いろんな意味で)

「誰も居ないよ」

「それとりなさいよ。気味悪いから」

そしてナツが不満そうに言う

「おい、ルーシィ、まさかこうやって一個一個部屋の中探してくつ
もりなのか？」

「トーゼン!!」

そしてさらに不満そうにナツが言う

「誰かとお捕まえて本の場合聞いたほうがはやくね？」

「あい」

そんな会話をしているハッピーにルーシィがさらに言う。まあ単純
なナツをそういう気にするのは楽そうだが

「見つからないように任務を遂行するのよ。忍者みたいでかっこい
いでしょ」

「に・・・忍者かあ」

そして、俺がふと横を見ると地面が盛り上がっていた。これってま
さか・・・

ズボオオ!!!!!!

「侵入者発見!!!!!!」

「うほおおおおおっ!!!!!!」

「見つかったぁーっ!!!!!!」

今はエバルーが主人のバルゴがカタカナでいう

「ハイジョシマス」

そしてナツが叫びながらマフラーで顔を隠す

「忍者あつ!!!!!!」

「はいいいい!!!!!!?」

そしてナツが忍者のまねをする

「まだ見つかるわけにはいかんでござるよ。にんにん」
「にんにん」

それにルーシイが突っ込む

「普通に騒がしいから・・・アンタ・・・」

そしてルーシイがナツを連れていき、ある部屋に入った。俺はそれを見届けた。なぜなら俺の背後に

黒コートの奴が居たからだ。

「お前誰だ。俺にようでもあるのか」
「その通りだ」

そしてその黒コートの男はエアリアルブレードを構える。二刀流だ。そして俺もキープレード二刀流にする。そして俺達は言葉も交わさずにたがいに距離をとりあい、そして一気にぶつかった。

「ハアッ!!!」

俺がキープレードを一本振りおろし、相手はそれを2本でガードする。さらに俺はもう一本のキープレードで相手の腹にキープレードをたたき込む。手ごたえはあった

「ガハア!!!!」

そして黒コートは吹っ飛び、転がりながらナツが入った部屋に逃げ

込んだ

「まずい！今のナツじゃー」

そして、その懸念は打ち壊される。なぜなら、ナツが火竜の翼撃で南の狼と黒コートを吹っ飛ばした。さらに、黒コートは逃げるように闇の回廊を通り逃げて行った。

「なんだったんだよ。今の黒コートは・・・」

そして俺はナツがいる部屋へと駆け込む。みると、南の狼は倒れており、そこにナツがたっている

「おー、もう俺が倒したぞセイヤ、今まで何していたんだよ」

「いやさ、変な奴居たからそいつとO H A N A S I した」

O H A N A S I という単語をナツが聞くと、ナツが震えあがる。そこまで怖かったか

そして、俺達がルーシイのところへ行こうとすると、バルゴが動き出した

「何！あいつ追うぞ！」

「ナツ！それは掴んでるというんだ」

そして、俺の意識は暗転していった。と思いきや次に目を開いたときは下水道だった

「おい、これってあそこから移動したってことか！？」

そして、周りを見回すと、ルーシイ・エバルー・ハッピーが居て、ナツがバルゴを掴み俺がナツを掴んでいるという状況だ

「ルーシイ！！俺は何すりゃいい！？」

ナツがルーシイに叫びながら聞くと、ルーシイが何かに気づいたようだ

「バルゴ！！早く邪魔者を一掃しろ！！！」

「そいつをどかして！！！」

ルーシイがナツに言うのと、ナツが叫んだ。俺も殴る体制をとる

「「おう！！！！」」

俺とナツが同時に叫ぶとナツが殴る体制をとり、俺も殴る体制をとる
「どりゃあ！！！！！」

「スプラッタアア！！！！」

同時にバルゴを殴り飛ばした。みるとエバルーが超驚いている。そしてルーシィが鞭をエバルーに巻きつけた

「アンタなんか・・・」

そしてキャンサーがエバルーに向かって駆け出し、ハサミを用意する

「脇役で十分なのよ！！！！」

そしてエバルーがはげになる。つるつるや

「お客様、こんな感じでいかがでしょう？」

「ははっ」

「傑作」

そして、俺達はカービィが居る場所へと向かった

第九話 R & Nの潜入一本の秘密 エバルー編？ って仮面ライダーWっぽいな

すみません。下と言ったのになってすみません

第十話 エバルー編 ? 親の何気ない気配りって気付かないものby聖夜

side 聖夜

「こ・・これは一体・・・どういうことですか？私は確か破棄してほしいと依頼したハズです」

カービィが驚きながら本を見ている

「破棄するのは簡単です。カービィさんにだってできる」

「だ・・だったら私が焼却します。こんな本・・見たくもない！！」

そういい、本をルーシィから奪い取ると手に持った。すぐ燃やせと思ったが俺は

「あなたがなぜこの本の存在を許せないのか分かりました」

「・・・・・」

そして、原作通りに言う。

「父の誇りを守るためです。あなたはケム・ザレオンの息子ですね」

「うおっ！！！！」

「パパー！！？」

「マジ！！」

ナツとハッピーが驚く。俺はノリで

「な・・・なぜ・・・それを・・・」

カービィも驚いている

「この本を読んだことは？」

「いえ・・父から聞いただけで読んだことは」

そして、カービィは本をじっと見つめながら言う

「しかし読むまでもありません。駄作だ。父がそう言っていた・・・
・・」

その言葉を聞いたナツがカービィに聞く

「だから燃やすって？」

「そうです」

カービイは即答する。それを聞いたナツが怒りをあらわにする

「つまんねえから燃やすってそりゃあんまりじゃねーのか！！？父ちゃんが書いた本だろ！！！」

それをルーシイが後ろから抑える

「ナツ・・・言っただでしょ！！誇りを守るためだって！！」

そしてカービイが静かに言う

デイ・ブレイク

「ええ・・・父は日の出を書いたことを恥じていました。31年前・

・

俺が分からないのでカットだ

そして、そのあとはルーシイが本の謎を解き、報酬をもらわずにギルドに帰り、ルーシイが小説を書いていることが分かった

余談

このご、エバルーは逮捕され、あの土地は封建主義ではなくなった

第十話 エバルー編 ？ 親の何気ない気配りって気付かないものby聖夜（後

黒コートは、なんとなく出しましたが、ストーリーに少し絡む予定です。

感想は見た人気軽に送ってください

第十一話 Sの代償―黒コートVS聖夜 俺はどちらかつつーと東方キャラと会

また仮面ライダーWのネタです。好きなんだもんW!!

side 聖夜

「あの黒コート誰だろう。ていうか??機関やられたはずだよな!」

俺はただいまエバルー屋敷に居た黒コートについて考えていた。原作介入は阻止したが。いや、介入してくる〃ノーバディと戦うだからね。

「仕方ないし歌でも歌うか」

そして、俺はおつくせんまんを歌いだした。(注意、歌詞は著作権問題や作者の文才等々で載せることができません。)。でも途中で歌うのをやめた。なぜなら、やばい気配を感じたからだ。その気配は前にエバルーの屋敷で感じたものと同じの雰囲気だ

「またお客さんかよ、フルコースは痛いぜ」

俺は某海賊漫画のコックみたいに言ってみた。似てなかったらごめんなさい。俺の前にはまた黒コートが居た。ギルドの屋根の上だが仕方がない。相手の武器は鎌だ。マールーシャみたいだな。

「はあ、なんで休みたい時に休めないんだよ!」

そういいながら俺はいつもと違う一刀流で挑むことにした。相手が武器一個でこっちが二刀流だと卑怯っぽいな。

「.....排除する」

「こりゃレプリカ計画の可能性を考える必要があるな、まったく、俺別の世界に転生すればよかった」

そう愚痴りながらも相手の攻撃をガードし続ける俺。しかし一刀流のキングダムチェーンだと不利ですよ。

「さっさと消えろ!」

その刹那、肩に鎌がかすった

「ッ!手前許さないぜ」

もう手加減いらない。ノーマルだったのに+に格上げさせるとは、

逆鱗に触れたなあいつ

「一気に葬ってやる！」

そして相手に攻撃する隙も与えぬように何連続で攻撃を撃ち込む、そして相手が弱ってきた。俺はチャンスだと思い、リミットブレイクの体制をとる。

「終わりだ！ラグナロク！」

そして俺はキープレードを相手の真正面に向け、一気にラグナロクを放つ、黒コートは一弾目は当たらずに済んだが、二弾目からは追尾式だ。弾は次々に相手に当たり、そして相手はギルドの屋根から転がりおちた

「やったか！？」

しかし、黒コートが落ちたところを見ると、黒コートはもう居なかった

「チツ・・・葬れるところだったのに」

しかし、ギルドの屋根に穴が開いていたため、修理することになった

第十一話 Sの代償―黒コートVS聖夜 俺はどちらかつつーと東方キャラと会

次回から鉄の森編です

第十二話 Eの登場―鉄の森編上 やっぱエルザは怖いぜby作者

side 聖夜

「三人の力を貸してほしい。ついてきてくれるな」

どうも、一日ぶりの聖夜です。ちなみにこの小説では明かされていないが俺とエルザは本編開始の2カ月前にあつてたりする。

「エルザ、その闇ギルドぶっ潰せばいいんだろ、俺一人で十分じゃねえか」

これは俺。いった途端にエルザの鉄拳が飛んできたが、紙一重でかわしました。はっはっは、俺はこれでも某情報屋並みの回避力がある。情報屋ツて言えば分かるよね。折る原の人だよ。るを抜けばわかる。さらにそのあと結構グレイとナツが喧嘩したりしていて止めるのに大変でした。とりあえずマグノリア駅のところからお楽しみください

マグノリア駅

「何でエルザみたいな化けもんが俺たちの力を借りてえんだよ」

「知らねえよ。つーか助けなら俺一人で十分なんだよ」

グレイとナツが言い争いをしているが、今回は止めませんよ。つかれるし。

「じゃあオマエ一人で行けよっ！！！！オレはいきたくねえ！！！！」

「じゃあ来んなよ！！！！後でエルザに殺されちまえ！！！！」

「迷惑だからやめなさいっ！！！！！！」

おい、ルーシイのポジションかわいそうだが俺は見るだけにした。ややこしいのは嫌いだ

「何でそんなに仲悪いのよお」

ルーシイがそうついいながらため息をつく。それをみるナツとグレイ「何しに来たんだよ」

あ、当たり前っすね

「頼まれたのよっ！！！！ミラさんに！！！！」

ルーシイの回想

「確かにあの四人が組めば素敵だけど、中がギクシャクしてるところが不安なのよねえ」。ルーシイ、言って仲を取り持ってくれる？」
「ええーっ！？」

回想終了。閉店だ！がらがらガシャーン

「お前本当はナツとキャツキャウフフしたいからついてきたんだろ」

俺ってば心にもないことを言うとは、俺は素晴らしいな

「そんなわけないでしょーが！」

すかさず突っ込まれた。そしてナツと 그레이 がにらみ合っているが、それをルーシイがいたずらにエルザが来たと言ったので、無理やり仲良くなるナツ& 그레이。

「お、本当にエルザキタ」

あい、本当です。

そっからはルーシイがエルザに自己紹介し、さらにナツがエルザに勝負の約束をする。そんな感じだった。さすがに作者も疲れているので頭が回らないらしい。うん、御免

ここからはこの小説オリジナルです

列車内につき、動くところ秒でナツが乗り物酔い

「ナツ、いい加減乗り物になれような」

俺はナツの腹をぶんぐると、ナツを気絶させた（エルザと同時）

「これで楽にはなるだろう」

「……」

まあナツは置いていて、俺たちは話し始めた

「そっいえば俺ってエルザとか 그레이 の魔法みたことねえや」
嘘です。原作読みました

「エルザの魔法は綺麗だよ。血がいつぱい出るんだ。相手の」

「ハッピーグロすぎる。問題発言だ」

俺が注意する。いや、ハッピーがグロ発言すると子供の夢が壊れる
「私の魔法より 그레이 の魔法のほうが綺麗ではないのか？」

そうエルザが言うと、グレイが氷の造形魔法アイスメイクの構えをし、氷でギルドの紋章を作り上げた。一応拍手

「そついやお前の魔法はなんなんだよ」

グレイが言うと、ルーシィがさらに続ける

「そついえばバイクを出したり変な車をだしたり、どんな魔法なのか私も知りたい」

おう、見せてやるぜえ。

「ああ、俺の魔法はな、キープレードっていう武器を使うのさ。一刀流と二刀流があるんだ。あと雷の滅竜魔法」

おお、驚いてくれたぜ。言うかいがあつたぜ。そして俺達はエルザから鉄の森について話を聞いた。原作読者もいると思うがここは話しておこう

「つーかそろそろ本題に入ろつぜ。エルザ。一体何事なんだ。お前みたいな実力者が力を借りたいなんて」

「そうだな・・・話しておこう。先の仕事の帰りだ。オニバスで魔道士がよる酒場へ寄った時、少々気になる連中がいてな・・・」

ちよいと過去に戻る

「コラア！！酒遅せえぞ！！！」

「！」

「ツクヨオ、なにもたもたしてるんだ！！」

「す、すみません・・・」

女の店員が謝る

「ビードそうカッカすんな」

「うん」

ビードと呼ばれた男は自分の空のコップに運ばれてきたコップの酒をうつしながらいう

「これがいらつかずにいられるかってんだ！！！」

「ひっ！！！！」

女の店員が驚く。無理ないが

「せっかくララバイの隠し場所を見つけたのにあの封印だ！！
！何なんだよ、アレはよお！！！！まったく解けやしねえ！！！！」

「バカ！声が出けえよ」

「うん、うるせ」

ビードをある二人が忠告する

「くそオ！！」

「あの魔法は人数がいれば解けるものじゃないよ」

「あ？」

「後は僕がやるから皆はギルドに戻つてるといいよ。エリゴールさんに伝えておいて、三日以内に必ずララバイを持って帰るって」

「マジか！？解き方を思いついたのか？」

「おお！さすがカゲちゃん！！！！」

現在へと時は戻り、さらに時間の神の所為により、少しだけ未来へ行く

side 聖夜

列車

おい、原作通りかと思いきや俺も調子乗ってしゃべったら乗り物酔いしたぜ。ウゲエエ・・・、しかし見るとナツも超つらそうだ。しかも目の前には鉄の森のカゲがいる。乗り物酔いの薬あったけ。しかしないと絶望しかけたがあつたので、俺だけ復活

「てめえ何してんだよ」

「は？」

しかし、その瞬間に列車が急停止し始めた。そして、止まると同時にカゲが持っていたバッグから髑髏の笛が出てくる。あれがララバイですか

「「ん？」」

俺はノリで

「み・・・見たな」

お岩さんかよ！しかしナツの炎が熱いのではなれる

「うるせエ・・・さつきはよくもやってくれたな」

「え！？」

「お返した！！！！」

そしてナツがカゲを殴る。まったくいい仲間を持ったのかな俺？

「ちい、そろそろ列車が動く。行くぞナツ！！」

そして俺はキーブレードライドでバイクを出し。ナツを掴みながらエルザ達の魔動四輪に一気に突っ込む。無論ぶつかる前に解除してナツ中に放り込んで俺はねられた

「痛てえ、何すんの？」

あ、間違えた

「お、エルザ、なんか列車内にララバイ持っている鉄の森アイセンヴァルトの奴がい
たけどなんかナツが暴れたんで取れるどころではありませんでした」

「バカモノおっ！！！！！」

「ん！？ごあつ」

エルザがナツを張り倒して軽く20mくらい吹っ飛ばす。急展開でした

「ああ、ちなみにララバイは呪殺の音色を聞いたらその聞いた人はおだぶつになるやつ。というわけで行くぞ！！」

そして俺は魔動四輪の運転席に乗り、まあ飛ばすわけですよ。ん、変態的な意味で？おれ知らない

「ていうかセイヤ、飛ばしたらお前の魔力が尽きるんじゃないのか」

「いざとなったら棒きれ持って戦うさ」

そう言っ俺はオニバス駅まで魔動四輪を飛ばした

第十四話 ついにオリジナルです（原作のセリフ一切出ない） 鉄の森編下 全

作者卒業したぜ

side 聖夜

「ハイスラア！！！」

俺は今、原作ならエルザが戦うところを戦っています。エルザはなんか駅の野次馬の避難を促すとか。しかし魔風壁解除されて、鉄の森残党がまだ100人いるのでそいつらをなぎ倒していますが、原作に後れを取った。ちくしょー

「消え失せるザコがああああ！！！」

「ひいひい！！！」

「助けてくれええ」

しかし緩めないぜ攻撃の手を。そして俺は最近開発した自分流滅竜奥技を使ってみることにした

「滅竜奥技、雷竜絶牙！」

この技は自分の手に雷で仮面ライダーオーズのトラクローの雷バージョンを考えてくれ。電圧が相当すごいけど。え、どんくらいかって、1秒で電気麻痺で、2秒で心臓停止 3秒で脳死くらいの電圧「ハイスラア！！！」

俺は次々に雷竜絶牙で切り裂いていく。大丈夫、1秒しか触れていないから。

「ぎやつああああ！！！」

「痛いー！！！」

叫び声が聞こえるけど無視、だっていちいち聞いていたら感傷的になるから。そうして約5分後には是認片付いた。

「実験台にはよかったぜ」

そう言つて俺は思考回路読書でエルザの思考を読んだ。この能力は人の思考を『本』のように読むことが出来るのだ。それによるともうラバイは倒してギルドに戻っている様子、俺は安心してギルドに戻った。

s
i
d
e
o
u
t

第十四話 ついにオリジナルです（原作のセリフ一切出ない） 鉄の森編下 全

久々の更新です。今回の東北地方で起こった大地震でお亡くなりになられた人々の冥福をお祈りいたします。これを読んでくれた方もいるかもしれませんが。それでも書き続けます。

side 聖夜

「出せっ！！！俺をここから出せえっ！！！」

「ナツ・・・五月蠅いわよ」

「出せー！ーっ！！！」

なんかナツの身代わりのマカオが叫んでいる。でも原作とは違うように俺が細工したからな。そんなことを考えているうちにマカオがナツの代わりになっていたことがばれていた。

「じゃあ本物のナツは！？」

「ここにいるZE」

そういつて俺が座っていた椅子に水をかけるとナツに戻った。ちなみにこの能力『原子組換』は最近使えるようになった能力で、人間の原子を椅子の原子に組み替えることにより椅子に変えることができる。水をかけると元に戻るのが弱点で水関連の物では使えないのである

「おい、セイヤ、なんでそんなことした！」

「だってあれは形式だけの逮捕だからあと3時間くらいで戻ってくる！かも」

当たらなかつたら俺はフルボッコにされるかも

三時間後

よっしゃ、フルボッコにされずに済んだ

「結局は形式だけの逮捕だったのね」

「ナツが言ったら一日牢屋だったぞ、俺に感謝しろ」

そう言ったら俺はナツに殴られた。調子には乗らないほうがいいな。とりあえず今日は一日平和でした。

side out

第十五話 原作とはまた違うよ。 閉話 五月蠅いとかいてうるさいと読むb y 野

次回からガルナ島編突入するぜ!!! 多分一話で終わるけど

第十六話 ガルナ島へ行きそびれた ガルナ島編 1 修学旅行は行きそびれた

今回から原作にISを追加しておきます

side 聖夜

「行きそびれた、ISのアニメエンディング全員版聞かなければよかつたぜ。でもいいけど」

俺はなぜかこの世界でもパソコンが使えたのでISのアニメエンディング全員版を聞いていたのだ。なんかオタクっぽくて済まん。でもいいんだい。それはおいといて、今エルザが連れ戻しに行っている。俺も今日仕事しないでいきますか。だってつまらないので。しかし今回キーブレードを使わないので船さがしました。けど全然いきたがらないので魔法で脅して連れて行かせました。ああ便利ガルナ島

ついたら夜なので船ごと港へ投げ飛ばしました。いいぜ、お安いで用ぜ、悲鳴上げてたけどまあいいや。しかもムーンドリップ始まってやっているのが一人だけって、ほとんど終盤だ！仕方ないのでとりあえず月の遺跡までダッシュ。名前違つかも

月の遺跡

もうデリオラが崩れ落ちていた。リア充爆発しろ。来たかいがないので俺はキーブレード封印しても意味ないのでキーブレードライドの翼で飛んで帰りました。

マグノリア

見事に見つけたよ！なんで人が湖のところで行き倒れてるんだ！

「お前大丈夫かよ」

「お、お前は？」

いきなり名前聞いたので俺は名乗ることにした。名乗り天上だ！知らないけど

「俺は空刀聖夜。お前は誰だよ」

「俺か、俺は織斑瞬」

え、なんでISの主人公の名字と一致してんだよ、まさかISの本

編終了後の一夏の息子とかつていう設定じゃないでしょうね。これで人気ガタ落ちになるぞ！多分。見捨てないでください。そう考えなくても仕方ないので事実確認のため、親聞いてみることにした

「お前、親は？」

「父が織斑一夏」

やはりか
・
・
・
・

「母がラウラ・ボーデヴィツヒ」

「おいしいおいしい!!!!!! お前ただだよお!!!!!!」

仕方ないので家に連れ帰って尋問しました。悪く言うところの H A

NA
S
I
した

Side out

第十六話 ガルナ島へ行きそびれた ガルナ島編1 修学旅行は行きそびれた

織斑瞬の出生秘話

実は、これはラウラの血と一夏の血を混ぜてホムンクルスっぽく作ったらしい。作られた時の年齢は5歳で、ラウラがこれを使って一夏を嫁にしたらしい（一夏に結婚しないといけない状況を作った）そして本編終了の一年後から地獄の特訓をした結果、ISの世界では生身でISと戦える唯一の人間になった。使う魔法は、神魔法というオリジナルの魔法。クトゥルフ神話の神の属性が使えるらしい。一部変更されているが

第十七話 オリキャラ紹介 俺の時代が来たとか調子に乗ると大体失敗するから

織斑瞬 12歳↓14歳

魔法 ゴッドマジック
神魔法

IS ZERO

IS本編の並行世界の織斑一夏とラウラ・ボーデヴィツヒの息子。

出生方法は一夏とラウラの血+人工血液をすでに死亡していた五歳児に流し込むことで生まれ変わった。さらに一夏とラウラの遺伝子を組み込んだ。その時に容姿が変わっていて、鏡音レンの髪の色を銀色にして、瞳の色を赤色にした感じ。千冬から訓練をつけられたおかげで生身でもISと戦うことができる身体能力を持っている。

余談だが、並行世界の本編中に作られたので、両親ともども25歳前後であるのでまだ現役。一夏の息子なのでISが男でも使用できる。一人称が「英雄」または「俺」

備考 世界で二番目のIS男性操縦者

IS : ZERO :

第一形態 ロックマンゼロの黒バージョン（戦闘力はゼロの普通形態並み）

第二形態 ロックマンゼロの黄色バージョン（戦闘力は第一形態の二倍）

最終形態 ロックマンゼロの普通形態（戦闘力は第二形態の2倍）
篠ノ之束ですら全てを理解できないIS。瞬はこれを『英雄のIS』束はこれを『何世代にも該当しないIS』と呼んでいる。ロックマンゼロシリーズのゼロでありロックマンXシリーズのゼロではない。武器には近距離のZセイバー、中距離のゼロバスター、遠距離のゼロライフルがあり、その3つを収納するとデータ領域には搭載不可能になるが、右腕に四次元領域があり、そこに実弾重火器、実弾小火器、実体剣、実体ナイフなどを詰め込んでいる。ちなみに旅行用のキャリーケースやくだらないものをしまう用の四次元領域も搭載

している。

左目にはヴォーダン・オージェが宿っており、ラウラと違いON・OFFの切り替えが可能。ON状態の瞳の色が金色・OFF状態が赤色の瞳。遺伝で備わった。右目にも終わらない宿命が宿っている終わらない宿命

右目の封印を外すことにより身体能力・戦闘能力を三倍に跳ね上げる。しかし、一日に多用し続けると狂気に蝕まれ、フランドール・スカーレットの狂気状態になり、何かを跡形もなく破壊するまで再び封印されない。封印状態の瞳の色が赤色で封印が解けた状態が黒色の瞳になる。

血塗られた惨劇

両目の力を同時発動した状態。左目で敵の動きを予測し、右目の封印を解いた状態の戦闘で相手を倒す最悪の状態

織斑「なんかすごい設定だな」

壮大だろ

織斑「全然意味分からんし織斑だと一夏父さんとかぶるかもしれないぞ」

じゃあ変える

瞬「これならわかりやすい」

ちなみに瞬のISがロックマンゼロなのは作者の理想だからです

瞬「だよな」

では

瞬「すごい余談ですけど、結婚する前の父さんが鈍感でフラグクラッシャーで女子といちゃつくことが全然なかったのに、今ではラウラ母さんといちゃついている。うざい」

いいじゃん、夫婦喧嘩しなくて

瞬「夫婦喧嘩したら世界の半分が破滅する」

なるほどね、じゃあそれでは

第十八話 瞬誕生秘話 これを親から聞いたときはいろんな意味で驚いた。エヴ

side 蛇川

「そーいや瞬てさ、何故にそういう生まれ方したの？」

「いやさ、実は俺はもともと中国軍が秘密裏に制作してた人体兵器なんだよね」

「はあ！？」

俺は瞬の言ったことに驚いた。ISの世界だからってすごいこと起こるな。ていうか中国軍どんだけだよ！中国自体は悪くないけど「ようは、女性だけが使用できる兵器なのがインフィニット・ストラトス、略してISなのは、お前も知っているだろう」

「おう」

俺は普通に知ってることなのでうなずいた

「でもコアがあることでISの最大数が500以下くらいなんだ。コア製造法を仕っているのは篠ノ之束だけ、だから各国も狙っている。しかしそれを人体で補えたら？という考えが浮上してきて出来た計画が、『人類製造計画』なんだ」

なんかエヴァンゲリヲンの人類補完計画みたいだな、と思ったが口に出さないようにした

「で、その魂胆は？」

「こゆこと、自分たちで作ったクローン人類を使用してコアが製造できないか。ということだ。そしてそれには世界唯一のIS男子操縦者、俺の父さんの織斑一夏だ。遺伝子学や血統上はね」
てゆーか遺伝子と血まで精巧に作るとは・・・恐ろしい中国科学省。しかし一夏とクローン人類製造計画に何の関係が？

「ようは男子操縦者の血と細胞を使ってクローン人類を製造すれば、それで男子操縦者をこの国から出すことができるし、なおかつ出来損ないはコアにも使用できる。一鳥二石だ」

「で、なぜラウなんだよ、他の奴でもよかったんじゃないね」

道理で考えるとおかしい、俺はそう考えて瞬に聞いた

「いや、母さんの左目なのさ、キーは」

「左目・・・なるほどな」

俺はだいたい読めた。ラウラの左目と同じ細胞を組み込めばさらに人間の質が良くなったとも言えいいだろう

「そう、左目に宿るナノマシンの製造方法をドイツから盗み、中国の何千年物歴史の中で黒歴史と呼ばれた時代の遺産、『終わらない宿命』を使って生み出されたんだ。でもこの計画は中国首脳によって非人道的であるあるといわれて事実上は永久凍結したんだ」

「ちよとまで、じゃあお前どうなんだよ」

俺は驚いて瞬の目と鼻の先まで顔を近づけた。しかし殴られた

「話し終わってない。つかこれからが本題」

「あ、なるほど」

俺は頬をさすりながら言った。心なしが頬がすごい晴れている気がするが、気のせいにしておこう

「でもやめない科学者が暴走して俺を作り上げて、その処分にこまり、日本のIS学園に送り込んだんだよ、御丁寧に血統書付きで」

「それでか、一夏がラウラと無理にでも結婚しなくてはいけないわけとは」

「ビンゴ」

多分大変だったろうな、一夏。

「そして左目にはナノマシン、右目には魔眼が宿るすごい人間になつてしまったわけ。さらに血のせいで容姿が変わったんだよ」

うん、魔眼とかすごい、てか中国とかどんだけだよ、首脳偉い、俺尊敬する。マジで

「一夏父さんは毎日女子に追いかけまわされて、その経験から身を固める決意をしたんだってさ」

「うん、もう分かったからやめてくれ、怖い、女子怖くなるからもうやめて」

その夜、一夏が苦しんでいる夢を見ることになった

s
i
d
e
o
u
t

第十九話 瞬が来たわけ。今回ネタばっかだから見たくないなら戻るボタンを押

side 聖夜 多すぎだろこいつ視点とか言われても主人公なので仕方ない

「瞬ってどうやってきたんだよ」

「目の前に幼女が現れて、お前は这个世界行つとけとか言われてダツシュで逃げて母さんと父さんに聞いたたら、『3年間くらい修行してこいや雑魚息子』と言われてほっぽり出された」

おい、どんだけ厳しいんだよ瞬の両親。いくら一夏とラウラが両親でも流石にありえねえ！うん、この話は夢だ。夢の・・・筈だ

「うん、その後君にO H A N A S Iされてさ、それで現実だと理解した」

ああ、O H A N A S Iは俺の最大奥義の一つだからな。うん「あとさ、俺の部屋で驚いたことがあるんだよ」

「俺も、なんでこの世界にパソコンとかフェアリーテイルの単行本やPSPもろもろがあるんだよ！しかも初音ミクプロジェクトイヴァセカンドに鏡音リン・レンに人間失格が収録されてないんだよ！俺はリンちゃん命なのによお！！」

そう言いながら瞬は3DSを取り出していた。ちなみに2D設定です。なんで持ってきているんだか・・・。

「ぶっ壊すぞその3DS」

「黙れ」

なんかIS展開しているぞ。怖いんだか黒いゼロ。覚醒後みたいででもこれが第一形態だからな。最終形態だと流石に無理。

「でもさあ、さっさと俺帰りたい。ていうか今すぐダツシュで帰りたい」

うん、今日はもう俺帰ろう。そしていつかこいつはライアーゲームに参加決定だよ畜生。それにしても今回ネタばかりで読者さんもあきれていることだろう

s
i
d
e
o
u
t

第十九話 瞬が来たわけ。今回ネタばっかだから見たくないなら戻るボタンを押

空刀「すみませんでしたあ!!!」

聖夜「次回話はネタなしで行きます」

side 聖夜

「ギルドを壊したのが幽鬼の支配者の滅竜魔道士だろ、瞬」
ファントムロード

「ああ、あとまた転生者だよ、それも顔見知り」

瞬が人間をぶら下げたと思いきや、作者の別連載の主人公の蛇川乱太だった

「蛇川何でここに居る!？」

「いや、作者の別連載がダメになったからこちらに投入された。ま、そんなメタ発言は置いといて、仲良くしようぜ」

おい、何なんだよ作者。しかしそんなのきな時ではなく、もうナツ達がギルドに殴りこもうとしているときだった。さらに蛇川は一カ月くらい前からギルドに加入していたらしく、ばれないように存在感消していたらしい。

「さっさと突入するぞ」

「お前仕切ってるんじゃないえ!」

俺と蛇川は瞬に突っ込んだ。そして三人でDASHしてナツ達の後を追った

side 蛇川

幽鬼の支配者 支部ギルド

「行くぜえ!! 炎舞斬!」

「砕ける! 地の神ナイアトホテップ!」

「火竜の鉄拳!」

「アイスメイク ランス!!」

「雷竜の咆哮!」

俺達はまさに乱舞状態になり、幽鬼の支配者の雑魚どもを蹴散らしていく。楽しいねえ、つか俺はこの世界に来るために生まれてきたんじゃないかと思う。後ろを見るとナツがガジルに殴りかかっていた

「俺が妖精の尻尾フェアリーテイルの滅竜魔道士だあ！！！！」

いや、聖夜もいるのだが・・・そして聖夜がナツの頭を踏み台にしてガジルを殴った

「ヒャツハアアア！！！！さあ始めろ！開け狂乱の舞台！」

聖夜が3重の魔法陣を作り出し、そこから大槍『クルセイド』を出して貫こうとしたが、その大きさゆえに動きが遅くなり、相手をとらえるのが難しい。俺は適当な魔法陣を描くと、詠唱した

「氷王の力を持ちし者よ、我の前に馳せ参じろ」

「竜は強いね」

俺の仲間、参太空を召喚する。こいつは寒いダジャレをよく出すが、最近スランプ状態らしい。ダジャレをいわないのはそのせいだ。

「聖夜をサポートしろ」

「あいあいさー、アイス・クルセイド・ランス」

参太は聖夜が持つ槍と同じ大きさの槍を氷で作り出し、そしてガジルの後から槍を突きかかった。しかし、ガジルは気づいて上へ飛び上がったが、氷の槍から無数の刺が出てきて、ガジルを狙いながら刺が伸びていくが、ガジルはそれを鉄の腕で振り払う

「また獲物がふえたな！！」

ガジルがそう叫ぶと、参太の腹に鉄竜混を放ったが、参太はぎりぎり氷の分身で入れ替わっていた為に無事だった

「そろそろ戻ってもいいかな？そろそろだしね」

「いいぜ、ご苦労様でした」

参太を戻すと、エルザの声が聞こえてきた為、出口に近付き、一気の外を出て、6重魔法陣を展開した

「蛇川、何しているんだ？」

「プレゼント」

そしてギルドの全員が撤退したのを確認すると、エネルギーチャージを終了した。

「クラスタアアアアキャノオオオオン！！！！！！！！」

クラスタアアアアアキャノオオオオン！！！！！！！！ファントムロード 漆黒の砲撃が幽鬼の支配者のギルドを包み込

み、そして

一瞬で灰にした。

「プレゼントを差し上げるよ」

そして俺はギルドへ戻った

side out

オリキャラ紹介 蛇川乱太っていう名前は江戸川乱歩が元ネタらしいb y蛇川

もう最後のオリキャラ紹介になると思います。多分オリキャラもう
出ない

オリキャラ紹介 蛇川乱太っていう名前は江戸川乱歩が元ネタらしいb y蛇川

蛇川乱太 16歳 男

魔法 神の力 召喚系魔法

前の世界が学園都市のような世界で生きていたため、神の力が使える。しかし学園都市ではない。素性は一切不明。

神の力

全属性を操ることはもちろんのこと、人を生き返らせること・怪我を治すこと・そして神殺しの武器を製造することも可能な力。しかし、蛇川は「フェアじゃない」と言って人を生き返らせることや神殺しの武器を使うこと・自分を治癒することはいらない。召喚系魔法は元いた自分の世界から召喚する。ちなみに無から有を作り出すことが可能で、武器もその力を使用して製造して、戦闘で使うことが可能

備考 蛇川が使う召喚魔法の仲間たちとは転生前に不良グループ「スネークバイト」のリーダー。実はいろいろな世界に行っており、フェアリーテイルの世界の前はゼロの使い魔。最初に行った世界が

禁書目録

容姿

灼眼のシャナを緑髪にした感じ。背はシャナよりは少し高め

召喚系魔法

参太空

容姿 イナズマイレブンのガゼルの背を高くしただけ

氷系の力が使える。

駆動疾風

容姿 ハヤテのごとくの桂ヒナギクの髪を黒色にした感じ。服はGパンに半袖のTシャツにジャケット

自分の走る速度を鈍足から音速まで上げられる

都山修太 男

容姿 灼眼のシャナの坂井悠二の髪を赤色にした感じ

物を撃ち出す能力を使う。普段は空気・その場にあるものを撃って戦う

相山遼

容姿 イナズマイレブンのバーンの背を高くしただけ。顔の線は消えている

炎の力を使える。参太とは犬猿の仲

神咲紅葉

容姿 鏡音リンを長髪にした感じ

雷系の力が使える。

蛇川の必殺技

刀・剣

炎舞斬

炎をまとった刀で相手を斬る。斬られた相手は燃え尽きる

氷海斬

冷気をまとった刀で相手を斬る。斬られた相手は凍りつく

風神剣

風をまとった刀で相手を斬る。斬られた相手は体内から風で切り刻まれる

銃

ライジング・シューター

黄色の砲撃を撃つ。属性は雷

アルファ・ブレイカー

黒色の砲撃を撃つ。属性は闇

レイン・ショット

銃を上に向けて撃つことで、撃った弾が上空で分裂して降り注ぐ
双剣

百花繚乱・風舞

風を二本の刀にまとわして攻撃する。次の百花繚乱・炎舞につなげることもできる

百花繚乱・炎舞

炎を日本の刀にまとわして攻撃する。次の百花繚乱・絶牙につなげることもできる

百花繚乱・絶牙

右の剣に光・左の剣に闇をまとわして攻撃する。

奥義 百花繚乱

百花繚乱・風舞↓百花繚乱・炎舞↓百花繚乱・絶牙につなげて攻撃することで奥義・百花繚乱になる。

以上

オリキャラはもう出ません

蛇川「なぜ？」

「ごちゃごちゃになるだろ！四人とか五人とか出したら。それにお前が出す召喚系もたまにしか出ないから。あと、幽鬼の支配者編が聖夜視点・楽園の塔編が瞬視点・B・O・F・T編が蛇川視点という風に変えていくかもしれないのでよろしくお願いします」

蛇川「ジャンジャン感想・批判よせてねー、なお、もう載せたことは変更できません。そこを踏まえて送ってください」

第二十一話 幽鬼の支配者編2 爆弾の中で好きなのはダイナマイトですbV

作者の活動報告に重大発表追加。ぜひ読んでください

side 聖夜

マグノリア ギルド内

「今度は爆弾魔水晶ありったけもっていくんだ！」

「倉庫から所持系魔道士用の強力な魔道書を持ってこい！」

みんな殺気立っているね、蛇川と瞬もどっかいつちゃうし、それに蛇川は刹那の登場みたいなもんだ。原作だとそろそろファントムがギルドで来るんだっけ。そこら辺はあやふやなんだよね。

「外だー！！！！」

なんかアルザックが叫んでいる。お出ましですか、さて、行きますか。血塗られた戦場に。

side out

side 第三者視点

聖夜が外に出ると、幽鬼の支配者の本部がロボットになって歩いてきていた。ギルドの面々は驚いているが、聖夜は原作を知っているので平然としていた。

「魔導集束砲だ！！！」

「ギルドを吹っ飛ばすつもりか！！！」

聖夜は目にもとまらぬ速さで原作ではエルザが立っていた場所にいた。た。

「セイヤ、どうするつもりだ！？」

「簡単じゃね、止めるんだよ」

平然と、「ゲームするんだよ」とでもいう風に言った

「セイヤ、無茶だ！」

「いくらお前でも死んじまうぞ！」

しかし、時は待たずに魔導集束砲は発射された

「全員伏せろ」

そして、聖夜の目の前には砲撃が迫ってきていた

side out

side 聖夜

みんな大げさなんだよ、こんなの魔力の塊だろ、こうすりゃいいんじゃないね

「ライトウォール!!」

俺が最近習得したキーブレードを軸にした、光の造形魔法だ。闇バ―ジョンもある。でも魔力を結構使う（普通の魔道士の単位で）のであまり使わないが今回は特別だ。

「ダラツシャアアア!!」

叫びながら砲撃を押し返すと、空の彼方まで追いやった

味方「・・・・・・・・」

敵「・・・・・・・・」

全員無言だけど、原作通りに進まないね

「セリフまだ？」

「な・・ならばさらに特大のジュピターをくらわせてやる!!!!!!装填までの15分、恐怖の中であがけ!!!!!!」

「何!?!」

「ジュピター、また撃つのか!?!」

「く・・・・・・・・」

俺はライトウォールで魔力を使いすぎたらしい。今のジュピターを押し返すのに無駄な魔力を大量に使ったらしい。

「グレイ・・・・、聞こえるか」

「どうしたんだよ! セイヤ」

俺はグレイに伝言を託すことにした。これでこなかったら俺はおしまいだ

「今すぐ瞬か乱太を呼べ・・・・」

そして俺の意識は静かに闇に落ちて行った

side out

side 第三者視点

「お・・おい、聖夜でも一発が限界ってことは、二発目は誰にも防げないぞ！」

そして幽鬼の支配者のギルドからは兵が次々に降りてきた

「ありえねえ・・仲間ごとジュピターで殺す気なのかよ」

「お・・・脅しさ・・・撃つハズねえ・・・・・」

「いや、撃つよ。あれはジョゼの魔法、幽兵^{シェイド}・・・人間じゃないのさジョゼの作り出した幽鬼の兵士」

カナの声を聞いたギルドのメンバーはそれぞれ驚きを隠せなかった。そして、それと同時に聖夜が目覚めた。

side out

side 聖夜

魔力回復が早いな、これも神から授かったチート能力ですか。いいね、チート最高。

「お前、復活早いな・・・」

「さ、さつさと倒そうぜ、あいつらをよお！！！」

俺はそういうとナツより先に幽鬼の支配者へと乗り込んだ。ちなみに免免丸は倒さないでナツに倒してもらうよ。面倒だし、瞬殺だけと魔力を使いたくないんだよね。俺は先にアリアを倒しておくことにした。骨がありそうだし、強いし。

「どーこーかなっ、ここかなあ」

俺はアリアを適当に探すとナツがアリアに出会った場所についた。

そしてアリアがいたわけですよ。セリフは飛ばさないね

「悲しい・・雷竜^{ライジング}の首を私にくれるとは」

俺は原作開始前の3カ月だけでナツと同じくらい知名度がアップしていた。うれしいけど次のセリフで君の命はおしまいだと思うアリア「わが名はアリア・・エレメント4最強のまどうs」五月蠅い、

その口を閉じろ、酸素の無駄」ぐほお！」

アリアの弱点は近接戦なので、滅竜奥義で決着をつけます。はい技の名前は新しい滅竜奥義ですよ」

「滅竜奥義、王牙・雷竜剣！！！！」

この技は25巻で出たガジルの滅竜奥義と同じように雷の剣をたたきつける技だが、威力が雷竜の皇雷の二倍くらいあるのだ。だから魔力も結構使うが、今回は威力1.5倍にしたので大丈夫、消費魔力も控えめだから。

「ぐ、ぐああああ！！！」

あっさりアリアは倒れた。とりあえずアリアの魔法はコピーしたので魔力を少しだけ残しておいた。さてと、あとはジョゼを殺すだけでいいか。

side out

第二十三話 幽鬼の支配者編3 名前に神という字が入っているとその名前を付

遅れてすみません

side 聖夜

「おお！セイヤ！その後ろに倒れている奴倒したのか！」

俺が後ろを見るとナツ＆ハッピーが走ってきた。ていうか漢字読みできねえのかよ。でも顔に出さないようにしている

「うん、この先にガジルがいると思うからいけばぶっ潰すことが可能だよ」

例により

「おつしやあああ！！！」

こうなった。さてと、エルザが来るまで待とう。と考えた矢先に来た。原作とは違いミラ・グレイ・エルフマンを引き連れている。原作ブレイカーするな。

「おお、お前らもう終わったぞ。これで煉獄^{アビス}砕破は消滅したんだろ」

「……何で知ってたんだ！？」

おお、はもった。そして変な魔力を感じると背後には誰だっけ、忘れた。

「あいつ誰？」

「忘れたのかよ！ギルドをあんなんにした幽鬼の支配者のギルドマスター、ジョゼだぞ！」

ああ、あの上顎君ね、俺がフルボッコにしてあげる

「まさかここまで楽しませてくれるとは正直、思っていませんでしたよ。さて……楽しませていただいたお礼をしませんとなあ」

ここでジョゼはわざと一回言葉を切り

「たっぷりとね」

そして原作通りの展開

「よけるオ！！！」

俺は避けたけどエルフマンとグレイに直撃した。

「がはっ」

「ぬああ」

まあ避けられないのも事実かな。相手はギルドマスターだしね。でも、お礼をしなくちゃね

「さてと・・・お前に俺からプレゼントをやるのかな」

「まさか私と戦おうなんて思いませんよね。カス」

ブチッ

side out

side 第三者視点

「カスだと、この俺がか？」

聖夜はそう言いながら戦闘態勢に入っていた。そして、

「雷竜の咆哮」

口から雷撃を放つ。しかし、ジヨゼはそれを普通に避けた。右への緊急回避で避けた。

「出来たんだ。次はこれでどうかな、雷竜の天秤」

聖夜は雷のチャクラムを投げる。しかもいつもの二倍という怒り状態。しかし、この上が存在しているらしい。

「ふふっ、そんな攻撃「うるせえ、酸素の無駄。口を閉じる。呼吸するな」グフアア！！！」

ジヨゼは聖夜の雷竜の天秤からの追撃を受け、見事に吹っ飛んだ。そして、爆発した。

「きたねえ花火だ」

ちなみに聖夜は追撃の間に小型爆弾魔水晶を改良し、小型でも大型の力が出せる改造版をジヨゼに張り付けていたらしく、それで爆発。そして空域を使用し魔力を死なない程度に空にする。

「おらおらおらー害虫退治だ」

「「ひどい・・・」」

見事にリンチをしていた。そしてマスター登場

「セイヤ・・・なにをしておるんじゃ？」

「お、マスター終わりました。さっさとギルドに帰りましょう。いまならー」

その瞬間、轟音が轟いた。それはギルドが壊れる音ではない。それはさつき鳴り響いた。今のはナツがガジルを倒した音である。

「終わりました。帰りましょう」

聖夜はそう言いながら音も無く飛びかかってきたアリアを殴り終了

side out

side 聖夜

あとは原作通りで、こつてり評議員にしばらく。OHANA

SIよりはきつくなかったけど。そして、まあギルド復興という

わけだよ。それでは、こちらへんで

side out

第二十三話 幽鬼の支配者編 3 名前に神という字が入っているとその名前を付

次回は幽鬼の支配者編後日談です

第二十四話 幽鬼の支配者編その後 多分俺はオタクだと思うb y作者（前書き

今回は聖夜視点でギルド再建中を再現してみたいと思います（できるかな・・・）

第二十四話 幽鬼の支配者編その後 多分俺はオタクだと思うb y作者

side 聖夜

「重いぜ、重量すごつ！！」

「仕方ないだろ」

「そうそう、ギルドを再建するんだからこれくらい我慢我慢」

俺たちはギルドを立て直すために頑張つて木材を運んでいる。肩こり確定だが仕方がない。ま、楽園の塔は俺が言つて、バトルオブフェアリーテイルは乱太に任せとけば安心だろう。俺はジェラルルを救うことにした。かわいそうじゃん、無期懲役とか死刑とかはさ。

「おい、無駄なこと考えずに働け」

蛇川に怒られた。瞬に変えようかな

side out

side 瞬

「あゝ、満天の星空だな」

俺は星空が見えそうな草原にいる。ちなみに闇の回廊使いました。それにしても星空を見ると心が素直になるな・・・帰りたいな、あの家に、母さんや父さんのいる、あの家に。しかし帰ると怒られるので帰らない。ていうかあの幼女のせいで帰れない。父さんと母さんの会社倒産しろ。それがいい。そして普通の生活に戻る・・・わけないか。ま、とつとと終わらせて父さんと母さんを驚かせてやる！

side out

side 蛇川

「はあゝ、スネークバイト再建かと思いきやこれだよ。仕方がないか、あいつらは精神年齢低くて危なっかしい。瞬はともかく聖夜は死にかけることをするかもしれない。あいつに死を一回だけ無効にする魔法をかけておくか」

俺はそう決定すると空に浮きあがり、マグノリアへ飛んで帰ること

にした。こっちのほうが早いしな

「それにしても、本当に二次元に来たんだな。ショッキングでも何でもなく普通だからな。命は変わらないし生活も変わらないしな」
命は変わらないとは、命の重さが変わらないということだ。まあ、命の重さを大切だからな

side out

祝！60000PV突破！ 長かったよ・・・by作者（前書き）

連続投稿です。闇を狩る少年のあとがきのノリで行くことにしました

祝！6000PV突破！ 長かったよ・・・by作者

聖夜「祝！」

蛇川「6000」

神咲
P
V

参太「突破」

「**駆動記念！！**」

相山「というわけDE」

都山「連続投稿で！」

瞬「スペシャルダアア!!!」

ルーシ「なんかノリノリな人が！」

空方「ウィィィィィ！」

ハッピー「なにあれ！」

瞬「オッ
シャアアアア！」

グレイ「シュン大丈夫か!？」

蛇川「嬉しいッッッッ！！！！」

エルザ「ケーキおいしい」

聖夜「主人公として嬉しいッッッ！！！」

「お前ら大丈夫か!？」

空刀「というわけで、飲めや歌えやさあ騒げ!!」

「ウイイイイイ!」

というわけでここから馬鹿騒ぎが始まった

空方「コカ・コーラzer o つめええ！」

「いや！コカ・コーラ本家だ！」

空刀「zero!!!」

「**駆動 本家！！！！！！**」

ここでは空刀VS駆動が始まり・

参太「長年の決着をつけよう」

相山「その通り」

さらに因縁の対決もあり

蛇川「黒歴史なんかアッアッアッアッアッアッアッx!!」

神咲「ウワアアアア!!」

都山「アアアアアッアア!!」

さらに黒歴史の3人が抱き合いながら泣いている始末

聖夜「カオスだ・・・」

瞬「失敗だろ・・・」

ナツ「勝負だ空刀!!」

空刀・駆動「うっさい!!」

ナツ「ぎゃあああ!!」

聖夜「お開きだな。こりゃ」

エルザ「ケーキおいしい」

瞬「エルザはそれかよ!!」

というわけでその一時間後

蛇川「なあ空刀・・・」

空刀「なんだよ、蛇川」

蛇川「俺もなんだかんだで不死鳥のように復活しているからな。お前のバカ行為に最後まで付き合ってやろう」

空刀「よろしくな！」

蛇川「おう！」

二人が友情を再確認しました。というわけで次は十万PV記念だ！

第二十五話 やっぱお化けは怖い 俺も怖いのは嫌いby作者

side 蛇川

「今回の依頼って？」

俺は今回、とある魔獣を討伐することになった。なんでも、その魔獣は飛んだりするらしく、油断をしないほうがいいらしいと依頼主から言われた。なんでも、グレイズドアとかいうらしく、なんかかつこ悪い。というわけで討伐に行きます。

ネズレイアの巣

「グオアアアアー!!!」

「うるさいです、どうしよう」

俺はとりあえず双剣を取り出し、三連奥義を繰り出すことにした

「百花繚乱・炎舞」

炎をまとった双剣でグレイズドアを斬りつける。右で一発斬り、そして、左でも一発斬る。

「百花繚乱・風舞」

風をまとい、さっき炎舞で斬ったところを再度、斬りつける。これで土台は整った。最後は美しく、それでいて相手にダメージを最大限与え、倒すようなフィナーレにしなければならない。

「百花繚乱・絶牙」

右に光、左に闇という対になる存在を合わせ、それをを用いて倒す技。光は体外、闇は体内を滅ぼしていき、最後には何も残らなくなる。

「ハアアアアアー!!!」

何回も傷ついているところを斬る、斬る、斬る……。何連続で斬ると、だんだんと形が消えていく、そして、グレイズドアは消え去った。

「依頼終了だな」

俺はその場を立ち去ると、証拠として倒す前に取っておいた角を持つていった。報酬は受け取らなかった。なぜなら、その村は貧困に

困っており、報酬を受け取ったら、壊滅確定だからだ。後日、別の依頼で受け取った報酬を全額送っておいた。人助けすると気持ちがいい。

side out

第二十六話 楽園の塔編 1 楽園とかいて紅魔館と俺は呼んでしまうb y 聖夜

東方キャラが一人です。

第二十六話 楽園の塔編1 楽園とかいて紅魔館と俺は呼んでしまうby聖夜

side瞬

「ふぁゝあ、聖夜、なんで俺まで原作イベントに巻き添えなんだよ」

「エーテリオンを防ぐ要員だ」

「ひでえww」

俺は何故か聖夜につれていかれ、楽園の塔編介入することになった。正直エーテリオン防ぐのは、不死身化しないと無理かも。聖夜のほうは蛇川に一回だけ不死身になる能力を授かってOKらしい。でも海がきれいなので許す

「海がきれいだな」

「そういいながらクトウルフの気を出すのはやめてくれ。周りが発狂していくだろ」

お前は無事なのかよ！？まあ聖夜はある事件でフランドール・スカレットとかかわり、狂気を自分も取り込んで耐性がついたらしい。なんで取り込めたかは自分でもわからないらしく、聖夜曰く「よく分からね。そのうちわかるでしょ」と言っているので気にしない。

「聖夜のほうが出してる」

「すまん、制御するの忘れた」

お前のほうかよ・・・、出してたの。聖夜は用があるとかないとかでどこかへ行った。さあて、楽しまなくちゃな！

sideout

side聖夜

「んで、要件はなんだよ、紅魔館の主、レミリア・スカレット」

「相変わらずフルネームで呼ぶのね・・・あと、その狂気をしまいなさい」

相変わらずこいつはなんかわからん？俺は狂気は一応しまった。なんか呼びつけてきた。レミリアの背後には咲夜がきちんと控えて、

日傘をさしている。

「当たり前だろ」

「また弾幕ごっこでもする?」

「拒否」

グングニル防ぐの大変だったからな。でも何故呼びつけたのかわからん。

「あなたには、紅魔館の門番をやらせてあげ」「拒否」やっぱりね・

「それに紅美鈴がいるだろ」

「あいつは使えない」

「ひでえww」

相変わらず美鈴の扱いひどくね?でもいいや。俺はその場から立ち去ろうとすると、頬が少し切れ、血がにじんでいた。おそらくこれは、咲夜だろう。

「まだ話は終わってないわ」

「いや、ナイフ投げるのやめてくれ。で、何?」

どうせ、フランの教育係だろ、あれやりたくない。命が惜しい

「あなたにはフランのきょういk「いやだよ」あら、そう・・・」

「本気で帰らせてくれ、原作のストーリー中なんだよ。それが終わったらずし話せなくなると思っし、あとフランの教育係なら、原作終了後にいくらでもやってやるよ」

「そう、その言葉、忘れないでね」

そう言っつとレミリアは俺が瞬きする刹那に消えていた。咲夜も一緒にいなくなっていた

「忘れないでおこう」

俺はそういうとその場を去った。

side out

第二十六話 楽園の塔編 1 楽園とかいて紅魔館と俺は呼んでしまうb y 聖夜

なんか口調あまり分かんかった。すみません

第二十七話 楽園の塔編2 俺の家の近くでホーホー梟っぱい鳴き声がするb

今回は瞬VS梟です

第二十七話 楽園の塔編2 俺の家の近くでホーホー梟っぽい鳴き声がするb

side瞬

俺は今、楽園の塔に突入してからISで飛んでいる。これなら先にジェラールを殺すことができる。と、思った矢先に左から変な物体が飛んできた。

「お・おい、まさか、あいつは!？」

「ルール違反は許さない！ホーホウ」

やはり梟か！あいつ嫌いなんだよ！仕方ねえしとりあえず塔の中に入るか！俺は塔の中に入ったが、いきなり攻撃をくらった。まあギリギリで回避したけど。俺はISを第一形態から第二形態へ変えるとゼロバスターを使い梟めがけて撃つ。しかしそのでかい体からは想像もできない速さで回避した。あのロケットが邪魔だな！あれのせいで速さが格段に上がっている！

「やはり貴様を生かしておけぬな。正義戦士が今日も悪を葬る！」

「手前が悪^{てめえ}だろうが。暗殺なんかしやがって」

そして戦闘勃発。

「ジャステイスホーホウ!!!」

「火の神クトウグア！ナツクル!!!」

強烈なパンチと炎のパンチがぶつかり合い、小規模な爆発が起き、その爆発により煙が巻き起こる。ちなみにIS状態でも魔法は使える。

「ジェットホーホウ!!!」

「地の神ナイアラトホテップ！ウォール!!!」

梟の突撃を土の壁でふせぐと、後ろに飛び退き、手を前に突き出す。こいつで決着をつける！

「無の神アザトース！キャノン+禁忌！」

魔法陣が5重に展開され、それぞれの魔法陣の一番外枠の円が色で全部みたされていく。これで準備OKだ。

「無駄なあがきを！ジャステイスホーホホウ！！」

まだ正義とか言ってるよ。君はとっとと逝きなさい。そしてゼロバスターもチャージを完了させた。

「終われ、終焉より来たれし魔物の咆哮」

ゼロバスターの弾とキャノンと同時に放つ。なんか適当にかっこよく試してみた技なのだが、相当威力があるのでこれは必殺技でいいだろう。そしてキャノンが消えると梟は倒れており、それは勝利を意味していた。

「さてと、次行きますか次」

俺はまた空中に出ると、浮遊能力を使い、また上を目指し飛んで行った。

side out

第二十八話 楽園の塔編3 神格化すると大体邪神だけど俺は創造神になっちや

今回で聖夜が神格化していることがあかされます。そしてあとがき
劇場誕生

side 聖夜

「殺す」

もうなんかジェラルル殺せばよくなってきた。俺は神状態になり、ジェラルルを呼び出す。体育館の裏に呼び出すとかのあれじゃない。能力で無理やり転移させる

「人の苦勞を分かりな・・・俺の説教を聞くことにより、善の行いを積むのだ・・・」

少年説教中！グロテスクすぎて描写を書けません

「というわけでエーテリオンの発射を中止しろ。俺の説教など軽いものだ。あの説教だけは二度と・・・」

「ワカリマシタアアアアア！！！！」

ジェラルルはエーテリオンの発射を中止したようで、エルザ達に土下座したらしい。俺直伝です。

というわけで楽園の塔は急遽終了（聖夜のマジギレにより）これから聖夜が何故神の力を持ったのか説明します。

幻想郷。多分2か月前

「霊夢の野郎に金とられた・・・最悪だ」「ヒュウウウウ！！！！！！！！！！」ギヤアアアアアアアア！！！！」

俺は変な光の柱をくらった！！でも不思議に痛みがなく、代りに力がみなぎってくる。なんでだ？まさか創造神級の力を得て創造神になったとかないよね？

「その通り。今の君は創造神だよ」

「・・・なるほど。ツテイウカアアアアアア！！！！！！」

「普通の人間じゃないと思ったけど、人違いかな。ロリータ神から転生者とか聞いたけど」

やっぱりあの俺を転生させた神かよ！？

「僕はニヤルヲトホテップ。千変と呼ばれているよ。君は？」

「俺は空刀聖夜。普通の転生者だが、今は創造神になっている。カオスって名乗ろうかな・・・」

ニャルラトホテップは苦笑いをして聞いた。でも名乗る神の名前は変えました。ガグエルとかいうらしい。かつこ悪いが仕方ないだろう。「さてと、創造神ガグエル君？君は四十六億年前まで戻ってもらうよ。そして別世界を作って修行してきてね。終わったらこの時間に戻ってきて。以上」

そして、四十六億年前へと飛ばされた俺は、創造しまくり、戻ってきたときには規格外能力を手に入れていた。

～回想終了～

「というわけだよ蛇川」

「最終的に神になってるな」

「うん、でもいいや」

「いいのかよ!!」

俺は蛇川を驚かし、そして自分の影にもぐりこむと、シャッガイの神殿へといった

side out

第二十九話 最近天元突破グレンラガンの空色デイズを神だと思っ件について

side 蛇川

俺はとある事件が原因でデイケイドになった。まあ理由はお教えしないが。ちなみにソウルライドとか使える。友達を呼び出すことだね。というわけで今から瞬と模擬戦のOK？

「というわけで、やりますか

「そうだね」

瞬が黒い笑いでISを展開する。負けたらやばい

「全力で行っちゃうよー」

カメンライド デイ、デイ、デイ、デイケイド

「ははは、瞬だけに瞬殺してやるぜ」

「ダジャレ寒いから殺す」

俺は電王のカードを取り出すと、ベルトのバックルにいれる。

カメンライド デ、デ、デ、デンオウ

「俺、参上！」

「黙れー」

いきなりゼットセイバーを使い攻撃してくる瞬。俺はその攻撃をデングッシャーソードで防御して、押し返す。

「うおお！危ないね〜」

「五月蠅い。黙れ」

そう言いながらまた別のカードを使う

カメンライド カ、カ、カ、カブト

「瞬間よりも速いものを見せつけてやるぜ！」

アタックライド クロックアップ

「ちい、速すぎてわからない！」

「俺はここだぜ！」

「はあ！」

そして攻撃を連続でする。

「グハア！！！！強いなー、手加減してよ」

「いやだ」

そして俺はファイナルアタックライドカードを出した

ファイナルアタックライド カ、カ、カ、カ、カブト

「ライダーアアキイイックウウ！！！！！！」

カブトが使うライダーキックで瞬を倒す。同時に瞬のISのエネルギー残量が0になる

「勝者、蛇川乱太ー」

ちなみに今解説したのは射命丸文。なんかネタが欲しいとかで来たらしい。逃げるか

「敗者いん」 「さあ勝者の蛇川乱太さんにインタビューです！」 「イヤアアア」

俺はこの後、すごい鬼に怒られまくった。理由は自分の拳で戦わなかったとかそういうことらしい。いいじゃねえか！

「いーわけあるかー！！！！」

「助けてくれええ！！！！」

蛇川乱太 最近の悩みは警官に不良扱いされること。最近良かったことは特になし

side out

になったんだよ！そして、周りには規則的に並びながらも、俺を取り囲むように並ぶ弾。しかも隙間すらない。これが全方向からあつてみなよ。さらに微妙に動いている。俺も微妙に動きながら当たらないようにする。

「空刀、これって終焉でも何でもないような」

「起爆」

「エエエエエ！！！！ちよま、時空間いd」作者権限で封じた。今回時空間移動使えないようにしたし」ズリイイイイ！！！！アアアアアアア！！！！」

俺は、見事に爆発した

side out

side 俺というのは空刀です

「お前チルノより弱くね、チルノは弾幕凍らせたし妹紅は燃やしたし霊夢は夢想封印で消したし、魔理沙・ゆうかりんはマスタースパークで弾幕ごと俺ぶち抜いて避けなかったら死んでたし。幽々子は俺能力で殺そうとしたし、そう思うと蛇川雑魚（笑）」

まあ蛇川は属性を使うこと自体頭になかったのかも、あいつ普段は属性使わないし、ははっ、聖夜に頼んで鍛えてもらおう。そして俺はユーチューブでまた曲を聴き始めた。

side out

side 聖夜

「ひでえww」

「次はアタイが勝負をs」やめといたほうがいい」なんでだよ、聖夜！」

俺はチルノに説明した。ちなみにチルノは馬鹿だけど頭は中学生並にはあるらしい

「いや、今の蛇川マジギレだから、チルノをぼこしまくると思う」

「だったらチルノのパーフェクト算数でも聞か！」

「お前の曲だろそれ・・・」

俺達は話をしながら帰った

s i d e o u t

s i d e 蛇川

「次からは、属性を・・・」

s i d e o u t

第三十一話 B・O・F・T編1 今回は俺が主人公だby乱太

side 蛇川

俺は今、ラクサスがバトルオブフェアリーテイルの開催を宣言した後のギルドにいる。そして転移すると、目の前にフリードがいたのでボコッとくことにした。

「さてと、狂い咲な！フリード！」

「何を言い出すかと思えば、そんな言葉か、闇の文字翼^{レクリエーター}！」

フリードは文字で作られた翼を背中につけて飛び上がった。対する俺は、普通にジャンプしてひっつかみ、引きずり落とす。そして、双剣を持った

「狂い咲く花、百花繚乱・絶牙」

そして死なない程度に絶牙で斬り終了。そして次はビッグスロー討伐に行く。次はアレで終わらせるか。まあ終っていたけど。そして俺はラクサスに会いに行こう。と思った矢先に変な怪物が現れた。どうやらアポロガイストのようだ。っておいおい、まあいいか

「行くぜ、変身」

俺はディケイドライダーを使い、仮面ライダーディケイドに変身するカメンライド、ディディディディケイド

「やりあつてる暇はないんでな……」

俺はライダーカード、仮面ライダーオーズを出した。これはとある事件により俺が入手した。ちなみにタジャドルコンボであるカメンライド、オオオオーズ

「オーバーキルでごめん」

俺はバツクルにファイナルアタックライド・オーズのカードを入れ、スキャンする

ファイナルアタックライド、オオオオーズ

「オラアアアア……！マグナアブレイズウウウ……！！！！！！」

俺はアポロガイストに突撃し、マグナブレイズを100%あてる。

そして、アポロガイストは爆発し、セルメダルが飛び散った。

「何でセルメダルなんだ・・・誰かの欲望で形造られたのか？」

俺は変身を解き、セルメダルを拾った。しかし、そのセルメダルはこの世界には適合しないモノなので、灰になる。コアメダルくらいの力がないと別世界では存在できないらしい。これは創造神である聖夜から聞いた。そして俺は、ラクサスのところへと急いだ

side out

第三十二話 B・O・F・T編2前まで単行本見ながらこの小説書いていました

今回はV S ラクサスの前に、また邪魔者が・

第三十二話

B・O・F・T編2前まで単行本見ながらこの小説書いていました

side 蛇川

「またかよ・・・しかもなんかすごいことになってるし」

「どうやらこれは妖力と霊力とガイアメモリの力が混ざっているものらしい。東方とWのコラボかよ。形はまんまテラー・ドーパントだから強そう。」

「さてと・・・邪魔だからどいてもらおう！」

カメンライド デイ、デイ、デイ、デイケイド

「さてと、ドーパント相手にはこいつでいいか」

カメンライド ダ、ダ、ダブル

「お前の罪を数えろ！」

キメゼリフを言い、そして攻撃するが、いきなりテラー・フィールドを発動され、近寄れなくなる。だって精神的恐怖やだもん。さらに霊撃を撃つ。そしてテラー・ドーパントが一枚のカードを取り出す。そのカードにはテラー・ドーパントが一人立っていて、周りには苦しみながら倒れている人間がいる。

「まさかとは思っけど、スベルカードか!？」

そして、周囲にくぐもった声が聞こえる

――恐怖「恐れと畏れ」――

その刹那、テラー・フィールドが広がる。

「うおお、変身解除！」

俺はデイケイドごと変身を解除して、飛び上がり、様子を見る。テラー・フィールドがマグノリアを包み込んだ。そして――

マグノリアは一瞬で消えた

「なにい!?!」

俺は、デイクイドに変身して、テラー・フィールドに降り立つ。もはや精神の恐怖など感じずに、怒りが満ちていた。しかし何故か冷静だった。よく分からね。

「終わらせるぜ……」

そして、今までずっと白紙だった一枚のカードを取り出す。そしてそのカードには、「ロボットライド ゲッター」と書かれていた

「行くぜ……」

ロボットライド ゲ、ゲ、ゲ、ゲッターロボ

そして、真ゲッターロボ1が現れ、ゲッタービームが放たれることを示唆する音が鳴り響いていた。そして、バツクルにカードを入れるファイナルアタックライド ゲ、ゲ、ゲ、ゲッターロボ

「準備はいいのか!! 乱太!!!!」

「いいぜ竜馬!!!!!!」

俺はデイクイドランチャーを取り出し、発射態勢をとる

「ファイナルゲッタービーム!!!!!!!!!!」

そして、真ゲッターロボとデイクイドランチャーからゲッタービームが発射され、テラー・ドーパントに命中し、そして、光がすべてを包み込んだ。

「まぶしっ！！！」

そして光が晴れると、街は元通りになっていた

「さてと、俺たちは行くぜ！」

そして、真ゲッターロボは銀色のオーロラに包まれ消えた

「さてと、俺も行きますか」

俺もラクサスを倒すためにカルティア大聖堂へと向かった
side out

第三十二話 B・O・F・T編2前まで単行本見ながらこの小説書いていました

なんかテラー戦が長いな・・・次回はVSラクサスです

side 蛇川

聖夜はどうやらラクサスとナツを原作通り戦わせることにしたらしい。俺としてはラクサスフルボッコしたいのだが。あの某天やってやるぜの人のセリフ言っつて。しかし聖夜の声がチョイマジだったのでやめることにした。

「それにしても聖夜はなんであそこまで原作にかかわらないようにして、原作以外にかかわりそうな奴をつぶしているんだろっね。今月だけでこの世界でかわろうとしている転生者が50人つぶされたぞ。幻想殺しとか持っている奴も聖夜流喧嘩で鎮静したし」

しかし、聖夜なりの考えがあるのだろうと思った。しかし、俺は後ろ頭に銃を突きつけられていることが分かった。

「なんのようだ、次元管理局。いつからこの小説はそんな力オスになった」

「君が時空犯罪者の蛇川乱太か。君を時空破壊の罪で逮捕する」

なんか分からねえな・・・ていうか俺良く落ち着いてられるな。

あ、読者の皆様に簡単な説明を。

時空破壊とは

一つの平行世界を破壊すること。さらにそのせいで時空が少し歪むこと。大きい歪みになると、別の世界と世界どうしがくっついったりすることがある。つまり仮面ライダーディケイドがやったことと考えてもらっつてくれ。まとめるところ

1次元干渉してその世界が歪んで消える

2その影響を受けて別の平行世界でも時間が遅くなったり進んできたり、ひどい時には大災害に至る。

3さらにあまり影響を受けない世界でも別の世界どうしがくっついったりする可能性があること

「それに管理局は今、多元世界が出来ていることによりその処理が

追いつかないんだ」

「なるほどね・・・スーパーロボットやガンダムなどのメカを保有している世界どろしがついてなつたんだろろ。次元震によつてさらにある世界ではヘテロダイン・ギシン星人・機械獣・次元獣などの怪物が大量発生しているんだろろ。分かつたならその銃を下せ」しかし下ろさないよな。聖夜ー助けてー。棒読み

「お前の仲間の空刀聖夜・織斑瞬も指名手配になつてゐる」

「聖夜や俺はともかく何で瞬が？あいつはもともとISの世界にいたし、ていつか瞬もこの世界に飛ばされて来たやつだろ」

しかしクロノも警察で言う中間管理職。上の命令には逆らえないんだろろ。

．．．．．

．．．．．

「あの闇の狩り手も転生者すべてをもうひとつの次元管理局がすべて逮捕する」

なるほどな・・・こいつらはそんなカスなのか・・・。俺は瞬間移動を使い、クロノの背後に回り込みはつけいを使い気絶させ、元の世界に送り返す。メッセージ付きで

「やばいことになつたな・・・エドラス編で決着付きそうだ」

そう言つと俺は自分の世界へと戻つた。12p能力をみにつけねえとな・・・

side out

第三十四話 OVER FREEZE（前書き）

題名の意味はオーバーが大げさ フリーズが凍結という意味で大げさな凍結という意味になるのかどうか分かりません。元ネタはオーバーマン キングゲイナーです

第三十四話 OVER FREEZE

side 聖夜

「で、なんでこんな奴と戦わなくてはならないの!？」

俺は今、蛇川がたまたま持ってきたゴタゴタ之始末だ。目の前にいるのは、永久的に動く生物、『オーバーヒート』だ。ちなみに相手が永久機関なので、相手を倒す攻撃は通用しないので、生命の躍動を止める氷系攻撃に限っていた。

「グガオアア!!!」

相手は炎系攻撃を駆使して攻撃をし、俺の攻撃を溶かす。かくなる上は隠し持つゲッター炉心で周囲をメルトダウンに巻き込み、こいつもろとも巻き込むこともありだが、それやると冥界行きの上に映姫の説教を覚悟しなくてはならない。それだけは嫌だ!!

「仕方ねえな・・・」OVER FREEZE」

俺は二丁拳銃を使い、オーバーヒートに向け氷弾を撃つ。相手は素早い動きで回避しようとするが、それは地面を狙ったものであり、氷弾が当たった地面からは氷柱が次々と高速でつきだしていき、オーバーヒートに突き刺さっていく。

「お次はこいつで!」

氷柱に捕らわれているオーバーヒートに氷弾を次々と射撃していく。その氷弾はオーバーヒートに当たると、薄い氷がオーバーヒートを包み込んでいく。その凍りに包まれたものは、少しずつ、体温が奪われていく。

「続きはこれで!」

そして薄い氷の上からさらに氷弾を撃ち込み、分厚い氷がさらに相手を包んでいく。もはやオーバーヒートは動かなくなっていた。

「ICE」

その弾をオーバーヒートに撃ち込み、生命の躍動を完全停止させる。そして、凍ったオーバーヒートを拳で叩く。その氷は砕け落ち、跡

形もなく溶け、最後には水になった。

「依頼終了だな。こいつを証拠にすればいいだろう」

俺はさっき奪い取ったオーバーヒートの角を持ち、依頼主のもとへと行った

side out

第三十五話 SOUTHERNCROSS・サザンクロス (前書き)

意味は、知っていると思いますが南十字星です

第三十五話 SOUTHERNCROSS・サザンクロス

side瞬

「俺は新しい技を考えた」

「んで」

蛇川がだるそうに返事をする。

「実験台おk?」

普通はやらないと思うけど、こいつに頼めばやると俺は知っている。それは運命なんですよ!!

「やだ」

「運命に逆らおうとするのかい」

俺はキザっぽく返事をする。俺は本来言いたくないんですけど。これは強制連行ですね

「おい、強制連行隊よろしくね」

「「おう!」」

「なんであんたらいるわけええ!!!!」

うん、相山と参太で連行しました

そして広場

「さてと、動くなよ」

「分かってらあ」

俺は右手に蒼、左手に黄のオーラをまとわせ、一気に加速して蛇川に近づき、左手を手刀にし横薙ぎにする。

「おい!手を抜けよ!」

「どんなことでも手は抜きたくないんだよ」

そして、右手の手刀で上から振り下ろす。そして、手刀で斬った線が蒼と黄色に発光し、俺は後に振り向き、そして、決めゼリフを言う

「これが、南十字星だ」

そして、蛇川が断末魔の叫び声をあげると、俺はその場から逃げた。

おしまい
side
out

第三十六話 精神攻撃ってトラウマつくあれだよね？by参太（前書き）

今回は参太視点から見たとある一日です

第三十六話 精神攻撃ってトラウマつくあれだよね？ by 参太

Side 参太

AM 7:50

蛇川はギルドで聖夜とM U ● ● Nで対戦していた。メタ発言だな。

AM 8:20

聖夜は筋トレをしていて、そして後頭部に瞬のキックを食らった。そして暴走して紅桜と罪歌二刀流で暴れていた。やめろ、世界が崩壊する

AM 8:30

蛇川が聖夜を止めて気絶し、瞬は朝っぱらから酒を飲んでいた。いい加減にしroy、この世界ではまだ未成年だろうが！！

AM 9:00

瞬は寝ている。酒の大淹を五個飲んだのだ。聖夜がため息をついている。なぜだろう。下を見ると、PSPが置いてあり、充電してあった。その範囲を結界で守りながら。さすがおもゲフンゲフン、物を大切にする人だ

AM 12:00

おい、パソコンッてこの世界にあつたっけ。蛇川がパソコンで何かを熱心にキーボードに打ち込んでいる。のぞいてみたら「ピーー
———」し、死にかけた……

AM 1:00

俺が飯を食っていると、何故か刹那・F・セイエイがいた。どうやら蛇川の友達らしいけど、交友関係が幅広いのだが……

AM 2:00

聖夜はスパロボをやっていて、蛇川は神咲と駆動に追いかけられていた。まあ見なかったふりしよう。俺は何も見えていない。その時の会話がこれ

「蛇川でめえ！！！」

「ゆ、許してええ！！！」

俺は結構啞然としていた。あいた口がふさがらない。

「ま、人生楽あり苦ありさ」

うん、水戸黄門のメロディが頭に流れきた。

AM 4:00

なんか飽きてきました。というわけでここで終わりにしようと思います。最後に感想を言わせてください

感想

カオスじゃねえかああああxだあかkjjぢおづdjh！！！！！！！！！！

以上

第三十七話 オリジナル編 聖夜VS聖夜 (前書き)

今回は第二次スーパーロボットZ破界編の舞台を借ります

第三十七話 オリジナル編 聖夜VS聖夜

side 聖夜

「んで、どしたのメアちゃん」

「いや、だからさつき言っただじゃないですか、もう一人の聖夜様が多元世界で暴れているって」

俺は今、部下のメアちゃんからもう一人の俺について聞いていた。ちなみにこの子は東方のナズーリンの系統だと思ってくれ。

「んで、それを俺にどうしろと？アザト君とかニヤルっちゃロキの旦那が勝手にやってくれるんじゃないの」

「貴方本当に神様ですか？だーから、その神の人たちが手が離せないから聖夜様にやってくれと言っていたじゃないですか！」

ああ、そういうロキの旦那がそう言っていたような気がする

「おk、5日で片付けてくるから忠実に待っておれ」

（こんなバカに仕えている私って・・・）

俺は時空に穴をあけてその多元世界へと赴いた

とある多元世界

そういやここはスパロボZ破界編の世界に該当するらしい。そして俺はインベーターに囲まれている。俺殺気をビンビンに出しているから囲まれたのかな？

「やるっきゃないか！」

そして、インベーター一匹を食いちぎった。ちなみに本当に口で食ってはいません。能力を奪っただけです。そして、一時的に神化し、神化の余波でインベーターをかつ消した。そして神化を解除する。

今度は俺のキングオブチートでグレンラガンを作り上げた。この能力は、「望めば何でも形にする程度の能力」で、普段は鍵をかけているが、使うときに外せば問題ない。このグレンラガンと原作との違いは兜の色が黄色か黒色かだ。そして俺はそれに乗り込むと、もう一人の自分を探しだした。

s i d e o u t

s i d e ? ?

「会いたかった・・・我が半分よ・・・」

私はそう言い残し、我が起源の力を使い、倒したバジュラの死体を
踏み、あるいていった

s i d e o u t

第三十七話 オリジナル編 聖夜VS聖夜（後書き）

今回は、もう一人の聖夜と聖夜が戦うお話です。これはあくまで、スパロボZ破界編の世界ではなく、破界編の舞台を借りているので、ガイオウなどの次元獣などはいない設定です。初期は出そうと思っただのですが、それだと矛盾が生じそうなので、控えさせていただきますました

第三十八話 オリジナル編 聖夜VS聖夜？

side 聖夜

「それにしても、スパロボの世界来れるなんて感謝感激雨あられて奴だよな」

後正直言つてメアちゃんが最近従順邪なくなってきたのは気のせいかな？さつさと倒して帰ろうかと思うと、自分に似た気配がした

「まさかとは思うけど、もう遭遇？」

「会いたかった・・・話が半身よ」

おいおい、この猛烈に痛い奴がもう一人の俺？容姿以外すごい似てないです！

「いや、俺は俺、お前はお前だろ」

「いや、私はお前、お前は私だ。この不完全な力を完全にするためにお前を取り込む」

よし、フルボッコタイムやるか。

「だったらかつ消してやるぜ！！」

俺はフィールドを展開し、相手と自分をそのフィールドに引き込む。ここは自分の思い通りになる世界で、とにかくいろんなことが出来る。自分でも能力が把握できないほど、入り組んでいるのだ。

「やはりか・・・」

刹那、俺が展開したフィールドは消え去り、代わりに相手が作った空間に包みこまれる。

「ま、まさか・・・」

俺は確信した、そして、目の前に広がる闇を見ながら、こう言い放った

「こいつは、俺以上の俺・・・」

そして、闇に飲み込まれた

side out

「必然『キングクリムゾン』」

これは数秒時間を止め その間に攻撃をたたき込む技。

「オラアアアアア!!!!!!」

そして、俺はもはや自分の敵と言えるもう一人の自分に鉄拳をたたきこんだ

次回に続く

第三十八話 オリジナル編 聖夜VS聖夜 ? (後書き)

半端ですみません。

第三十九話 聖夜VS聖夜 ？

side 聖夜

「オラアアアアア！！！！！」

そして、もはや敵と言えるもう一人の自分に鉄拳をたたきこんだ。はずだった。あいつは俺の拳を片手で受け止めていた。

「やはり鬼神を使ったか……」

「畜生！煉獄『アマテラス』！！」

そして、天照大神の力を借り、煉獄の如し相手を燃やしつくす。対象を燃やしつくすまで消えない炎。その力は絶大だが、やはりあいつは燃え尽きなかった。

「なんなんだよ……自身の肉体の損傷の一切を否定しているのかよ」

「残念ながらその通りだ。我、鬼巫女が自分の技でやられることなどなかるう」

やっぱり……鬼巫女的能力が確か、「あらゆる干渉を否定し我を通す程度の能力」だっけ、それなら確かに攻撃を「否定」すれば何とかなるな。さてと、こいつに対抗するには『自由』しかないよね。「自由を縛るものは何もない！自由の枷、解放！」

そして、背中からは純白の片翼が生え、もう片翼は漆黒の片翼、つまり片方は、正義や真実、純真を表現し、もう片方は、嫉妬・恨み・憎しみなどの憎悪の感情を表している。まあそういう感情の移り変わりは紙一重だということを表しているかもしれない。俺流解釈だけど。

「ま、そういうもんだね。人間なんて」

そして、あいつにせまり、零距离での黒式・拳をたたき込む。こいつも鬼巫女的能力を疑似的に発動している

「がはあ！！！！な……何だと……」

「さあて、もう片翼も使いますか」

そして、白式・断を使い切り裂く。手刀でだ。

「ぐがあ！！！！煉獄「アマテ」発動させるわけじゃないじゃん、黒式・牙」ぐはあ！！！！」

この自由の力は、黒式・白式それぞれの力を使い、漢字をつけることにより、攻撃する感じである。牙の場合は、右手を上、左手を下にし、獣のあごのように噛む動作をし、相手を噛みつくす攻撃である。それに、こんなに相手がさつきとは違い、あつけないのも、あいつの力は、黒式の力が吸い取り、白式の力が無効にしているためである。そして、キングクリムゾンを兆速級にしているため、あいつが攻撃を撃つ前に打ち込んでいるのだ。さらに相手が使うであろう体の速さを遅くし、不自由にしたため圧倒的な差を作ることが出来るのだ。圧倒的な力で押し切る、「破戒」とは別の意味で恐ろしい。

「くそお！！何故だ、何故なのだ、あの力を得たというのに、何故なのだああ！！！！」

そしてあいつは再び巻き返してきた。攻撃速度が以上に早くなり、威力も強くなってきた。

「くっ！自由の力とは言え、きついな、威力が異常に高い、相手がぶっ倒れる前にこっちがやられんぞ！！！！」

あまり使いたくないんだけど、体内破裂弾で行くか。正直言って気持ち悪いし、命の火を吹き消すことになるのだ。しかし、無事で帰るためにも……

「お前には消えてもらうぜええ！！！！！！」

そして、黒い羽根を一本引き抜き、あいつに突き刺す。そして、距離をとると、体内から爆発し、肉片があたりに散らばった。そして、血を洗い流すような感じで雨が降り出した。豪雨だ。そして、いつの間にか隣にはメアがいた。

「なんだ、いたのかメアちゃん」

ときどき恐ろしいな、このこの気配を消す能力を怖く思っちまう。

「使いましたね、「鬼神」「自由」の枷を」

「ああ・・・仕方ない・・・でも「創聖」と「破戒」だけは使用禁止だからな。シヴァのおやつさんに怒られる。幸せだな、心配してくれる奴らがいるなんて」

感傷に浸っていると、メアが口を開く

「他にもいるんじゃないですか？あのギルドの人たちが」

俺は口元を少し歪め、笑うと、メアが持ってきた傘をさし、俗に言うあいあい傘をした

「さてと、帰るか」

そして、時空間に穴をあけ、自分たちの居城に帰った
side out

「ここはとある場所」

「あの永久を生きる創造神、破壊を司る人間、二つを中和する協調。この三人の監視を続けることに賛成の者」

とある人物がほかの人物に賛成意見を求めた

「賛成」

「承認しよう」

「信任しよう」

「認めよう」

「任せてみよう」

他の5人は賛成したが、

「反対意見を出します」

ある1人は反対した。

「何故だ？××」

「なぜあの三人にここまで関心を注ぐのですか？あの三人よりもっと特別な者がこの平行世界には存在するはずです！」

その××と言われた人物は、勢いのあまり声を荒げた

「まあ落ち着きたまえ、××」

議長らしき人物は仲裁した

「理由はこうだ、あの蛇川乱太には、君が探し求めている力がある」

「!!」

××が息を飲む音が聞こえた。そして、彼は少し考え、こういった
「賛成意見を出します」

「これで全監視者の承認が集まった。これで、××××××を終わりにする」

そして、その人物たちはそこから一瞬にて消え去った

side out

第三十九話 聖夜VS聖夜 ? (後書き)

ラストのはガンダム00の監視者の集いを意識してみました

第四十話 自由の翼と鬼神の拳

side 聖夜

俺は自分の居城で昔の写真をたまたま見つけた。俺の居城は書斎っぽく、本棚もあまりなく、テーブルと椅子があるだけのシンプルな部屋だ

「懐かしいねえ……」

「どうしたんですか聖夜様？」

俺の言葉にメアが反応する

「いやさ、昔の写真を見つけて、1500年代だけど」

「その時代に写真の技術ってありました？」

2000年代のカメラ持ってた。と言ったらメアはため息をついた。ちなみに瞬と蛇川も映っている。ちなみに7人映っていて、右はじにシヴァの旦那とアザト君、左はじにロキの兄貴とニャルっち。そして俺と蛇川と瞬が映っていた。みんな笑顔です。

「これは俺が自由と鬼神を初めて出したときなんだよ……」

「へえ」

口では興味なさそうに言いながらも、椅子を出し、いつの間にかあったテーブルに二人分の紅茶が置いてあった。何秒間で淹れてきたんだよ……

「さてと、どこから話し始めようかね……」

「いいから早く話してください」

俺は前置きが大事だと思いつつも、とある過去について話し始めた約510年前……

「で、アザト君何の用？」

「いや、破戒と創聖ではなく、別の枷を作り出したんだろ、僕はそれを察知してきたんだ。それにしてもこの世界はいい、特に争いもなく、人種差別もない」

「いや、人間がいないからな。霊長類も作らなかったし」

「では、見せてもらおうか。その前にシヴァの旦那が明日にしろとか五月蠅いから、飲みに行くぞ」

「YES」

そして俺たちは飲み会に行った。そして明日に不安を感じまくりだつた

次回へ続く

第四十一話 自由の翼と鬼神の拳 2

side 聖夜 (510年前の)

「さてと、やりますか」

昨日の飲み会は地獄だった。

「おい、早くしろよ」

さてと、まずは鬼神からだな

「鬼神を止めるものは何もない！」

そして、キンクリを発動する。数秒間時間を止め、アザト君の目の前に行く

「き、規格外だな・・・」

「煉獄『アマテラス』」

そしてアマテラスの炎をまといし拳で顔面を殴る

「グブエエ」

あ、偽物だ。本物はどこかな。

「あ、馬鹿だあいつ」

あ、アザトの野郎悪口言いやがって、居場所もわかったし次は自由だな

「鬼神は止まった！自由を縛るものは何もない！！」

鬼神を解除し、自由を使う。これはまあ純白の羽が道德とかで、暗黒の羽が、憎悪とかそこらへんです。未来の俺大丈夫かな？

「黒式・柱！」

「グハアア！????!」

適当に作ったけど強いなこれ。じゃあ久々に調子に乗りますか！

「白式・牢！！」

「おいしい！！！！出せよ！！！！」

出さないのが俺流！そして芸術は爆発だ！！

「芸術は爆発なのだ！！！！白式・爆！！！！」

「チヨマアアアアアア！！！！！！」

なんか汚いね。あれはアザト君が手を出さなかったからああいうボ
コルことが出来るんだからね！普通に戦ったらあんな牢獄なんか片
手でぶっ壊すもの。

「てめえ……」

「よう、平気だった？」

「平気もなにもなぬ」

あのぬは昔のいだからね。覚えておかなくてもいいです。

「おい、おめえら写真とんぞ……」

「分かりましたよ、シヴァの旦那」

「はいはい、今行きますよ」と

そして俺たちは写真を取り、別れた

　　今に至る

「へえ……そんなことがあったんですか」

「うん、今となつてはいい思い出だね」

そして俺は、昔の洋物筆笥から写真の入っていない写真立てを取り
出し、その写真を入れると、筆笥の上に立てておいた。

「懐かしいねえ……」

「最初のセリフと同じですね……」

ま、たまには懐かしむのもいいだろう。

side out

第四十二話 コラボの旅館！そのいち！……by 聖夜（前書き）

妖気様のところのミイラとコラボです

第四十二話 コラボの旅館！そのいち！！by 聖夜

side 聖夜

「なんか面白いことないかな？」

たまたまヤ●イチでもらった福引券片手、袋片手に道路沿いの歩道を歩いている俺。あそこに見えるマンションって作者が前住んでいたところらしいね。そして、そのマンションの前まで行くと

「××！遊びに行こうぜ！」

「いいよ！！！」

過去の作者がいた。おい、どんだけなんだよ。そして

「あれ、あ、そういえばこの券を渡せって未来の俺が言ってたからわたすな！なくすんじゃねえぞ！」

過去の作者も変わらずヲタってる。俺はその券を見ると、温泉旅館招待券と書いてあった。もしや・・・と思いながら行く俺であった。その前に荷造り荷造り

温泉旅館に行く途中のバス

俺が乗っているのはバスの屋上だ。タダなもんで。無料より安いものはないっていうし。それに下をのぞくと、若かりし頃の瞬の父親がいた。賢明な読者はもうお分かりいただけただろうが、織斑一夏である。しかし、俺の目的地はこれから曲がる角とは別の方向なのでここで飛び降りる。飛び降りたの誰かに見られたけどいいかな？

そのころの車内

「誰か飛び降りた!？」

「動物じゃねえの」

俺こと織斑刹那は兄の織斑一夏にそう言い、また寝ることにした。

ああ、俺の出番ないな・・・

side 聖夜に戻る

「ここでいいのかな？」

「いらつしゃい」

「なんで霊夢がここにいんだよ……」

俺の目の前には霊夢が普通にすわってた。なんだよこの変な空間は？今回コラボ編だよな！？

「よお、聖夜」

「お、ミイラじゃん、久しぶり」

さらに俺の目の前には妖気様のところから来たミイラがいた。こいつとはどこかであつてたりする。ちなみにコラボ編です

「それにしても、ここどこなんだ？俺は過去の作者からこの券貰ったんだけど」

「俺も妖気から行って来いって」

ああ、作者か。

「さっきから私が空気なんだけど……賽銭出せや」

はい、万札ださないと殺されそうだから出しておく。素早く奪い取る霊夢。そんな霊夢は無視して俺とミイラは部屋へと向かう

「旅館の部屋」

「案外広いもんだな」

「だろ、無料最高」

そして、俺たちは温泉へ行くことにした

次回予告

都山「何で俺がやらなかあかんだ、今回は聖夜とミイラが温泉に入っているところに逆のぞきが入らしいぞ。まあ駆動の裏人格だろうけど。あと織斑刹那は織斑瞬の原案らしく、最初はその名前にしたらしいけど、刹那・F・セイエイとかぶるからやめたらしいぞ。あとあの旅館はいろんなアニメやゲームのキャラが来るところらしく、某オタクも来たらしい。つまり遊馬崎ウォーカーだ。じゃあな」

注、遊馬崎ウォーカーは次回です

第四十三話 コラボの旅館 その？だぜえ！！by乱太

side 聖夜

「いい温泉だねえ」

「そうだな、でも何で包帯が濡れないんだ？」

「ミイラ、その包帯全部に防水魔術をかけているからな。あと5日はもつぜ」

俺とミイラは温泉につかっている。いい湯だからねむりそうだが。寝たら溺死するらしいぜ。脛の高さで人間は溺死できるらしいし。でも、なんかのぞかれているような気がする……

「そのころ」

「これなら……やばっ、鼻血でてきた」

女湯から男湯をのぞいている駆動。それを神咲はギャグ漫画でよく見る顔で泣いている

「やばいよ、乱太。疾風があ……」

『裏人格を電気ショックで戻せ！さもないとこの小説18禁になるだろおおがああああ！！！！！！』

蛇川と電話で会話し、泣きごとと言っている神咲と絶望の叫びをあげている蛇川。なんかかわいそうで見えていられないが。そして

「我が人生に一生の悔いなし……」
「といって駆動が倒れた。」

「たおれちゃったよおお！！！！！！」

『部屋にかつき込めええ！！！！！！！！』

と、アホな電話をしているコンビだけが残った
「場所に戻る」

「やっぱりな……あきれるぜ」

「なんかもうすみません」

俺はミイラに謝ると、風呂を出て、自室へ戻った。が、そこには何故かチルノがいた。そのほか上条当麻にインデックスもいた。もう

どうにでもなれや

「アイスないのアイス？」

「おい、無料と聞いてきたのだが。本当か？」

「お腹すいたよー」

このアホどもは……ミイラもポカンとなっている。そしてこいつらは無視して宴会場に行く。

〔宴会場〕

「アガガガガガ……コラボ編だからって調子に乗るなよな空刀」

スパロボZシリーズのZEXISとZEUTHがいた。

「部屋を間違えたようだな」

「その通り」

ピシヤリ、と障子を閉めると。やはり、聖夜様ご一行とZEXISご一行とかかれています。最悪だ。

「すまん、俺も調子乗りすぎて……」

「空刀あ……お目えコラアあ……」

「語尾がなっていないぞ聖夜。ああ、空刀さんですか」

「仕方ないじゃん。だってさあ、先週カラスが……」

「「五月蠅い……」」

「ぎゃあああああ」

そう言って飛び去って行った。

次回へ続くぜ

第四十四話 コラボの旅館 3ですby修太

sideミイラ

俺は今、聖夜と一緒にブラブラと歩いている。なぜかという、明日でも帰ることになっているからだ。特に見る者もないので、街の人から聞いたとある神社に向かっている。

「なあ、ミイラ……」

「ん、なんだ聖夜」

「いやさ、この神社、なんか変じゃね？」

確かに……ぼろぼろだしそれに、苔がびっしり生えている。空刀さんが見たら目を輝かせそうだな。二次元にいけるとか行けないとかで。それにしてもなんか出そうだな。聖夜なんか目があさつての方向を見つめている

「なあ、ミイラ、一応お賽銭を入れておこう」

そうして三万入れようとしたが、止めないでおいた。止めたら後で聖夜が大変なことになりそう。

「さてと、帰りますか」

「そうだな」

俺たちは旅館に帰ると、部屋に戻った。そして、窓からは、客でにぎわっている海が見えた

「はあ、行きてえな、海」

「いきやあいじゃねえか」

「いや、海今は入れないだね。ただいまクトゥルフとポセイドンがいないから。人間はいいよな、ああやって普通に生きて、うちの作者がもつと面白いことないかなって言うけど普通が一番だと思っぜ俺は。あの作者もわかってはいるんだと思う」

「？」

俺は聖夜の言葉が全然わからなかった

「だからさ、何事も、変わらない日常はないけど、その変わらない

日常の途中、途中に普通があるんだ。確かにスリリングな毎日も面白い。だけど、それじゃやっぱり駄目なんだよ。人間として成長するには。仕事とか他人にやさしくして、家族がいる人は家族を守って。最後のときには笑って逝ける。そういう人生が一番幸せなんだと思う」

そのあと聖夜は苦笑して、これはシヴァの旦那が言ったことなんだけどな。と付け加えた。そして聖夜は、

「さてと、海へ行きますか」

「はあ？」

「だって、さっきのミイラに話をするための冗談だもの」

「お前なあ！！」

俺たちは追いかけてこをしながら海へと向かった。

「海」

「おい、混み過ぎじゃね？」

「ああ、戻ろう」

俺たちは人のおおさに断念。そして大人しく部屋へと戻り、夜まで待つことにした

side out

第四十四話 コラボの旅館 3ですby修太(後書き)

次回でコラボ終了です

第四十五話 コラボの旅館 最終回です。本編は続くけどby聖夜

side 聖夜

「とゆーわけでお世話になりました」

「あいよ、また来てください」

「ありがとうございます」

俺たちは今日で滞在期間が終了したので、とりあえず旅館を出て電車の駅へ向かっている。そして、切符を購入した後、駅のホームを見ると、ミイラの今いる世界行きと、FAIRYTAILの世界行きの二つの列車が止まっていた。

「ここでお別れだな」

「じゃ、また今度」

「ああ」

そう言ってミイラは自分が乗るほうの列車に乗ると、その列車のドアがしまり、発車した。俺はそれを見送ると、ため息をついた

「休暇も終わりか……」

「聖夜様は毎日が休暇みたいなものじゃないですか」

列車にはいつのまにかメアが乗っていた。俺は苦笑しながら列車に乗り込むと、外の景色を食い入るように見つめていた。

「この世界もおしまいですね。あのISの世界とはたまたまくっついていて、もう外れていますからね。それに他の世界の方々も意識しないうちに元の世界へ帰しました。多分、この列車が発車すると同時に消えるでしょう」

「ああ……この景色とはおさらばだな。ここは、ゲームの『僕の夏休み』の世界をあくまでコピーした複製の世界だからな。長くは持たないんだ。さてと、この世界にピリオドを打って、帰りますか」

俺の言葉が合図になったかのように、ドアが閉まり、発車する。一両編成になっている列車の一番後ろの窓の外の景色を見ると、だん

だん消えていき、やがて無になった。

「俺の能力を使えば長く持たせることが可能だったか？」

「いえ、消えるまでの時間が一日、長くなった程度でしょう」

メアの冷たい言葉を聞きながら、俺は考える。創造神になってから、人間の何かが消えてしまったような、そんな感じがした。そして、目的地へ向かう列車の窓の外の景色、暗闇をずっと見続けていた。ずっと……

side out

第四十六話 CAST IN THE NAME OF GOD YE NOT

我、神の名においてこれを鑄造する。汝ら罪なし

side 聖夜

俺はただいま、ニルヴァーナの封印場所にいる。何故かというと、最近キープレードの光と闇を補充するからだ。補充必要だからね。

「補充開始っ」と

そして、キープレード、「約束のお守り」が光を、「過ぎ去りし思い出」が闇を吸収し、満タンになった。俺はそれを確認し、自分の根城まで転移した。

「聖夜の根城」

「聖夜様、帰るのが早いようで」

「ああ、思ったよりニルヴァーナの闇と光が多くてな。ぶち壊そうかと思ったけど」

「壊したほうが聖夜様の苦勞が少ないのでは」

あ……………

「聖夜様、聖夜様、戻ってきてください」

「あ、あいうえいうえいあいえうあいえうあいえうあいえうえうえうおあいうえうあいうえうおえういあおえうえおえう」

「あいた口がふさがらないようですね」

side out

side 蛇川

「????」

「Cast in the name of god ye not guilty」

俺はスペルを唱え、門を開けると、そこにはTHEビッグの軍勢があつた。ビッグデュオ以外はすべてビッグオーの白色バージョンだ。ビッグオーのオリジナルもある

「黒歴史の遺産だな……まだこんなところにも残っていたとは、驚きだ」

そして、次元爆弾を仕掛け、その場から別の場所へ転移すると、その次元爆弾は爆発し、次元の狭間を永遠に漂うことになる。そして、俺は転移した。

「????」

「yhbヴvぶ消滅r」

人外の言葉を放ち、門を開け、また次元爆弾をセットし、爆発させる。そのような依頼をすべてこなし、依頼主のところへ戻る

「おい、あんたの言ったことをやったが、いいのか？」

「ああ、アレはあつてはならないものだ。この多元世界には。君の望む機体『ゲヘナダンクーガ』の場所を見つけたが、それをどうするつもりだ？」

「お前には関係がないことだ。深入りしないことだな、エルガン・ローティックさんよ」

そうして俺は、その部屋から出た。

side out

side 第三者視点

「再構築か、そんなもの無意味だ」

その男、エルガン・ローティックは、そう言いながら、次の来訪者を招き入れた

side out

side 蛇川

「これがゲヘナダンクーガ・・・！」

目の前にある、ファイナルダンクーガのブラックウイングをつけたダンクーガノヴァを見ながら、俺は歓喜の声を自分で抑えられないほどに上げていた。そして、それを分離させ、聖夜の根城に送った。エルガンのじじいに頼まれた任務はまだ終わっちゃいないしな。

side out

第四十六話 CAST IN THE NAME OF GOD YE NOT

ゲヘナイーグル・ゲヘナエレファント・ゲヘナライガー・ゲヘナライノス・ゲヘナウイングが合体することにより構成される機体。駆動限界がない。

ゲヘナイーグル

ノヴァアイーグルとほとんど同じだが、3Aダガーの装備がなく、代りに5Xブーメランがある

ゲヘナエレファント

ノヴァエレファントと同じだが、アブソリユートキャノンがなく、代りにレールガンが装備されている。5Xアックス装備

ゲヘナライノス

ノヴァライノスと同じだが、武装の「ブーストノヴァナツクル」の弾数が15発に増えている。5Xキャノン装備

ゲヘナライガー

ノヴァライガーと同じで、違う点がほとんどないが、タンクモードでも小規模な断空砲が撃てる。5Xキャノン装備

ゲヘナウイング

ファイナルダンクーガについているブラックウイングと同じ。

ゲヘナダンクーガ

ダンクーガノヴァと同じだが、断空剣が二本追加されている

武装

ミサイルデドネイター

ブーストノヴァナツクル

断空砲

断空剣（二刀流もあり）

ファイナル断空砲

第四十七話 六魔將軍編1 災厄が通る！

side乱太

「何で俺が・・・」

聖夜は主人公なのに、面倒くさいから、エドラス編で頑張るとか言ってるし、瞬は出番がなくて落ち込んでいるし、もうまともなの俺だけじゃね！？

「そうやって文句をぶーぶー言うな、俺だって面倒くさいんだ」

久々のグレイ。FAIRYTAIL組は6話ぶりかな？そういや裏でくそ作者とか言ってたし。怖い、なんかすごい怖い。説明は勝手に中略します。そして、青い天馬のマスター、ボブの別荘とかいう趣味の悪い屋敷についた。中を見ると、すごい気持ち悪い。ナツがふらふらしている。酔いがまださめてないんだねー

「我r「はいー、キンクリー」」

キンクリでセリフを飛ばす。作者があんま覚えていないらしい。単行本持つてるのに。

「僕たちは強いよ？」

「五月蠅い消えるシヨタ」

「ひ、酷い・・・」

残念ながらシヨタはレンきゅんだけでいいのですよ。そして一夜が来た。

「エルザ、ここに変態がいるので駆逐していいですか？」

「いいぞ」

「わ、わたしはへんたいzy「スパアアアキイイイイイングウウウウウウー！！」メエエエンー！！」

スパークキングをして飛ばす。まあ普通だな。そしてリオン再登場！いや、会うの初めてだし俺。そして、岩鉄のジユラがいた。すかさず俺は感度を最大にした。相手の起源を見ることが出来るのである。ここでは言わないでおくが、あいつの起源は「だ。こいつ

はばらしてはいけない。そして、屋敷の扉が開いて、一人の女の子が入ってきた途端に転んだ。その時に見えた影に不思議な違和感があつた。

ケットシエルダー

「化猫の宿から来たウエンディです」

俺は目を見開いていたと思う。奴の後ろには、かつて俺が死にかけながらも倒した敵、だが名前は全然知らない。俺は適当にGUILTYと名付けている。こいつは一波乱ありそうだな・・・

side out

第四十七話 六魔將軍編2 聖夜の本気

side 聖夜

「聖夜がやつと来た……」

「俺の本気みたいだろ？」

「？知らない」

？談話（別名 アホな人々）をしているところだが、オラシオンセイスがきているところなのだ。俺も来たかったんだよ。そういや、創聖と破戒っていつ使ったっけ……

回想

「使いたくないが使うか……創聖」

「なんだい？それは」

過去の聖夜の腕がソーラーアクエリオンの腕に変わる

「うおおおお！！！！無限拳！！！」

「くっ！」

無限拳を使用した聖夜のパンチをまともに受けた奴は、月まで行った。

「まだだあ！！！！」

「壱発逆転拳！」

そして、握りこぶしを下に落とすような感じで叩きつける。奴は、さすがにこれは受けた奴波大ダメージを受けた。

「くっ、グングニル！」

「破戒！！！」

そして、聖夜のオーラが黒いものへと変わる

「列空我」

風を体にまとわせ、

「断空我」

日本刀を出し、

「破空我」

あいているほうの拳に力を込め、

「砲空我」

方には大砲がつき、

「雷空我」

日本刀に雷がまとわり、

「炎空我」

さらに日本刀に炎をまとわせる、その時の聖夜の姿は、悪鬼にふさわしい姿だった

「斬空我、絶空我！！！！」

そして日本刀できり、拳で殴り、最後には

「ハアアア！！！！！！断空砲！！！！」

大砲から断空砲を至近距離で打ち出した。

「ち、ちくしよいおお！！！！」

奴は、死んだ

回想終了

「あいつは強かったな」

「もうついたから用意だ」

もうチョイ回想したかった

side out

第四十九話 改めて聖夜の主人公紹介 話数つける必要があるか？

空刀聖夜 便宜上14歳（永遠の14歳）男

種族 創造神

能力 4つの枷・キープレード 雷の滅竜魔法

人間から創造神になりあがった人間。神々からみた地位は0に皆無だが、のちにはぐれ神と作ったチーム、「神の翼」を作り、本当になりあがった人。雷の滅竜魔法を手に入れたが、戦闘で使わないようにはなったが常に訓練はしている。4つの枷は衝動的に生まれたものだが、キープレードも特典らしい。容姿は鏡音レンを長髪にして髪の毛を黒色にした感じ。

雷の滅竜魔法

雷竜の鉄拳

雷をまとった拳で殴る

雷竜の咆哮

雷を口から出して攻撃する

雷竜の翼撃

雷を腕にまとわせてブン回して攻撃する

雷竜の剣角

雷を頭にまとわせて頭突きをする

雷竜の皇雷

拳を雷にまとわせ、落とす。

雷竜の天秤

雷の円盤を飛ばす

雷竜の碎牙

雷をまとった爪で切り裂く

雷竜の鉤爪

雷をまとった足でける

雷竜蒼天拳

雷竜の鉄拳を何連続で殴る

雷竜絶牙

雷のダガー状の武器で切り裂く

四つの枷

鬼神

必然「キングクリムゾン」

数秒から数分時間を止める

煉獄「アマテラス」

太陽の炎ですべてを焼き尽くす

自由

黒式シリーズ

闇の属性を操り攻撃するシリーズ

白式シリーズ

光の属性を操り攻撃するシリーズ

創聖

無限拳

月まで届く命がけの拳、ソーラーアクエリオンと同じ

一発逆転拳

生命の力を使い拳おとしのような形で攻撃する 第二次スパロボZ

破界編と同じ

破戒

列空我

風をまとわせる。攻撃にも使用できる。風を飛ばしたりする

斬空我

普通の3倍の切れ味で物を切ることが出来る

破空我

普通の2倍の鉄拳を使うことが出来る

断空我

日本刀を出すことが出来る

雷空我

雷を使う。攻撃可

炎空我

炎を使う。攻撃可

絶空我

5倍の斬激か、5倍の鉄拳

キープレード

キングダムチェイン

普通のキープレード。原作より強め

約束のお守り

キープレード約束のお守りと同じ。原作より強め

過ぎ去りし思い出

キープレード過ぎ去りし思い出と同じ。原作より強め

チーム「神の翼」

リーダー シヴァ

聖夜が指名した神。破壊と創造をつかさどり、聖夜の先輩神

副リーダー 空刀聖夜

ナイアラトホテップ

別名「這いよる混沌」「千変」と呼ばれている人だが、無類の猫好き

ロキ

北欧神話の13番の調和を乱す神。聖夜が尊敬する神

アザトース

クトゥルフ神話の人。とくに特徴0

以上

第五十話 六魔將軍編3 V B M E

side 聖夜

「乱太お前帰れ」

「いやだ」

「じゃあ後方支援よろ」

「ok」

そういつて乱太は後方支援のため撤退。そして、原作勢は倒されているのに傷一つついてない俺のを見ている六魔將軍たちを見て、乱太に念話を送る

「乱太、ゲヘナエレファントだして」

「へ分かった。ニルヴァーナ破壊でも使うから大切に扱え」

そして背後から、ブロロロロ、という音がだんだん大きく聞こえてきた。

「うぬよ、何をした？」

「なにつて、そりゃあさあ」

俺は上空へ飛ぶと、ナイスタイミングで来たゲヘナエレファントに乗り込む。これで分殺可能だな。

「チェンジ、エレファント！！！！ヒューマロイドモードオオオオオ！！！！！！」

ゲヘナエレファントがヒューマロイドモードになり、5Xアックスを振り回す。こっちは究極合金Xだ。当たってもダメージ0だ。そのうち相手のほうが焦り、ウエンディをつれて逃げようとしたが、そこにスナイパーライフルの弾を撃ち込み妨害、そしてウエンディを回収しタンクモードへと変形して下がる。

「なんとか巻いたZE」

「あ、ありがとうございます・・・」

「他の奴らも下がってるし、俺たちも合流するか」
そして乱太に念話を飛ばす

「ゲヘナエレファント下がらせておく」

「自分勝手。だけどやっておく」

そしてゲヘナエレファントが自動操縦で下がっていく。

「俺たちも合流するぞ」

「え、はい」

そうして俺たちは歩いて行った

side out

第五十一話 六魔將軍編4 やっぱりこれかよおおb y聖夜

side 聖夜

「それにしても・・・なんか道間違えたっぽい」

「もしかして聖夜さんって・・・方向音痴ですか？」

「否定しええん。よし、キングクリムゾン」

俺はキンクリを使い、ウエンディを持ち上げた。おんぶつすよ。俺ロリコンじゃないから。そして空を飛ぶ。こっちのほうが迷わないので。ウエンディは驚いているけどまあいいか。そして、俺たちを探しているナツがいたのでそこにげきッゲフンゲフン、着地しようとしたが、見事にナツをふんづけており、ふんづけたことを否定する。

「いつてえな！何するんだよ！」

「悪い悪い、出来心で。ウエンディも無事だよ？というわけで俺とナツは打倒六魔將軍を心に刻み込むのだった・・・」

「何でナレーションみたいなんですか？」

「これがおとこのろm「わりい、手が滑った」ぐへ」

敗訴して適当に首根っこを掴むとレーサーがいました。

「どうする選択肢は三つある！！！！」

「なんだよ？」

「1 躊躇しまくろうZE！！！！ウィイイイツイイイイイ
アアアアqア！！！！！！」

2 とりあえず頭だけ残して埋めておこう

3 映姫に送ろう。改心するだろう。サアドレダアア！！！！！！
ナツがうーんと考え込んでいると、指を三本立てた

「3だ！！！！」

「どうしてですか？」

「3は地獄のお説教だぜ！！！！！！」

そしてレーサーの言葉を見殺しして地獄送りにする。うん、死体処理

は完ぺきだ。

「さて、次はだ」おい、エルザが毒にやられているだ！助けてくれ！ウエンディ！！！」じゃ、逝きますか」

俺はナツとウエンディをテレポさせ、自分もテレポする。ちなみにテレポートだよ。そしてエルザのところへ行く。あ、0・1秒でついた。

「というわけで俺はあれを出す！殲滅用VBMキヤガレエエエエ！！！」

そして、ゲヘナイーグル始め、ゲヘナエレファント・ゲヘナライノス・ゲヘナライガー・ゲヘナウイングが到着した。

「これは一体……」

「聖夜！さつさと乗り込んでニルヴァーナ壊すぞ！あ、六魔將軍はおまいらに任せておく！「やべ！遅かった」おいおい、なんかひどくなつてない？」

ニルヴァーナは原作通り起動した。何故だ？ジエラルは改心させてただいま服役中です。3年らしいよ。まさかとは思うけど、またゼウスとかか？

「よし、あいつを壊してからだよO H A N A S H Iは！！！」
「違うだろ」

そして俺はゲヘナイーグルに乗り込む。ちなみにゲヘナエレファントが乱太でゲヘナライノスが瞬だっけ？したらゲヘナライガーが神咲でゲヘナウイングが駆動だな。よし、覚えた。

「行くぜ！チームG！！！！」

「「「「「やああああああってやるぜえええ！！！！！！！！！」

「「「「

そうして出撃した

side out

side 聖夜

「ニルヴァーナが起動してるけど、なんかオリジナルダンクーガっぽくない？」

「さあな、それにしてもあそこにいる奴、ムーンWILLに似てない？」

「まんまだろ」

「あんたたち無駄話しないの」

「うん」

「ひどいハッテ酷い」

「ああん！！！！」

「ごめんなしやい」

俺たちはある意味いつも通りの会話をしながらニルヴァーナに近づくが、そこに居たのはムーンWILLと黒色のオリジナルダンクーガでした。あいつそういえばノヴァ本編で死んだよな？

「よし、合神だ」

「……はや！……」

そういいながらも他の奴らは俺に合わせて合神態勢をとってくれている。いいやつらだよな、本当に。マジデ感謝するよ。たまに

「ゲヘナイーグル、所定位置についた！」

「ゲヘナエレファント、所定位置到着！」

「ゲヘナライノス、目的地確認。待機状態になる」

「ゲヘナライガー、目的地到着」

「ゲヘナウイング、停止」

よし、ひさびさだぜ！！燃えてきた！！

「超獣合神！！」

「……ゲヘナダンクーガア！！！！……」

そして、ゲヘナイーグルが頭部を構成、そしてゲヘナエレファント

に・・・何ていえばいいのかわからないけれどとりあえず、合体したと言っておく。エレファントは腕と脚を構成し、右足にライガー左足にライノスが合体。そして背中にゲヘナウィングがつくことにより、正式名称、ゲヘナダンクーガWになる。

「さてと、やってやんよ・・・」

side out

第五十三話 どーせ俺は駄目人間だよ！！by 靈宮空刀

side 聖夜

「やっぱし強いな、オリジナルダンクーガ」

「のんきだな。まあこっちは全然無傷だけど」

俺たちの操縦するゲヘナダンクーガは、俺たちが常人離れしているせいもあるが、操縦される側のほうも性能が高い。しかし、オリジナルダンクーガも原作より性能が格段に上がっている。いまはフィールドっぽいもので防御しているけどさ。きついほうなんだよ。

「じゃ、断空剣で決めますか！」

「そだな、駆動。しかも二刀流でなあ！！！」

断空剣二刀流だと出力が少し落ちるけどまあいいか

「断空剣！！！！」

そして断空剣を二刀流でだす。右手と左手に断空剣！スペシャルだぜ！！

「ハアアアア！！！！断空斬！！！」

そして、断空剣でオリジナルダンクーガに斬る！！手ごたえがあった

「私はまだ終わらんぞオオ！！！！」

ムーンWILLが復活しやがった！！！！同時にフィールドも破られて装甲にダメージが行く

「おい、どれだけ強いんだよあいつ！！原作どうなってんだ！？」

「しらねえよ！ダイ・ガードでもいいから来ないとやばいぞ！！」

「なんかレーダーが飛行物体を感知したよ！！」

「なんだよ！」

飛行してくる赤いロボットは、ゲッターロボだった。何でゲッターロボがここに……。しかもゲッター1だし。

「うおおおお！！！！ゲッターアアアトマホオオオクウウウ！！！！」

ゲッター1はトマホークを出し、ムーンWILLに斬りつける。し

かも、すごいきている。

「ゲッターアアアビイイムウウウウ!!!」

そして、ゲッタービームをムーンWILLに打ち込み、オリジナルダンクーガごと破壊する

「馬鹿なあああ!!!」

そして、跡形もなく消え去った。

「おい、ゲッター1のパイロット……」

「流 竜真だ。覚えておけ」

そして、ゲッター1は消えた。なんだったんだろうな。あのゲッターロボは、ブラックゲッターよりも強いし、へたすりゃ真ゲッターなみだろ。俺は考えるのもめんどくさいのでとりあえずダンクーガを元の場所まで返した

side out

side 竜真

「なんだったんだろうな?」

俺はゲッター1を操縦して妖怪横丁まで戻って行った

side out

第五十三話 どーせ俺は駄目人間だよ！！by 靈宮空刀（後書き）

あれは、俺の人気0の別連載、「真^{チェンジ}ゲッターロボ！！全世界終焉の日」の主人公の流 竜真です。読んでください。なんか宣伝しちゃうめかな？

第五十四話 ゲッターロボのHEATSっていいよねby靈宮

side 聖夜

「壊れなさい」

そう言っただけ空砲を発射し、ニルヴァーナを跡形もなく破壊した—
とかっこつけてやろうとしたけれど現実には甘くはない。この小説ど
うだと思う？シヴァの旦那に聞いてみたら

「原作に入っている敵ならすべて出てくる」

とか答えたので殴った。そして殺されかけた。というわけで俺たち
は機械獣軍団のトロスD7をやっと倒したとことだ。何故こういう
ことになったかという、オリジナルダンクが倒された後にい
きなり来たので仕方なくだ。爆撃獣グロイザーX10、11、12
がニルヴァーナに迫っているのだから断空砲で跡形もなく消し去った。
灰は残ったが

「おい、何でだよおお！！！！次はインベダーでもくるのかよ！
？」

「私に聞かないで」

「聖夜あ！もう持たない！」

ああ、こういうときにマジンガーZとか来てくれよ！願うから！！
と念じたら本当に来た。神の軌跡でも何でもないなこりゃ

「うおおお、必殺！ロケットオオオオオ！パアアアンチイイイ
イ！！！！」

そして、マジンガーZの拳を飛ばして機械獣軍団が一掃された。そ
してマジンガーZは飛び去って行った。

「というわけで、ニルヴァーナへ向かうぞ！」

「……おおお！！！！」

俺たちはニルヴァーナへと向かい、断空剣を振り下ろすが、システ
ムダウンして、自動的に合神が解けた。

「最悪だ。よし、俺が行く！」

「……いテラー……」

そしてゲヘナイーグルを自動操縦でかえし、ニルヴァーナへと登って行った。上のほうを見るとナツがコブラと戦闘中で、でかい叫び声はこちらにも聞こえてきた。うん、うるさい。そして俺が昇っていくと、また黒コートがいた。

「さてと……お前との因縁もそろそろ終わりにしようや」

キーブレード「過ぎ去りし思い出」と「約束のお守り」を出し、黒コートと対峙する。が、黒コートがフードを脱ぐと、そこには

俺の顔があつた

「さあ、俺とやりあおうぜ、俺^{せい}」

side out

第五十五話 もう一人の俺

side 聖夜

「はあああ！！！！」

「うおりや！！」

俺は自分の偽物と戦っているが、実力、全てがまるつきり同じだ。まるで俺を複製したかのような。仕方ない、あれを使うか

「鬼神！」

「鬼神！」

同時に鬼神を発動し、キングクリムゾン発動内での死闘が始まった。アマテラスで燃やしあい、殴りあい、それを延々と続けているがキングクリムゾンの所為で時間は5分しかたっていない。埒があかない……

「創聖！！」

「創聖！！」

同時に創聖を発動し、一発逆転拳を同時に放ち、同時に避ける。俺にしかないものを今作るしかない。ただ一つ……ただ一つ。一つだけなら！

「GUILTY！！！！」

もう一人の俺に単語の意味で、「罪」をつける

「なんだこれは！？」

相手も困惑している。闘いの途中で技を考えるのは至難の業だ。それを実行に移すならさらに難易度が跳ね上がる。

「判決を言い渡す……YE GUILTY！！！！」

そして、自分の右腕をビッグオーの右腕に変える。そして、その腕のメモリを入れるところにメモリを入れ、走り出す。

「うおおおお！！！！」

「くっ、オラアアア！！！！！！」

殴りかかってきた右腕を左腕で払いのけ、偽物に完全にくつつける。

一発しか使わない、一発しか使えない、ビッグオーの最後の舞台だ

！！

「ビッグオー！ファイナルステージイ！！！」

右腕を砲身にし、一気に大砲の弾を相手に打ち込む。相手の体内にその弾は入り、爆発して、霧散した。

「じょうさん、じょうさん・・・」

俺は昔先生がしゃれでいった蒸散を覚える歌を歌いながらその場を去って行った

side out

第五十六話

VS???

side瞬

「ハア・・・ハア・・・今日はよく走るな・・・」

俺は聖夜のサポートをするために全速力でニルヴァーナ現在地へと向かっていたが、変な気を感じて後に飛び退く。そして、さっきまで俺がいた場所には、マジンガーZで有名なピグマン子爵がいた。何故こいつが？まさかとは思うが、時空の壁が歪んでしまっているのか？

「お前は確か・・・」

「Drヘル様に仕えるピグマン子爵だ。お前に話がある」

「ああん？」

なんだ？

「Drヘル様に仕えろ。そうすればお主を元の世界に帰してやるう」

「いやさあ、俺自力で帰れるし」

「ならば・・・」

ピグマン子爵はいきなり頭上に雷を落としてきた。さらに避けた先には地割れがあり、ハスターの風の力で飛び上がる。

「帰りな。ここはお前の住む世界ではない。兜甲児に倒されな」

アザトースの力で強制的に元の世界へ帰す。森羅万象か・・・
「しっかし・・・」

あの流 竜真とかいうやつも、自分を曲げない！とかいつてるしな。ゲッター、イレギュラー、ZEXIS、ZEUTH、こいつらが交わるとうなるのだろう。そしてこの世界の命運は、ゲッター1のパイロット、流 竜真にかかっている。

「全世界終焉の日を止めるよ・・・竜真」

俺はそう呼びかけた

side out

第五十六話 VS??? (後書き)

僕の別連載作品とクロスさせています！詳細が知りたい人は、
真ゲッターロボ！！^{チェンジ}全世界終焉の日を読んでください。人気がない
のでよろしくお願いします・・・

第五十七話 六魔將軍編 6 決着！そして・・・

side 聖夜

「また何もしてないぜ俺・・・」

俺はさあ原作勢に加勢しようと思いついてたときに終わったという知らせを受けて、ひとりおちこんでいる状況であった。最近何もしていないので、主人公もくそもないじゃないかとメアに罵られたりもしていたことがある。ひどくね？仕方なく俺は蛇川と合流しようとする。まあ、場所を突きとめてレポートすればいいだけなのだが。しかし、先にナツたちのところ戻ったほうがよくない？と思いナツ達のところへ戻る。次はエドラス編かぁ・・・キーブレード久々に使うか

side out

side 瞬

あのピグマン子爵は何でいたんだろう。しかし、世界が融合するなんて考えられねえぜ。それにしても、腹減ったなあ、なんか喰いたいな・・・あ、字が違いました。別に（ピーーーーー！）とか（ピーーーーー！）とかしたいわけじゃないけど。さてと、俺はISを展開して空へ飛び上がる。次はこのISと俺が活躍するはずだ・・・エドラスには空气中に魔力がない。つまり聖夜はキーブレードと枷が使えなくなる。蛇川の場合は能力なので、別に心配はない。俺の神魔法は魔力を使うので、封じられるが機械のISはそんなの関係ないから、有利に働くはず。ドロマ・アニメ相手じゃさすがにきついと思うけれどな。そう考えているうちに蛇川と合流した。

「蛇川、もしかしてお前も俺と同じこと考えていた？」

「そうだと思うぜ、しらないけどな。まあとりあえずは、ナツ達の健闘をたたえてやろうぜ」

「そうだな、疲れているし」

そついうと俺たちは聖夜と合流するために移動した。

side out

第五十八話 聖夜の昔話

side 蛇川

「聖夜の過去が見えたぞー」

俺は瞬にそう声をかける。これは聖夜の過去を調べ、転生する前の状態と転生後を比較してみようぜ的な事であるが、まあいつてしまえば興味があるからである

「さてと、のぞいてみるか」

そして俺と瞬は聖夜の過去へとダイブした

聖夜の記憶の中

「ここが聖夜の過去か・・・」

俺はそういうと、聖夜を見つけた。まだ小学生の聖夜だ。しかし顔がずいぶんと違う。なんていうか、高須竜児似だ。とらドラ！のね

「それにしてもさあ、蛇川」

「なんだよ瞬」

「普通すぎじゃね？」

いや、当たり前だろ。と思うがそれには突っ込まず

「そうだな」

と、答える。しかし、聖夜が自分に記憶を細工しないはずがない。

「細工してるな。あの馬鹿」

「みる価値もない。戻るぞ」

そして俺達は偽の記憶から浮上した

「それにしてもみる価値もない」

「いや、案外そういうもんなんじゃないのか？過去なんて」

「俺は・・・ねえ・・・？」

その思わせぶりな口調は何なんだ。しかし俺もいちいち覚えていない、親の名前戸親との生活すら忘れている。自分にあるのは仲間達や聖夜、瞬戸の思い出のみだ。後は血にぬれた戦いの記憶しかない。

そう、その通りなのだ。

「聖夜も覚えてなかったりして」

瞬が呟きながら俺の家を出て行った。

「ま、そういうもんかな」

俺はそう独り言を言うのと、静かに自分のパソコンを開く。そこには『聖夜の記憶』と書かれているファイルと、『偽装用の記憶』というファイルがあり、蛇川はその両方を消した。

「さすがにあれは酷いな……聖夜は自分の経歴を二歳ごまかしているし、東方の東風谷早苗とは幼馴染だし。なおかつ荒れているし……偽装用の記憶を作っておいてよかった」

今まで考えていたことは瞬に思考を読まれないためのフェイクだ。そういう芸当も可能な脳みそをしていると、ときどき便利だ。あの記憶は、抹消しておいてやるか。

side out

第五十九話 60話目前なので、蛇川の名前の理由

今回は蛇川が名前をもらった時のことを話してあげよう。かつて、蛇川乱太という名前を彼がもらいうけたのは、MUGENの世界のことだ……。蛇川視点で、話してあげよう

ニコニコMUGENの世界

「デイケイドだ！」

「ぶっ倒せ！！！」

今日もまた、俺めがけて様々な戦士がやってきた。俺はこう思う。なぜこうも彼らは負けることを知りながら、それでも戦いを挑んでくるのだろうと。そう考えながら、俺は敵を殴り殺し、刺し殺し、けり殺し、もしくは内臓をえぐりだし、敵を次々と殺していく。いつも通りの事務的な作業だ。これが俺の生業。生きるために殺す。生きたいなら殺さなくてはならない。そうやっていくつもの世界を渡り歩いてきた。デイケイド、それが俺の名前であり、軽蔑の言葉であった。そしてまた、血に濡れた地面を歩き、帰る。しかし、不意に気配を感じ、振り向くと、アイスの当たり棒を剣として持ち、スイカのような剣、チョコみたいな剣二本に、ウエハースのような剣二本をもつ、水色の髪の少女だった

「何の用だ」

「あたいはチルノ！最強の戦士だよ！」

よし、殺ろう。おれは問答無用で二刀流の刀であいつを切り裂こうとしたが、あいつはそれをひらりと避け、チョコのような剣と当たり棒のような剣を合体させて斬りかかってきた。俺はそれを日本で受け止めたが、すぐに折れ、斬激がそのまま体に通る

「がふあ！！」

何mも吹っ飛ばされ、同時に俺の意識は飛んだ……………

side out

side チルノ

「あれ？なんだよこいつ、弱いなー」

あたいはさつき倒した緑色の髪のを男を担ぎながら歩いていた。それにしてもこいつ軽いな、何キログラムもないんじゃないの？と、あたいは思いながら、自分の家までこいつを担いで行った

side out

side (乱太)

「なん・・・だよ・・・ここ・・・は・・・？」

俺が意識を覚醒させると、そこは、案外普通の家で、上には俺を見下ろすさつき戦った奴がいた

「お、起きた起きた。あたいに助けられたことを感謝しなよ、あたいは最強だからな」

「は、はあ・・・」

俺は自分の置かれた状況が全くと云っていいほど理解できない。なぜ敵なのに助けしてくれるのだろうと。

「なんで俺は敵なのに助ける？」

そうチルノに聞いた。

「なんでって？倒れている奴を助けないのはカス以下だからな。最強なあたいは人を助けるから最強なんだ」

そう、当たり前のように、言い放った。俺は多分眼を見開いていたと思う。なんで、なんで、なんで、俺は信じられなかった。いままで人を信じないで生きてきた俺には、眩しすぎた。

「そう言えば、お前の名前聞いてないんだけど。名前なんだよ？」

「名前はない」

ディケイドというあざ名はあるが。

「じゃああたいがつけてやる！えーと、名前、名前、名前・・・」

「

こうもしてくれるのか？俺はどうしても信じられず、目の前の光景にただ啞然とするだけだった。

「お前、髪の色緑色だな！ひらめいた！お前の名前は蛇川乱太だ！いい名前だろ、乱太」

「……ありがとう」

そうして俺は出ていこうとしたが、

「次ぎあうときには強くなれよ！」

というチルノの言葉を聞いた

「ああ」

自分でも驚くほど素直に、何のひねくれた感情もなく、そう言った
side out

第六十話 一息つこう

side 聖夜

「懐かしいな・・・」

様々に移り変わっていく俺の思い出、そのどれもが転生前の遠い記憶。初めての海水浴、入園式、卒園式、入学式、運動会、友達と無邪気に遊んでいる小学三年生ころの俺。

「珍しいね、君が懐かしむなんてね」

「誰だって懐かしい頃の記憶はあるさ。俺だって例外じゃない」

そして、這い寄る混沌こと、ナイアトホテップは、自分の記憶を映し出した。アザトースの前で無邪気に遊んでいた頃、そしていくつもの星を壊し、高笑いしていた

「このころは縛るものが無かったから楽しかったな・・・」

ナイアはそう言いながら、俺と過ごした日々を映し出した。ナイアがいろいろな姿に変わり、たまたま射命丸文の姿になったから、俺の前ではいつもその姿になっている。そして光景は二人でゲームセンターで対戦しているとき、口喧嘩をしているとき、共闘したとき、恥ずかしいが俺がナイアに告白したとき

「あのときは本当に嬉しかったよ、以外だったしなにより、私も聖夜のこと好きだから」

「ま、念願が叶い、無事に付き合い、ゴールインしたけど」

そう言いながら俺はその空間を消し始めた。

「先帰ってるよ」

そう言ってナイアは消えた。そして俺も消えた

第六十一話 エドラス編1

side 聖夜

「さてと、エドラス編来たわけだけど……」

周囲には誰もいない。エドラス変だから当たり前なのだが。それに魔法も使えなくなっている。俺はとりあえず自由の枷を外す

「とりあえずエドラスまで行きますか。白式・翼」

俺は光の翼を作り。アニマへ向かい飛んでいく。が、すぐにアニマが消えてしまい行けなかった。アニマがなくてはエドラスへ行けない。今回はあきらめるかな

「何でいるんだよ、ナイア」

俺の妻ことナイアがいました。妻なのは本当だけど。

「悪い？手助けしようと思ったのに」

ナイアは変な棒を上に向けて

「スターライトブレイカー」

「いやいやいや！！！！パクリするなよ！！！！」

しかし、さっきのSLBでとりあえずアニマが出来たので、よしとする

「さんきゅ、ナイア！」

俺はそのアニマに全速力で飛びこみ、エドラスまで行く。しかし、急に白式・翼が解けて、落下する

「アババババ！！黒式・翼！」

しかし、翼は出ずにそのまま地面へと落下する……寸前で止まった

「ふう……自分の翼使って飛べばよかった」

一応翼はあるのだが、使いたくないので普段はしまっている。元聖神トップだったからなさてと……行きますか。

side out

第六十二話 エドラス編2 別行動

side 瞬

「たぐよお・・・魔法も使えなくなってるし、蛇川はいないし、踏んだり蹴ったりだ。IS使えてるだけまだけどさ・・・」

愚痴をこぼしながらアニマを探すと、ちょうど頭上にアニマがあった。

「うおりゃああ!!」

俺はアニマに向かって飛び、最高時速で突入する。そしてギリギリでエドラスへ突入できるが、ISのシールドエネルギーを相当消費したので、着地して解除する。回復するには10分くらいかかりそう。それに俺のISには自己修復機能がそなわっており、単純にエネルギー回復だけなら5分ですむが、危険レベルがCなので、5分で最低の修復だけは終わる。つまり10分逃げ回って倒さなければならぬのだ。

「単純に木刀が欲しい・・・とりあえず後でユ●モノの堅木並みのものを見つけよう。それをナイフで加工すれば余裕で作れるはずだ」

昔訓練の一環で作ったことがある。本当にこれを習って助かったことが何度もある。ISにも実体ナイフが一本装備されているので、腕だけにISを装着すれば出せる。あと、俺のISは、データ領域に量子化保存できるZセイバー、ゼロバスター、ゼロライフルのほかに、四次元領域を搭載しており、そこに実弾重火器、実弾小火器、実体剣、実体ナイフなどを搭載している。簡単に言うと、ド●●ものの四次元ポケットと同じだ。そろそろ10分たったかな？

「まだ9分かよ・・・」

ちなみに待機状態は赤い腕輪だ(俺のISの)タイマー機能と電波時計つき。ちなみに今10分経ちました。

「さてと・・・いい木は・・・見つけた」

俺は適当な木を見つけると、ISの腕だけを装着して実体剣で欲しい部分だけを切り取る。そして、実体ナイフで削るか・・・

しばらくかかるので今の聖夜を見てみよう

「うおらあああ！！！」

エドラス兵を王国の城で引きつけていた。これはハッピー達がナツ達を助けるための時間を稼いでいる。しかし、今聖夜は魔法を使えない。体術と日本刀だけしか使えない。なぜか神力まで使用不可能となり、無尽蔵のスタミナで引きつけている

「まだかあああ！！！」

というわけで瞬視点に戻る

「できたああ！！！」

とりあえず木刀はできた。我ながら最高傑作。しかも岩をも砕く硬さなので、強度抜群。これがあれば自衛程度は可能。と判断したが、父さんの言葉が頭によぎる

『命はできるだけとるな』

この言葉はサバイバル生活のときにもらった言葉で、俺が自衛しかない理由でもある。しかし、そのあとにも言葉がある

『ただし、仲間を傷つける奴には無効かもな』

うん、これには同意した。まあ今の俺の格好はどこぞの風来坊みたいだな。黒色の着流しに木刀なので。とりあえず聖夜を探そう。あいつもいるはずだ

side out

第六十二話 エドラス編2 別行動（後書き）

瞬のサバイバル技術発覚＆今回と次回を瞬視点に決定して、聖夜にはしばらく準主人公ポジションとしていてもらおうと思います。

第六十三話 エドラス編3

side瞬

「さてと、王国の城下町まで行きたいのだが・・・道が分からない」

ISで空飛んだら、エクシードに警戒されて大変なことになるし、なにより、目立つからな。しかし、空さえ飛ばなけりゃいいだろう。と思いISを足だけ展開し、ローラーブースターを出して、地面を走る。この機能はなんとなく追加したものである。まあ使い勝手がいいので割と重宝しているのだが。そして、王国っぽい場所へとついた

（王国）

「魔力が有り余ってるね、無駄遣いだぜ」

俺はそう思いながら、城の中へ急ぐが、

「ここから先は立ち入り禁止だ！」

やっぱりな、お得意のセリフだぜ。感情すらもってなく、事務的に一般人に対して言っているんだろう

「ごめんな・・・」

「が・・・はあ・・・」

俺は衛兵の腹に正拳をたたき込み、道を確保する。そして城の内部へと侵入する

城の内部

「たつくよお・・・なんでこんな雑魚どもと・・・」

俺はけだるそうに木刀を構え、一人に峰うち、もう一人を腹に木刀をぶったたき吹っ飛ばす。

「オラオラオラ！！！！」

4分もしないうちに終わり、どうやら騒ぎを聞きつけたであろう、エルザ・ナイトウォーカーが現れた。

「お前が侵入者か・・・コードETD発動中であろうときに・・・

「・・・」

「事情は分かった・・・悪いなあ、お前が戦う相手は俺じゃない」
そういうと俺はISを展開し、ゼロバスターを床向けて撃ち、煙を
起こしてその場を離れる。大体事情は分かった。ナツがいる場所・

・

「しゅううん！！！！こいつら何とかしてくれえええ」

「たつくよお」

俺はゼロライフルで聖夜の後ろにいる奴らを狙い撃ち、聖夜に木刀
を渡す

「お、サンキュー、今魔法とかキープレード使えないんだよ」

「まあいいから、俺はあっちから行く、お前はこっちから行け」

「ああ、わかったぜ、瞬」

俺と聖夜はそこで別れた

side out

第六十四話 エドラス編4 変身！（前書き）

今回瞬が、あの仮面ライダーになる・・・のかな？

第六十四話 エドラス編 4 変身！

side 瞬

「おい、こつちのほうに敵多いじゃねえかよ」

俺はISからロストドライバーとR、ライジング - と書かれたガイアメモリを取り出し、ISを待機状態に戻す。

『ライジング！』

「変身！」

俺はロストドライバーにライジングのメモリを差し込み、仮面ライダーライジングになる。これは聖夜がWにはまっているから、作つたらしい。ときどき、聖夜が恐ろしくなる

「さあ、罪におぼれな！」

俺は決めゼリフとともに衛兵に鉄拳、他の衛兵に蹴りをたたき込み道をあける。そして、スパークボイルダー（ハードボイルダーが黄色になった感じ）を呼び出して乗る。そして変身を解き、ナツ達がいるところまで行く。その途中で変なおっさんを倒した 그레이 に会う。

「瞬！お前今まで何してた！」

「いろいろとあつてな。ナツはどした？」

「ああ、ナツはどっかいっちまったし、ウェンディはエクスタリアに行った」

もうそんなに進んでいたのかよ・・・俺はスパークボイルダーに乗る

「俺はウェンディを追っかけてエクスタリアへ行く。お前らは聖夜にエクスポールをやれ」

「お前はいいのかよ？」

もつともだな。でも大丈夫だ

「大丈夫だぜ」

そうして俺はスパークボイルダーをスパークタービュラーに変え、エクスタリアまで飛ぶ。さてと・・・実力の片鱗だけを見せてあ

げますか。生意気な猫どもに
side out

第六十五話 エドラス編5 石投げるとか人の道外れてるだろ・・・

side 瞬

「とりあえずトリガーにしておくか」

俺は変身を解き、トリガーマグナムを出す。さらにそれにルナの力を加える。これでいいかな。俺はスパークタービュラーに乗りながら、エクスタリアのウエンディがいるところの上空へいる。そして、エクシードが石を投げたので、それを狙って撃ち落とす。あーでも、結構ウエンディ&シャルルは石に当たっている。遅かったかな

「ずいぶん手荒な歓迎だな・・・」

「瞬さん！？どうしてここに？」

「なんとなく。だが来てよかったようだな」

俺はトリガーマグナムにトリガーメモリを入れる。簡単に言うと、マキシマムドライブで吹き飛ばすことにした。イラッときたから。

『トリガー、マキシマムドライブ』

「撃たれたくなかったら・・・逃げろよ？」

すでに引き金を引けば一発で俺の前のものすべて吹き飛びます。イライラするときはこれが一番って母さんから聞いた。

「何やってるのよ!？」

「ここらへんを吹き飛ばす。イラついた時はそうやって母さんから言われたし、父さんクオリティだと必ずこうなる」

「あんたの両親ってどういう人なのよ・・・」

俺はシャルルには伝えず、ウエンディだけに伝えた

（ウエンディ、撃つ気ないからエクシードどもに呼び掛けてろ。空にこれを撃てば大丈夫だし）

（本当ですか？さつきも本当な感じでしたよ？）

（母さんと父さんの話はマジ。でも撃つ気ないからやっつけ）

（分かりました）

これ、テレパシーっぽいものね。そしてそのすぐ後に、エクシード

の女王のなんとかかんとかが来た。名前を知らない。俺はマキシマムドライブを解除して、今度はオーズドライバーとタトバコンボのメダルを取り出す。

「私たちはとても弱い種族です。昔、人間たちにとってもひどいことをされてきたりしました」

やっぱりな。そうでもない限り神なんて自作自演をしないだろう。ま、考えることは同じだな。生きるための保身と、種族を生き残らせるための保身では差が違う。まあ、シャルル達が飛び去って行ったあと、俺は静かに後ろの奴に顔を向ける

「誰だ」

俺はオーズドライバーを装着すると、メダルを入れる

『タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ！タトバタ・ト・バ！！』

オーズへと変身する。奴は姿を現すと、電王ベルトを取り出し、ライダーパスを持つ

「変身」

そして、ネガ電王へと変身した。

「だったら……」

俺は自分の体から、プテラ、トリケラ・ティラノのメダルを出し、タトバのメダルを戻す。そして、プトティラコンボへと変身する。

「うおおお！！！！」

「……………」

そしてメダガブリューでネガの体を斬る。どちらかというと打撃に近いが。今はそんなことはかまっていられない。メダガブリューにセルメダルを投入し、バズーカモードへと変える。

「ストレインドウム！」

そしてネガに浴びせかける。ネガは爆散した。

「……………やっぱりプトティラは体に響くな……………」

しかし、立ち止まるわけにもいかず、俺はハードタービュラーに乗り、ウエンディ達の後を追う

side out

第六十五話 エドラス編5 石投げるとか人の道外れてるだろ・・・（後書き）

REIMYARADIO

霊宮「どうも！今日の霊宮ラジオのゲストは・・・」

エビゾウ「ハーフボイルド、左翔太郎君だぜ！」

左「ハードボイルドにしてくれねえかな・・・」

霊宮「御免だね・・・ま、ジョーカーのメモリはこの作品でもでるからな」

エビゾウ「オーズも今日出たよな。プトティラコンボとタトバしか出てないけどさ」

エビゾウ「というわけでしめてくれ」

左「FAIRYTAIL 空の刀が目指すは雷の神、続け」

エビゾウ「このコーナー不定期だけどな！」

霊宮「それ言っなああ！！！」

第六十六話 エドラス編 6 てめえ……許さねえ

side 瞬

「なんだよ……ありゃあ、ドロマ・アニメなんか超えている・
・名前なんてつけてもつけなくても別物だ」

もはや名前など意味がないものに感じるほどの、禍々しさを持っていた。ところどころに、ドロマ・アニメの原型はとどめていたが、いたるところに突き出したガイアメモリが刺さっている。

「これが、ドロマ・アニメだ！」

はあ……やつぱりこうなるのかよ……

「聖夜、サイクロンのメモリだ」

「瞬、ジョーカーのメモリだぜ」

俺たちはメモリを投げあい、それぞれのメモリを持つ。そして俺がダブルドライバーを腰に装着すると、聖夜の腰にもドライバーが装着される

「変身！」

『CYCLONE!!』

ダブルドライバーに聖夜がサイクロンのメモリを入れ、俺のドライバーに転送される。俺はそれを押し込み

『JOKER!!』

ジョーカーのメモリを左側に入れ、ドライバーを英語のWの形にする。そして、聖夜の体が崩れるが、エクストリームメモリがカバーしてキャッチする

「瞬……それなんだよ……」

「ダブル、仮面ライダーW」

そして俺はドロマ・アニメの前へ降り立つ

『お前は王に刃向かおうとするのか!』

「王、それで人々を蹂躪していいのかよ」

「そういう理屈は俺たちには通用しねえんだよ!!」

俺達は右手を銃のような形にし、ドロマ・アニメに向ける

「さあ、お前の罪を数えろ！」

「王に罪などない！」

ドロマ・アニメは空中から剣を出し、俺達に斬りかかるが、俺はそれを軽く避ける。ちなみに俺が体の主導権を握っている。しかし、以外にも剣の小回りはきくらしく、速さもそれに相まって俺たちを攻める

「瞬！ナスカの記憶だ！ヒートメタルで行け！」

「おっしやあ！」

俺はサイクロンのメモリを抜き、ヒートのメモリを出す

『HEAT!!』

そしてジョーカーのメモリを抜き、メタルのメモリを出す

『METAL!!』

それを差し込み、ヒートメタルになる。そして、メタルシャフトを出す。それで剣を受け止める

「うおおおおお!!!」

「何！剣を受け止めただと!!」

「瞬！押し返せ！」

「わかってらあ!!!」

だけどきついな・・・受け止めてるだけで精いっぱいだぜ

side out

side 蛇川

「おいおい、あんなんに一人で挑むなんて・・・俺も加勢するぜ！」

『ACCELERATOR!!』

「変・・・身！」

そしてアクセルドライバーにアクセルメモリを入れ、仮面ライダーアクセルに変身する

「うおりゃあ!!」

そして、ドロマ・アニメ頭部にエンジンブレードの斬撃を加える
「遅し！」

「まったくだ」

「すまねえな・・・さて、形勢逆転と行こうぜ」

そして、聖夜達が受け止めている剣をエンジンブレードで受け止め、
一気に真っ二つにする

「何!？」

王は動揺しているらしい。

「さてと、思い切り・・・振り切るぜ!」

side out

第六十六話 エドラス編 6 てめえ・・・許さねえ（後書き）

何故聖夜達のガイアメモリが英語音声なのかというと、聖夜の好みです。それでは

第六十七話 エドラス編7 決着つけようぜ・・・

side 瞬

さてと、乱太も加わり、状況が良くなった。こっからだ！

「瞬！エクストリームメモリを使え！」

「おう！」

俺はエクストリームメモリを使う

「CYCLONE JOKER・EXTREME!!」

そしてサイクロンジョーカーエクストリームになる。そして、プリズムビッカーを出す

「PRISM!!」

俺はドロマ・アニメに斬りかかるが、それは鉄の壁で防御される。

そして、ドロマ・アニメを岩のようなものが多い始め、さらに、体に穴があき、そこからミサイルが発射される

「まずい！いったん退くぞ！」

「分かった」

「そうはせん!!」

そして、ドロマ・アニメと俺達を囲むように、全方位に壁が生えた
「まずっ「死ねい！」ぐああああ!!」

やべえ！ミサイルが直撃した。全部追尾機能が搭載されているぜ！
やばい、

「が・・・はあ・・・」

ダブルドライバーとメモリは全て壊れてしまった。乱太のほうも、
アクセルドライバーとアクセルメモリが壊れてしまったようだ。

「強すぎる・・・あのガイアメモリはT2か!？」

『お前ら、あいつのガイアメモリはエンドレスつまり、終わりがない、エターナルメモリと同じ効果を持つメモリと、ダミー、それコピーだ!』

聖夜からの念話でつまり、三つのメモリがある場所に、ピンポイント

トでマキシマムドライブを撃たなければいけないことが分かった。
しっかしどうするかな・・・なるほどな

「聖夜、乱太、マキシマムドライブをガイアメモリある場所に撃て、
場所わかるよな」

「ああ・・・」

「何をするんだよ・・・？」

俺は乱太と聖夜の腕をひつつかみ、ぐるぐる回転し始める。

「飛べえ！！！！！！！！」

「うおおおお！！！！！！！！」

そして乱太&聖夜をドロマ・アニメ上空まで飛ばし、自分も一気に
そこに飛ぶ。そして、それぞれがガイアメモリがある場所を発見し、
そこに降り立つ

「何をする気だ！？」

俺は拳を握り、ガイアメモリのある場所に置く。そして

「マシンガアアアアン！！！！！！」

高速連打する。聖夜は雷竜の鉄拳で決めているし、乱太はライジン
グ・シューターでえぐっている。そして、俺のところからは、エン
ドレスのメモリが飛び出て、砕け散った。

「ダミー終ったぜ」

「コピーも死にました」

そして、ドロマ・アニメから飛び降りる

「さてと、派手に決めるぜ！」

オースドライブを装着し、

『タカ・トラ・バッター！！タ・ト・バ、タトバタ・ト・バ！！！！』

オーズに変身し、メダジャリバーを持ち、そこにセルメダルを三枚
投入する

『トリプル、スキヤニングチャージ！！』

「オーズバッシュュ！！！！」

そして、ドロマ・アニメを空間ごと切り裂き、爆発させる。聖夜が
エドラス王を捕獲し、一件落着と言うところである。だが・・・

「なぜ、ガイアメモリが・・・」

「おい、さつさとはけやおら!!」

「聖夜やめろよ、仮にも老人だぜ」

と、聖夜と乱太がO H A N A S H Iをしている間に俺は変身
を解き、空を見上げた

s i d e o u t

第六十七話 エドラス編7 決着つけようぜ・・・（後書き）

霧彦の部屋　くりバイバルトーク

霧彦「どうも、願っていることは風都の平和、園咲霧彦です。今回のゲストは、不幸少年でおなじみ、上条当麻君です」

当麻「どうも、上条当麻です」

霧彦「それにしても、最近の世界を救ったりと、すごい活躍が目立ちますね？」

当麻「俺は守りたい奴を守っているだけだ」

霧彦「そうですか。では、あなた、実は鈍感な振りしてますけど、本当はナンパ溶かしているんじゃないですか？」

当麻「してるわけねえじゃん」

霧彦「そうですか。では、今日はこの辺で、さようなら」

当麻「次回もよろしく！」

次回のゲスト、未定　出してほしい方いれば出してください

第六十八話 VS テラー

side 瞬

「聖夜、乱太、先いつてて」

「ああ・瞬はどうするんだよ」

「俺はお客様の相手をする」

俺がそう言つと、聖夜と乱太はナツ達のいる所へと向かった。

「出てこいよ、園咲流兵衛」

「私に気づくとは、流石ですな」

何でこいつがこの世界にいるんだよ！俺はドライバーとメモリを出し、ドライバーを腰に装着する

「変身！！」

仮面ライダーライジングへと変身する。そして園咲の方もテラー・ドーパントへと変化する

「おらぁ！！！！」

「甘い」

俺がパンチを繰り出すと、テラーの方は左手で止めて、衝撃波をだす。俺はそれをジャンプして避ける。そして、ジョーカーのメモリを使う

『ジョーカー！マキシマムドライブ』

「ライダーパンチ！！」

そして、テラーは倒された

side out

第六十九話 エドラス編 8 終局（前書き）

調子によろしいので連続投稿です

第六十九話 エドラス編 8 終局

side 瞬

「と、いうわけだ・・・」

「なるほどな・・・お前が元いた世界に戻してやるよ。フィリッ
プのこと、見守るんだろう」

「その通り」

そして、流兵衛を元の世界に戻す。そして、俺はスパークボイルダ
ーに乗ると、上空へと吸い込まれるように上がっていき、元の世界
へと戻った。アースランドは元通り。だが・・・

「何でお前がいるんだい？篠ノ之束」

「いや、しーくんの様子を見に來ただけだよ？」

しかも、IS本編の束だし。俺はため息をつきながら束を元の世界
に戻す。問答無用、こいつにかかわったら大変なことになると読者
のみなさんもおわかりだろう

「それにしても、眠い。帰って寝るか」

俺は自分の家へ帰った

side out

side 聖夜

「何やってるんだよ・・・」

これは原作を知らない乱太。そして、アニメが逆展開した。エドラ
ス王のその後はと言うと、俺達がガイアメモリの出所を問い詰めた
あと、原作通りナツが木に縛り、そしてミストガンが王子になると
そして、俺は自分の居城へと帰った

）聖夜の居城）

「何でお前がいるんだい？八雲紫」

「何って・・・なんとなくだけど」

こいつには頭が痛い。

「帰れ」

「あ、そう言えば、面白いことが起こるわよ」

「面白いこと？」

あの幼女吸血鬼^{ヴァンパイア}だろうな・・運命予知能力とか何とかあったような気がするから

「赤いロボットが来るらしいわよ。ゲッターロボとかいうらしいけど」

「ゲッター！?!? なんであれが・・・」

「まあ、そんなところね。じゃあね」

そうして八雲紫はスキマへと消えた。それにしてもゲッターロボが幻想郷に・・・やばいことが怒りそうだな。

side out

第六十九話 エドラス編 8 終局（後書き）

霧彦の部屋へリバイバルトーク

霧彦「どうも、願うことは風都の平和。園咲霧彦です。僕が死んでから色々あったみたいだけど・・・真相を知るまで死に切れん！ゲストを読んで、いろいろと話を聞いてみたいと思います」

今日のゲストへ博霊霊夢へ

霧彦「どうも、霊夢さん」↑お賽銭を渡す

霊夢「ありがとう。これ誰の金なの？」

霧彦「プロデューサー」

霊夢「じゃあ気にすることないわね」

霧彦「そう言えば、最近の博麗神社はどうですか？」

霊夢「参拝客は来ないし、壊れるし、踏んだり蹴ったりね」

霧彦「そう言えばこんな映像が」

流れた映像、因幡てゐが博霊神社の賽銭を盗んでいるところ

霧彦「とりあえずとっちめましょう」『N A Z C A！』↑ナスカ・

ドーパントに変化

霊夢「そうね・・・」↑鬼巫女が

流れる映像、因幡てゐがボコボコにされている映像。とりあえず締め、エビゾウ

エビゾウ「FAIRYTAIL 空の刀が目指すは雷の神、続けぜ
！」

第七十話 ライジング

side 聖夜

「おいおい、なんでお前がライジングのメモリを持ってるんだよ・・
」

「いつか借りたと思う」

なんで俺が瞬にライジングのメモリ貸さなきゃならないんだよ。瞬にはオーズドライバーあるだろう。蛇川に至ってはデイケイドライバー持っているぜ。ま、ライジングのメモリは返してもらったからいいとするが。

「今日の依頼は・・・・狼男を倒せ？」

ま、細かいことは考えずに俺は依頼へと行く

「依頼主のところ」

「んで、満月の夜までに狼男を倒してくれ？あと一日じゃねえかよ
！！」

無理な依頼にもほどがあるぜ、狼男はどうやらあの山の山頂に現れるらしく、それを退治してくれとのことらしい。さつさと倒しますか
「と、いうわけで来たが・・・ナスカ・ドーパントじゃねえかよ。
さつさと倒すか」

『RISING！』

「Hailey up！」

そして俺は仮面ライダーライジングへ変身する。

『RISING SHAF！』

そしてメタルシャフトの黄色版のライジングシャフトを出して、ナスカ・ドーパントをたたく。案外簡単にひるんでしまいうらしく、すぐにしりもちをついた

「これで決める」

『RISING、MAXIMUM DRIVE！！』

「ゲイ・ボルグ！」

ライジングシャフトに雷をまとわせて相手を攻撃する技だ。そしてナスカ・ドーパントをたたく。そして、ナスカ・ドーパントからメ
モリが抜けると・・・

「妹紅！何でお前が……」

「聖夜？今まで俺は何をしてたんだ？」

どうやらT2メモリを拾ってドーパント化したらしく、この世界に迷い込んで暴れていたらしい。俺が元の世界に妹紅を返そうとする

「や
す
だ
」

と、腕にひっついてきた。俺はとりあえずナイアに電話する

「ナイアー、妹紅がさあ、腕にひつついてはなれない。どうすればいいんだろう？」

あとでO H A N A S H Iね

「それだけはやめてください」

『冗談よ、とりあえず妹紅を家の子供にしたら？まだ依頼の途中なんですよ？妹紅だけ家に送って、そのあと帰ってきなさいよ』

「あいあいさー」

そして俺は、妹紅を俺の居城（ナイア曰く、家）に送つて、依頼を成功させて、家へ帰る

聖夜の居城改め、
聖夜の家

「聖夜」

「聖夜」

ナイアと妹紅が右腕と左腕にくつついてきて、普通の男なら赤面するだろうが、俺にとっては不幸でしかない。しかし、二人を魔法で眠らせて、風呂に入り、寝た

「セイヤ、ナンデヒトリデネテルノ？ナンデモコウトイツシヨナノ？」

「すみませんすみませんすみませんすみませんすみませんすみ
んすみませんすみませんすみませんすみませんすみませんす

んすみませんすみませんすみませんすみませんすみませ
んすみませんすみませんすみませんすみませんすみませ
んすみませんすみませんすみませんすみませんすみませ
ん許してください許してください許してください許してくださ
いに深いわ「チヨット、オハナシ、シヨウ力？」いやあああ！
！！！！」

意識暗転

意識覺醒

「し、死ぬかと思った……」

「ツギカラハワタシモイツシヨニ……ネ？」

「カタカナやめてええええ！！！」

しかし、妹紅を養子にするのはさすがにあれだな〜と思っていたが、家を幻想郷に移すということで納得し、妹紅が我が家の子供になりました

Side out

第七十話 ライジング（後書き）

霧彦の部屋 リバイバルトーク

霧彦「どうも、園咲霧彦です。今回は誰も居ないようですね。ゲストが。というわけで、今日はお休みです」

第七十一話 珍しく真面目

side 聖夜

「おいおい、俺は最近ドーパントがらみの事件に巻き込まれるようだな・・・」

この出来事の発端は数時間前にさかのぼる

約3時間前

「なになに・・・球体の怪物を止めてくれ？もしや・・・VIOLENCE？」

バイオレンス・ドーパントのことである。しかし、普通依頼ではあるが、S級並みであるので、俺が行くことにした。ついでにサポートの為にウエンディも。え、ロリコンではないですよ？ナイアと妹紅からも許可取りましたよ？

とりあえず今へ戻る

「あの、巻き込んで悪かった。許してくれ」

「い、いえ・・・それよりも、倒さなくていいんですか？」

「すぐ終わるから大丈夫」

そして俺はロストドライバーとライジングメモリを取り出す

『RISING!!』

「Halley up!!」

そして、仮面ライダーライジングへ変身する。そして、ストームメモリを取り出す

『STORM!』

これは疾風の記憶を超えた、暴風の記憶である。サイクロンより強い一撃必殺!!」

『STORM! MAXIMUM DRIVE!!』

「ストームスパイラル」

そして、相手のバイレンスドーパントに蹴りを入れる。さらに腹に回し蹴りをたたき込み、吹き飛ばす。さらに、ライジングマグナム

を取り出し、そこにライジングのメモリを入れる

『RISING! MAXIMUM DRIVE!!』

「ライジング・・・ブレスト」

そして、さらに雷の弾をドーパントに叩き込む。そして、ドーパントは爆散した。俺は変身を解く

「案外弱かったな」

「いつもはどんだけ強いんですか・・・あの敵」

よし、ウエンディをツツコミ化する計画も第二段階に突入だZE!
!ま、そういうのは置いといて、ドーパント化したのは誰だったのかな?

「誰ですか?この人?」

「ああ、霧雨魔理沙って言ってな、ニルヴァーナ並みの魔法をぶっ放す奴だ」

「そんな人いるわけじゃないですか」

「いや、いるからな。現実に。マスパ侮るなよマスパ」

魔理沙がいつの間にか起きて、マスパ侮るなよマスパと言っていた

「いやゝ死ぬかと思っただぜ」

「いや、とりあえず今度なんかおごってくれよ、聖夜」

「分かったから帰れ」

俺は魔理沙を問答無用で帰す。

「帰るか」

「何でそんなに平然と言えるんですか!」

ついにツツコミ要員として覚醒したウエンディであった。

side out

第七十二話 瞬のフラグ確定（前書き）

えーと、今回から更新が不定期になります。すぐに戻るかもしれないが。あと、8月26日まで更新できません

第七十二話 瞬のフラグ確定

side 聖夜

「今回は瞬にフラグを立てるぜ」

「唐突だなおい!？」

俺に突っ込むのは蛇川。これは瞬にフラグを立ててまあいろいろ「ピーー」的な事になるかな〜という実験である。というわけでフラグを立てる相手を決め要的な事になっている

「俺はこまっちゃんがいいと思う」

「マテリアルのレヴィ (Strikers フェイトの髪の色を水色にした感じ) がいいと思う」

という馬鹿な討論は一时间近く続いた。もういろいろありすぎて書ききれないので遠慮しておく。ちなみに

「四季映姫でいいじゃん？」

「聖夜ナイス」

というわけであの四季映姫に決まった。というわけで、映姫に適当に送るもの (やきとり・菓子もろもろ) を瞬に送ってもらおうということにした

side out

side 瞬

「瞬、これを映姫に持ってって」

「何でだよお」 「〇〇〇〇〇〇上げる」 よし来た!

100万くれるんだぜ! ? やらないわけがないだろ? 俺はその荷物をもらいうけ、三途の川へと向かった

三途の川

「こまっちゃん、映姫のところまでつれてってくれ」

「何でだい? 暇だからいいけど」

ていうかサボマイスターに言われたくはないと思いつつも、かわいいから許す思考になっている俺は、特に追求もせずに行く。

「あんがと」

「いいってことよ」

俺は映姫がいる裁判所まで、歩くのが面倒くさいので、テレポで行く
「映姫」

「何ですか？まったく生きている人間なのに地獄まで来るなんて・・・それは何ですか？」

「お菓子だけど？」

「もらいます」

あっさり折れた。それにしても・・・食べてる映姫可愛いな、いや、かあいとしか言いようがないぜ！！俺も食べようかな・・・
と思ったら全て消えていた

「もう食ったのかよ!？」

「おいしいので・・・すみません」

「別にいいけど・・・」

俺はそう言いながら映姫の頭を帽子越しになでる。それにしても、
映姫の顔が赤かったのはなぜだろう？

「あ、あなたはなんていうことを・・・」

「何でだよ？俺なでただけだぞ？」

何で映姫怒っているんだろう？

side out

side 第3者

「おっしやあああああああ!!!!!!」

「うiiiiiiiiiiiiiiii!!!!!!」

この二人は狂喜乱舞していた・・・

side out

第七十二話 瞬のフラグ確定（後書き）

霧彦の部屋へリバイバルトークへ

霧彦「どうも、園咲家のいい婿、園咲霧彦です。今回は、四季映姫・ヤマザナドゥさんです」

瞬「かわいいな」

映姫「……」↑笑っている

霧彦「映姫さん、おい、おい、トリップしないでください」

映姫「……ハッ！何でしょう」

霧彦（今回フラグがたちましたね。頑張ってください）

映姫（にやあああ！?!?!）

霧彦「次の質問ですが、興味深かった死人は誰ですか？」

映姫「大道克己さんですね。正確には言えませんが」

霧彦「次回のゲストは、あの人です。ではまた」

映姫「……（瞬、好き）」

瞬「なんか言ったか？」

映姫「何も言っていない!!」

第七十三話 記憶喪失編（前書き）

今回衝動的にオリキャラ登場。名前に「海」が二回は言っているのに属性が雷。そして、

本当にすみませんでしたあああああああ！！！！Fate介入させて本当にすみませええええん！！！！

第七十三話 記憶喪失編

side???

「ここは・・・どこだ？そして・・・俺は誰なんだ？」

何にも思い出せない・・・このデバイス、ライジングのことと、宝具、ネクロマンサーの事は覚えているが・・・それにしても・・・なんで俺は何も覚えていないんだ？

「！！」

俺は横に飛び退くと、そこには塵となった木があつた。

「誰だよ・・・」

「俺か、俺はソード、お前は？まあいい、すぐに死ぬんだからな」

「あいにくながら死ぬ気はなくてね・・・ライジング、セツプアップ」

俺は自分のデバイス、ライジングを使う。バリアジャケットは上が黄色のノースリーブ、下が黄色の短パンで、マフラーをつけている。変態みたいだが・・・

「死ね」

「ネクロマンサー」

俺は日本刀の形状をした剣、ネクロマンサーを取り出す。そして、それでソードに斬りかかる。ソードはどこから出した剣で受け止める。それをたたき斬ると、ネクロマンサーの真名を開放する

「封印されし邪剣^{ネクロマンサー}」

そして、禍々しい雰囲気を纏った刀へとなり、それでソードを切り裂こうとするが、ソードは槍で受け止める。しかし、それもすぐに折れ、ソードに屍が生きたようにまとわりつく

「なんだ・・・これは！！」

「この宝具、ネクロマンサーの真名開放はな・・・確かに刀の切れ味も威力も上がるが・・・死人を操れるんだよ、真名開放すると。ネクロマンサーの語源は、ネクロマンシー、死者を操る魔法使

いさ。いいすぎたかな？まあいい、すぐに死ぬんだからな」

俺はソードが自分に吐いた言葉と同じ言葉を吐く。そしてネクロマンサーをソードの真上に振りかざす

「dead」

そして、屍が沈むとともに、ソードも沈んでいった

「さすがに使いすぎたか・・・」

俺はネクロマンサーの真名を解放したのを封印する。

「さてと・・・」

俺は静かに歩きだした

第七十三話 記憶喪失編（後書き）

霧彦の部屋 リバイバルトーク

霧彦「さてと・・・」

霊宮「霧彦、有給やるから帰れ」

霧彦「分かりました」

第七十四話 記憶喪失編2 (前書き)

やってしまった。だが、後悔していない

第七十四話 記憶喪失編2

side???

「それにしても・・・俺の名前は何なんだ？」

ソードを葬った後、俺は適当そこから離れる。あとから眺めていると、人が何人かやってきて、痕跡を探していた。しかし、俺も妙な気を感じると、そこには、

「狐耳と狐の尻尾をはやした美女？D A R E D A」

最後に、一つ言わせてもらいたい、なんかすごい、人間を超越した力と、あふれそうな力のたぎり、その手を握ると、握った手が発熱する

「何だこれは・・・？」

この、力の塊というべき人間は、ついさっき、俺と同じようにここに倒れていたらしい。まあとりあえず、おぶって適当なところまで行く。

「とりあえず・・・これでいいか」

「もしかして・・・あなたが私のご主人様ですか？」
マスター

へ、マスター????????ナニソレ、オイシイノ????

「へー、どうやら頭の中が疑問符だらけになっていきますね、パニックつてるとか。まあ仕方ないんですけどね。それにしても・・・」

うん。と彼女は悩む。狐耳がピクピク、と動いている。なんかかわい、握りたい、触りたい、頬をすりすりしたい、などの欲望が・・・やべ、雑念は消そう。本気で

「いま、私のことかわいいと思いませんでしたか!？」
いえねええ!!!!とりあえず・・・

「無言ですか・・・」

「いえ、かわいいと思いました」

言うしかねえ!!!!!!

「やっぱり！私は、ご主人様絶対主義ですから！」

うん、後で作者殺そう

「そういえば、ご主人様の名前ってなんですか？」

「ない」

「いや、あるでしょう普通に、名前くらいは」

「俺は記憶喪失だから」

そいつは言葉を失ったらしく、口をあんぐりと開けていた。

「なるほど・・・じゃあ、適当に、園宮礼二」

「却下」

「えー、じゃあ・・・海原海斗でどうですか！」

とりあえずそれにしておくか

「分かった、そう言えば名前、俺も聞いていないんだが」

「私ですか、私はキャスターです！」

そうか・・・

「じゃあキャスター、とりあえず宿を探そう。雨が降りそうだ」

「そうですか？降らなさそうですけど」

とりあえず俺はキャスターと手をつないで、歩きだした

side out

第七十四話 記憶喪失編2 (後書き)

靈宮「ギヤアア!!!!!!!!!!!!!!」

[illegible]

キャスター「というより、この作品って、別の人が主人公じゃないですか!？」

靈宮「これは、聖夜との絡みはあと2話くらいだ」

キャスター「作者旅行するじゃないですか！8月22から8月26の日付変更まで！そして夏休みの宿題もあと少しある・・・そうすると大変なんですよ！理科の原稿用紙もA4版に書かないといけな
いし！マジありえない！！」

靈宮「いや、下書きっぽいのは一応あるし、感想文もコピーの奴家でやって、それを本当のサイズでやるからさ」

キャスター・海斗「ならさっさとやれやああああ×!!!!!!」

靈宮「ごめんなさああああ
いいいい！！！！」

海斗「友達に頼んで教えてもらえ」

靈宮「信用できる友達がいるので最後の三日ほどで出来ると思います」

キャスト「ではまた」

第七十五話 海斗の紹介（前書き）

8月21からしばらく更新できません

第七十五話 海斗の紹介

海原海斗 ウナバラカイト 男 16歳

元々は作者が恋愛ゲームルート作製で出来たキャラ。容姿は灼眼のシャナの佐藤啓作の髪を黄色にした感じ。デバイス、ライジングに宝具、ネクロマンサーを所持しており、サーヴァント、キャスターのマスター。令呪は、絶対命令権がない令呪であり、聖杯戦争参加権の役割だけ果たしている。ちなみにこの作品では、聖杯戦争はない。ぶっちゃけ作者の好み。記憶喪失で、名前もキャスターがつけたもの。記憶については、デバイス、宝具の使用方法しかないが、一般道徳、常識はある程度身についている。というよりは、身に染みている

デバイス ライジング

バリアジャケット、黄色のノースリーブに黄色の短パンにマフラー形態

銃

手甲

剣

技

ライジング・バスター

黄色の砲撃で、雷の属性を持つ。手甲からでも撃てる

スターダスト・ブレイカー

白銀の砲撃、決してSLBとか光さす道となれの奴とはあまり関係がない。手甲からでも撃てる

マシンショット

魔力球を銃の速さで連射する。銃からでしか行えない

バインド

おなじみの魔法。海斗のは黄色

ライトニング・ガード

黄色の壁をはり、攻撃を防ぐ。

シヨックシールド

自分を囲むようにしてはるシールド。防御精度は期待できる

ゲイ・ボルグ

雷の槍を投擲する。外れても雷が爆散するのでダメージは期待できる

宝具 ネクロマンサー

語源はネクロマンシー、ネクロマンシーとは死者を操る魔術を使う魔術師。黒魔術である。切れ味、硬度ともにエクスカリバーと同じ。

真名開放 封印されし邪剣^{ネクロマンサー}

切れ味、硬度ともに上がるが、死者を使役する力を持つ。死体だけではなく、怨念、魂すら操れる。が、周囲に魂または死体がない場合は使用できない。しかし、地獄から呼び寄せれば可能なため、使いようによつては無敵の宝具。この宝具の真価は、エクスカリバーのように正々堂々と立ちまわるのではなく、どんな手を使つてでも勝つ方法のときに役立つ。例としては、死人を操り、相手を拘束してとどめをさす。または怨念を相手に取りつかせる。などがある

サーヴァント

キャスター

Fate/staynightのキャスターではなく、Fate/EXTRAのキャスターである。原作とほとんど変わらず、使う宝具も「水天日光天照八野鎮石」である。呪詛などもほとんど同じである。何故呼び出されたのかはやはり不明。

第七十六話 記憶喪失編3 ちよとまと

side海斗

「キヤスター、その聖杯って何だ？」

「えーと、どこから説明すればいいんですかね・・・まあ、ぶっちゃけると、願いをかなえる道具です」

「願いをかなえる？たとえば、金が欲しいーとか、強くなりたいーとか」

「はい、そうです」

へー、便利なもんがこの世の中にはあるもんだな。俺はそう思いながら、ネクロマンサー地面をつつく。そうすると変な幽霊が出てきたので成仏させる。ネクロマンサーパネエ。

「キヤスター、ここらへんの場所って知っているか？」

「いえ・・・しりません」

だと・・・、砲撃で木をなぎ倒したほうがhｙ「それは駄目です！・・・」なんで思考に割り込むんだああああ！！！！プライベートだぞ！！！！

『いや、念話ですよ。テレパシーです』

『分かったからそのテレポシーって何だ？』

『テレパシーです！！！！』

まあこれがテレパシーらしい。思考に割り込むのは反則だけどさ。今度やってやろう。俺はそう野望を作ると、とりあえず前へ進もうとするが、木が邪魔なので斬り倒そうとするするが、それも駄目らしい。

「じゃあどうすればいいんだよー、ぶー」

「ぶーじゃありませんぶーじゃ！！！！」

キヤスター曰く、この木には意思が宿っているとのこと、俺は木に怒気が飛ばしてみる。すると道がぱっくり開いた。俺たちはそこを進むと、なんか塊の集合している場所があった。

「ずいぶんすごい街ですねえ・・・」

「街？なにそれおいしいの？」

「ここまで記憶喪失とは・・・まあいいですけど」

そついうと、OHANASIをキャスターは始めた。読者の方は1時間後から読んでください

～一時間後～

「分かりましたか？」

「ハイ、シツカリワカリマシタ」

片言は気にしないでください。そしてあえて言います。キャスター
怖いよオオオオ！！！！！！

「まあとりあえず・・・衣食住を探しましょう」

「ああ、あれだろ、着るもの食うもの住める場所」

「何でそれは思い出しているんですか・・・？」

まあ気にせず俺は先へ進む

side out

第七十六話 記憶喪失編3 ちよとまで（後書き）

マズマ「なんだよこの駄目文」

霊宮「黙れよ映画好き」

BRS「・・・」

マズマ「言ってる馬鹿!!」

霊宮「だまれチューリップ!!」

マズマ「キャラが違う!!!」

BRS「バーストショット」

マズマ・霊宮「あれれーwwww!!!!」

撃沈

BRS「今回も駄目文にお付き合いいただきありがとうございます。次回もよろしく願います」

第七十七話 記憶喪失編 4 記憶よどこへー（前書き）

海斗「重大な報告があとがきにあるそうだ」

第七十七話 記憶喪失編 4 記憶よどこへー

side 海斗

「それにしても・・・なんか腹減ったな・・・野宿するか」

「何で野宿ですか！？乙女の肌に悪いんですよ！？」

だってなんか金が必要だとか言われても、持っていないので、野宿しかないのです。つーか池袋って、どこらへんなだろうな？国もわからないし、いくらか記憶は蘇ってきているが、何か確信がない。どこかで見たとような気はするが、あやふやなものなので

「それにしても、聖杯って落ちてないかな？」

「落ちてたら苦労しません」

キャスターが苦笑いしながら突っ込むと、霊体化した。俺が横を向くと、なんか変なものがあつた。すごい力を感じる。

「何で聖杯落ちてるんですか！？」

「知らないよ！俺が知ってたら驚きだわ！！」

俺は願いをかなえられるのをキャスター経由で教えてもらったので、記憶よ戻れ。と念じるが、記憶は戻らない。それどころか、ウンともスンとも言わない。

「キャスター、お前が願いかなえていいよ」

「え、本当ですか。じゃあ・・・」

「言っておくが自分の幸せのために使えよ、俺関連で使うなよ」

俺はそう釘をさすと、その場にあるベンチにどさつと座る。

「！！」

その時、俺の中に、何かが流れ込んできた。なんだこれは・・・？流れ込んできた記憶

『なんだよ、俺が負けれると思うのか？あんなストックどもに』

俺がいるが、髪の毛が白色で、瞳が淡い紅色だった。ストック？なんだそれは？

『ならいいが・・・私を一人にするなよ？』

それに答えたのは、白色の髪をツインテールにした。その女は、何もかもが白色に近かった。ただ、皮膚は肌色なのと、瞳が俺と同じ淡い紅色だった。そして、露出度が以上に高い。その女に過去の俺は笑いながらこう告げていた

『はあ？マズマとかミーとかも全員ストックどもをネブレイドしたじゃねえか。俺も誰かをネブレイドしないと気がすまねえぜ』

そして、過去の俺は女の頭をなでると、その場から走り去っていた
現在

「なん・・・だ・・・たんだ？今のは」

「どうしたんですか？マスター」

俺はキャスターを見上げると、なんでもないとでも言うように立ち上がった。それにしても今のは何だ？俺の過去と関連があるのか？今考えても仕方がないので、俺は立ち上がるとキャスターの後について行った

side out

第七十七話 記憶喪失編 4 記憶よどこへー（後書き）

霊宮「実は、キャスターをこの後も出し続けるか、それとも聖夜の不可抗力で記憶を消して元に戻すか、何らかの出来事で退場するか迷っているんだよね」

マズマ「1番だと、海斗の記憶が戻るのずいぶん先になるんだよね」

霊宮「キャスターの性格上の問題で」

マズマ「2番でも聖夜の敵になって記憶戻らずじまい」

霊宮「3番だけなんだよね。記憶が戻るの」

マズマ「というわけで、感想で

1番 キャスター退場しない

2番 聖夜介入でキャスター退場

3番 何らかの出来事で退場（この場合はサラッと経緯を書いてください）」

霊宮「では、感想で送ってくださいお願いします」

マズマ「俺の名前が出たな」

霊宮「うん、分かる人は分かるな。淡い紅色の瞳で。俺は瞳の色をそう思った。ヒントは、ロックシューター。これくらい言えば分かるかな。黒のほうじゃない。感想お願いします」

第七十八話 ロスト・メモリー編 1 月へ（前書き）

かつてに新編に突入しました。

第七十八話 ロスト・メモリー編1 月へ

side海斗

あのフラッシュバックした記憶から思い当たることは、あそこが月だということだけだった。しかし、月に行くには……

「キャスター、月までいけない？」

「無理です。でもあいつなら出来そうですね」

あいつ？誰だそれは？

「あいつって誰だよ」

「いや、会えば分かるので」

そしてキャスターが変なスイッチを押すと、場所が変わった。そして、俺の目の前には、黒い髪を肩より少し下くらいに伸ばした奴がいた。

「おう、玉藻来たのか？なんのようだ」

「月までですよ」

「何で月まで……ああ、そいつか。分かった。フォーゼドライバーがあれば十分だろう。宇宙空間でも息が出来る奴だし」

そう言くと、黒髪の奴は変なものを投げてきた。俺はそれをキャッチする

「そいつを腰につけてみる」

俺は言われた通りに腰につけた

「次は赤いスイッチを押してみる、全部押したら、カウントが入るはずだから、そのカウントの1のすぐ後に、右腕を胸の前でこうやって組んで、変身！て叫んで、レバーを引くんだ。やってみろ」

俺は言われた通りに赤いスイッチを押す

3、

「何これ！！！」

2、

「いいからやれ！！」

1、

「変身!!」

俺はそう叫び、レバーを引く。そして、急に眩しくなると、俺の体
が変なことになっていた

「なんじゃこりゃああ!!!!!!」

「それが仮面ライダーフォーゼ、まだ1話しか放映していないが、
いいだろう。後、現段階であるチェンソーのスイッチも入れてお
くから。使用方法は頭の中に流して置くぜ」

ずいぶん適当なやつだな。まあいいか。手助けはしてくれるんだし。

ROCKET ON

俺はロケットモジュールを使い、月まで飛んでいく。

side out

side 聖夜

「いいのか、月に行かせて」

「もつとあなたが細心の注意を払って行かせてください」

俺は玉藻に文句を言われながらも新しいスイッチの開発をしている。
マジックハンドモジュールだったような気がする。しかし、あの佐
藤啓作似の奴……記憶が戻ったらすごいことになるかもしれ
ないぜえ……

side out

side 海斗

「ここが月か……殺風景なところだな……やっぱり記
憶は戻らな……」

俺が適当に横を見ると、変な穴が開いていた。

「もしかして……」

俺はその穴に飛び込んだ

side out

第七十八話 ロスト・メモリー編1 月へ（後書き）

マズマ「駄目文じゃねえか」

霊宮「精進します」

聖夜「それにしてもフォーゼ登場か」

霊宮「フォーゼ好きだから」

WRS「おい、私の出番は!？」

霊宮「あと少し」

聖夜「ではまた」

第七十九話 ロスト・メモリー編2 戻る記憶（前書き）

いきなり戻りますが、戻ってもまだ続くと思います

第七十九話 ロスト・メモリー編2 戻る記憶

side 海斗

「それにしても、この穴は一体どこまで続いているんだろうな」

俺は穴をロケットモジュールで下へ落ちているが、一向に空間が現れない。

「うう……なんだよ……」

そして、俺の意識は静かに薄れていった……

side out

side 海斗

(ここは……)

俺は見上げると、俺は霊体みたいなものになっていた。そして、そこには前の記憶で見た俺がいた。その目の前には、変な赤色の髪の奴

「なあ、マズマ、またネブレイドしたのかよ。飽きないねえ」

「ああ……爺さんだっただけど、なかなか良かった。ビッグ・スナイプの主演のストックだ」

マズマ？それが赤髪の奴の名前か……。そして、今度は別の光景になった。そこには黄色の鎧みたいなものに身を包む眼鏡をかけた女と屈強な男がいた。

「カーリーはまた動物をネブレイドしたのかよ……本気で前のほうがよかったぞ」

「うが!？」

「なんてこと言うんだい!？と兄さんは言っているわ」

あの言葉がよく通訳できるな……。兄妹だからかな？まあいいが、さらに光景は変わり、今度は白髪の青年がいた

「ああ、ストックどものオートなんかは気に入らない」

「はいはい聞きあきた」

態度がずいぶん違うな・・・さらに光景は変わる、あるときは手が機械の女の子だったし、別のときはずいぶん妖艶な女、屈強な老人だった。

（つまり・・・俺は人間ではなかった・・・キャスターみたいな存在だったということか）

そして、俺は自分の記憶を見ていった

side out

第七十九話 ロスト・メモリー編2 戻る記憶（後書き）

時間がなくて駄目文に仕上がりました

第八十話 ロスト・メモリー編3 結局こうなるわけで

side 海斗

「結局、一番思い出したい記憶がなかった」

「まあまあ、仕方がないことですしね。楽に思い出したら意味がありませんもの」

「S O U S O U」

俺は結局、一番思い出したい記憶は思い出せず、くだらない記憶がよみがえったよorzそれを仕方ないで一蹴するキャスターにS O U S O Uとローマ字で言う聖夜。なんなんだこいつら。本当になんなんだよ。マジで

「つーわけでフォーゼドライバー返せ」

「おらよ」

俺はフォーゼドライバーを投げ返すと、そこらへんにあるソファに転がり、寝始めた。すぐに俺の意識は沈んでいった

side out

side???

「やはり来たか……『ライ』」

やはり記憶を失っていたか……。まあいい、私の計画に狂いは……。ないからな

「また何かをやらかすの？」

「こりないわね、貴方も」

もう一人の私と、 그레이のプロトタイプでもある奴らが来た。

「いいであろう、これは――」

そして私は振り向く。かつて私がネブレイドしようとしたもの、そして、2回、私を倒した者

「これは、遊戯^{ゲーム}なのだから」

side out

第八十話 ロスト・メモリー編3 結局こうなるわけで（後書き）

最後の微妙なかけあいには、特に意味はないです。

第八十一話 出番ないズの出番

side 相山

「「「「「ついにではああああんんんん！！！！」」」」」

そう、俺たちは出番ができたのだ。ああ、今まで出番がなかったからだ、作者を何回もぼこぼこにしついに得た……幸せ

「いや、長かったな」

「ほんとにね」

「………同意」

参太、駆動、神咲が次々と言う。神咲に関しては、本編で出番が多くなるらしいが。しかし、2話でれた参太はうらやましい。

「お前らどうしたんだ？」

あ、蛇川の野郎がきやがった。

「誰が野郎だ」

「いたいたい、やめろ」

「いたいたい……変じゃない？」

俺は蛇川に某五歳児が受ける攻撃から逃げた後、ふらふらであった。久々の出番がこれかよ……

side out

side 参太

「ああ……でも作者は少なくとも出せるところでは出すらしいしな、期待はできる」

できれば90話と99話に歯出したいですby作者

「サンキュ」

そして俺は、久々の出番をかみしめながら、またアイス棒を口に運んだ。ほんと、おいしい

side out

side 駆動

「蛇川と神咲・・・兄妹みたいね？」

私はそう思いながら、コーヒーを口に運ぶ、ブラックがおいしいの、作者はコーヒー自体が飲めないらしいけれど。まだ子供ね

どうせ俺は子供だby作者

ま、飲めるようになればいいんじゃない？私はそう思いながら、隣に居る都山に話しかける

「ねえ、都山？」

「何、僕は今ちよつとプラモを・・・」

「いいから」

私はちよつと怖い顔になっていたかもしれない、気をつけなきゃね
「で、話は何だい？」

こいつのナルシスト風の口調は気に入らない。だって僕とかいう時点で（ピー）じゃない。ピーの部分はR18入るから言えないわ

「いや、リリなのstsの世界いつて、ちよち管理局をじらすだけよ？」

「それがあくどいんじゃないか？白い魔王が黙ってないしさ？」

「あー、じゃあパスね」

私は白い魔王と直死の使い手とだけはもうかかわりたくないのよ。切り刻まれたり、消し飛びかけたりしたんだから。まったくもって不幸ね

side out

side 都山

僕は、みんなに隠していることがある、それは、僕の出身の世界のことだ。ぶっちゃけ、すごい普通の世界で、超能力者もなにもない、すごい平凡な世界だった。え？なんでそんな世界に居たのにこんなことしているのかって？ああ、僕は能力者だったからね。それで、いじめを受けていた。いや、し返していたのほう表現としては正しいと思う。能力で病院行きだったから。そんな荒れた生活を

していた僕の前に、駆動が現れたんだ。

『一緒に、世界を回らない？ いろんな世界をちよじらして、楽しむだけだし』

僕は駆動の言葉に乗っかって、いろいろな世界を回った。その時、駆動は一人で世界を回っていたときだった。そこに蛇川も乗っかって、3人でいろいろ楽しいことをした。そして、転生できる能力を奪い取り、同じところ、同じ容姿、全てがそのままで、また生まれ、また世界を回る。さらにその中に参太、相山も加わった。さらに、聖夜・瞬と出会い、毎日が楽しくなった。このまま、続けばいいな、こんな日々が

side out

第八十一話 出番ないズの出番（後書き）

あえて神咲 side は出さない。次は神咲&参太&相山の過去編を書こうと思います。あと3日後くらいには何とか更新したいと思います

第八十二話 過去紹介 神咲、参太、相山

side 神咲

私の過去は、至って普通だ。普通に生まれて、普通に生きて、普通に死ぬはずだった。そんな日常に退屈していた私は、親の目を盗んで時々、夜の町へ遊びに出ていたこともあった。うん、その時螺旋力があるのに気づいて、その力で私はいつも絡んでくるチャラ男をたたきのめしていた。でも、蛇川にあった日かな？に、いつもどおりに倒そうとしたの。でもさ、蛇川強いじゃん。すぐに負けたわ。そんな時、蛇川がこう言ったの

『そんなに退屈なら、俺と一緒に来るか？』

私はその時に、惚れちゃったのかな？蛇川に。こーいうのをフラグとか言って騒ぐ奴がいるが、そんなに甘っこいものではない。なんせ、気付いてくれない。鈍感。あいつの頬を殴ってやりたい。でも・・・笑ったりされると、心なしか胸がときめく。気付いてもらえるまで、まってもいいかな？

side out

side 相山

俺と参太の過去は、同じ場所、同じ生活、同じ趣味をしていた。似た者同士だからな、俺らはいっつも喧嘩ばかりしていた。それで、特別な能力が俺たちにあると分かってから、俺らの喧嘩はヒートアップしてきて、恒例の喧嘩が始まるうとしたときに、

『そんなに喧嘩がしたいならよ、俺と一緒に喧嘩を売ろうぜ』

その言葉に心なしか俺たちはひかれて、旅に出た。しかし、参太と裏腹に、俺は残してきた弟が心配だった。参太も少し心配であったらしく、一度戻ってみたが、その時、サッカーで俺たちの弟が組んでいたのを見た。大丈夫だと、そのとき俺は思った。参太も同じことを思っただけ。そして、今は心おきなく旅をしているわけであ

る。ま、重い話をしてすまん。気にするなよ、妹紅

「いや、そんな軽い理由で自分の世界を飛び出していったな・・・」

「ま、退屈を紛らわすためでもあったさ。否定はしない」

そう、否定はしないし、逃げも隠れもしない、責められようと、俺は俺の道に行く。お前らはお前らで勝手に言ってるってな。そう言
つてやるさ。どんな奴にも

side out

第八十三話 大体分かると思うが100話までぐだぐだ(r y(前書き)

カウント・ザ・メモリーズ 現在聖夜が持っているメモリは？

N ナスカ

V バイオレンス

第八十三話 大体分かると思うが100話までぐだぐだ(r y

side 聖夜

今のところT2メモリで見つかったのはナスカのメモリとバイオレンスのメモリ。いろいろな世界に流れ込んでいるために、見つけるのは難航している。

「さてと……あのXのメモリも作らなくちゃならないしな」

♪

俺の携帯の着信メロディ（仮面ライダー電王のop）が流れた。形態を開いて画面を確認すると、ドーパントが現れたことを伝えるメールが来ていた。

「何のメモリだろうな」

俺はその世界へと向かって行つた

world ミッドチルダ

「あゝ、あんま来たくねえ世界に居るもんだな。ドーパントは」

俺は面倒ながらもメモリ回収のため、ロストドライバーとライジングのメモリを取り出す

『RISING!』

「Halley up!」

そして仮面ライダーライジングへと変身する。そしてスパークボイルダーを呼び出してドーパントのいる場所へと向かう。そこには、バードドーパントとアクセルドーパントがいた。

「二体も居るのかよ。面倒だな……」

俺はSのメモリを取り出すと、ライジングのメモリを取り出し、ストームのメモリを入れた。そして、体は仮面ライダージョーカーを深い緑色にした感じのライダー、ストームへと変わった。ちなみに語呂が変わっただけだ。サイクロンのメモリと変わらない。

「さあてと、まずは君からだよ」

そして俺はアクセルドーパントに鋭い蹴りを浴びせる。さらにブレ

イクダンスのように回転し、アクセルとバードの両方にダメージを与える。そして今度はフレアのメモリを取り出す

『FLARE！MAXIMUMDRIVE！！』

「ダイナミックフレア！！」

我ながらネーミングセンス悪いな。MAXIMUMDRIVEをアクセルドーパントに叩き込む。そして、空中にあるアクセルのメモリをキャッチすると、迫ってくるバードドーパントに蹴りをたたき込み、さらにパンチからとび蹴りで相手を後退させる

『ACCELERATOR！！MAXIMUMDRIVE！！』

「アクセラースナップ！」

そして左足を軸にして、右足でドーパントに蹴りを入れる。そしてさらにドーパントに迫り、熱された左足で蹴りを放ち、ドーパントを爆散させる。そして、バードノメモリをキャッチする。

「いよっし、アクセルとバードのメモリゲット」

そして、管理局に見つかる前に帰ろうとしたが、運が悪いことに機動六課にが向かってくるのが見えた。俺は厄介事には巻き込まれたくないのです、そのままミッドチルダを後にした。

side out

第八十三話 大体分かると思うが100話までぐだぐ(r y(後書き)

バードドールパント オウムヤミーを緑色にした感じ。

アクセルドールパント 仮面ライダーアクセルを怪物のようにした感じ

A & Bのメモリ介入

第八十四話 今更だけど100話まで頑張ろう。 うん（前書き）

c o u n t t h e m e m o l e a d s 現在聖夜が持っているT2

ガイアメモリは？

A アクセル

B バード

N ナスカ

V バイオレンス

第八十四話 今更だけど100話まで頑張ろう。うん

side 聖夜

「今度はどこだ・・・E?エターナルのメモリか・・・さらに密集して、ゾーンのガイアメモリまであるぜ。厄介だな・・・ゾーンは移動させることが出来るし、エターナルはガイアメモリ永久停止ができるしなあ・・・」

しかし、そんなこと言っていられないので、オーバーキルなガイアメモリを持っていくことにした

とある河川敷

「ここか・・・獲物がいたしな」

「RISING!!」

「Halleluyup!!」

俺は仮面ライダーライジングに変身し、エターナルドーパントへ走って向かう。直後

に場所が移動し、川の上だった

「なんだと!!だったら・・・」

「BIRD!!」

俺はライジングのメモリの代わりにバードメモリを差し込み、仮面ライダーブレイドを銀色のところを紫色にした感じのライダー、仮面ライダーバードに変身する。そして背中から羽を出し、空を飛びあがる。そして、Tと書かれたメモリを取り出す

「TIME!! MAXIMUM DRIVE!!」

「エンドレスストップ」

そして、時間を極限まで停止する。クロックアップみたいなものである。俺は厄介なゾンドーパントから決めることにした。ベルトの左側をたたき、ライジングマグナムを取り出す。

「RISING!! MAXIMUM DRIVE!!」

「ライジングシューター!!」

そして俺はゾーンドーパントを打ち抜く。後にはゾーンのメモリが残った。あとはエターナルのほうを倒すだけか・・・そしてタイムのマキシマムドライブが終わり、時間がまた正常に、しかし無慈悲にも動き出した

『ZONE!! MAXIMUM DRIVE!!』

「ワープパンチャー!!」

そしてドーパントの後ろへワープしてとび蹴りをし、さらにワープして殴る、最後に真上から蹴りを放ち、ドーパントを倒す。そしてエターナルのメモリをキャッチする。俺は変身を解くと、足にサッカーボールがぶつかった

「あー、すみませーん!! そのボールこっちに投げてください!!」俺は声がしたほうを向くと、11人の集団がいた。ま、ちよつと俺流の歓迎をしてやる。違うけどまあいいや

「ゆうかりん直伝、マスタアアアアアスパアアアアクウウウ!!!!!!」

そしてボールと一緒に極太レーザーをゴールまで叩き込む。啞然としているな。うん、後悔はしていないぜ!! そして俺は見事に逃走した

side out

第八十四話 今更だけど100話まで頑張ろう。 うん（後書き）

E & Zのメモリ介入

第八十五話 厄介なドーパントの組み合わせ（前書き）

count the memoleads 現在聖夜が持っているガイ
アメモリは？

A アクセル

B バード

E エターナル

N ナスカ

V バイオレンス

Z ゾーン

第八十五話 厄介なドーパントの組み合わせ

side 聖夜

「今度はこの世界か・・・廃墟だからちよーどいいな」

そして俺はその世界に、ガイアメモリ回収に向かったのだが・・・

・

「なんじゃこりゃあああ！！！」

手がパペットマペットのカエルとウシっぱいのに変化している。なんでだああ！！なんでだああ！！とりあえず一回戻ろう。ナイアもこたんに直してもらうんだい！！

「聖夜家」

「治してよオオナイアアア！！！！！」

「だから遺伝子が組みかえられているから無理よ！？つーか神にも遺伝子あったんかい」

何故かというと

30分前

『RISING！！』

「Halley up！！」

俺はライジングに変身し、ジーンドーパントとクイーンドーパントへ向かって行ったのだが・・・

「うお！？最初はお前からだぜ！」

そのとき俺はライジングマグナムを取り出す

『RISING！！MAXIMUM DRIVE！！』

「ライジングシューターてんこ盛り版！！」

てんこ盛り版のマキシマムドライブでクイーンドーパントは倒せたが、ジーンドーパントに手の遺伝子を組み替えられた。そして冒頭、ナイアとの掛け合いになるわけである

「まあ・・・戦闘力がないんなら私がやるわ。クイーンのメモリとロストドライバー貸して」

「いいけど・・・なんでクイーン？」

「いいじゃない、考えがあるしね」

そう言いながらナイアはその世界へ向かって行った。結局慰めとかそういうのないの！？悲しいよ、夫として悲しいよ俺！！

「あ、父さんどうしたんだ！？その腕！？」

「もこたあああん！！！！やつぱりもこたん娘にして正解だったああ！！！！」

父の威厳が無くなっていく・・・はあ

side out

side ナイアラトホテップ（以下ナイア）

どうも、読者のみなさんはじめましてね、聖夜の良き妻でもあり、漫才相手だと思われるナイアよ。まあ、腕のことについては同情はするわ。けれどね、あんなのすぐ治せるんじゃないかしら。聖夜だから。あら、お客様がきたみたいね

『QUEEN！！』

「変身」

私は仮面ライダージョーカーをピンク色にした感じのライダー、仮面ライダークイーンへと変身する。さてと・・・

「お仕置きタイムね！」

私はクイーンメモリの力でジーンドーパントの周りすべてに障壁を張る。もともとの戦闘能力は高くないからすぐ終わらせるわ。

『QUEEN！！MAXIMUM DRIVE！！』

「クイーンジャッジ、判決は・・・死刑！」

そしてジーンドーパントの周りにはった障壁を使い、ジーンドーパントを圧死させた。

「さてと、聖夜の腕治ったかしら？」

私は変身を解いて、自宅へと帰った

（聖夜家）

「やつぱり戻らねえええ！！！！腕斬り落として再生するわ！」

あきれた。けどやっぱり聖夜らしいわね
side out

第八十五話 厄介なドーナツの組み合わせ（後書き）

Q & Gのメモリ介入

第八十六話

Xと海斗と記憶のありか

(前書き)

うーた

第八十六話 Xと海斗と記憶のありか

side海斗

「それにしても、あの記憶は何の意味だろうなあ」

俺は聖夜からもらったXのメモリとロストドライバーをみている。

しかし、Xのメモリが白に浸食されて行くかのように白色に染まり、純白のメモリ。

「!?!?まさか・・・」

俺はロストドライバーを手に取れ、『染まれ』と念じた。すると、ロストドライバーまでもが白色に染まった。何故だ?白色に・・・それがお前の本質だ。全てを白色に染めてしまふ。自分の思い通りの色にな。やってみろ」

後ろから声がすると思つたら。そこには

「お前は!?!」

「やはり記憶喪失だったか・・・」

記憶で見た純白の女。唯一違つのは肌の色と淡い紅色の瞳。そして俺が使えていたであろう人物。

「whiterockshooter!!」

「英語ではあるが・・・the'slight」

そう、今戻つた俺の記憶、俺はホワイトロックシューターに仕えていた異星人であり、ザハよりも近かつた異星人、そして、彼女が唯一愛した異星人。誰よりも、高く、高く、俺が愛した者

「久しぶりだな・・・」

「ずいぶんと生意気な力を手に入れたようだな・・・私が与えた力よりも強い」

「ハッ!こんなのもういらねえや」

そして俺はデバイスと宝具を宙に放り投げ、本来の武器である、カイジンで切り裂く。傍目から見たら、もったいないと思われるが、俺にはどうでもいいことだ。だって、この力さえあればいいのだから

ら。さてと・・・キャスターにどうするかな・・・？俺の髪の毛は白色に染まっていて、瞳は紅色だ。・・・いま、嫌な視線を感じたようだ。まさか！

「マスター？その女は誰ですか？」

「心の底から同情するよ海斗。あとすげえ記憶持ってたんだな？」

「そんなk「これはどういうことだ、ライ?」へ・・・」

目の前には悪鬼のごとく眼をぎらつかせる二人の美女、いや、ヤン
デレこわ

ぎゃあ
あああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

Sidout

S
i
d
e
聖
夜

「まさか・・・WRSとはな」

俺は心底驚いた。しかし、俺の周りには、変な奴らしか集まらないのか……。あいつにどんな色にも染まることのない漆黒のカードデツキ、仮面ライダーリュウガのカードデツキでもあがるか。

Side out

第八十六話 Xと海斗と記憶のありか (後書き)

WRS「おい、今度からは・・・な」

キャスター「マスター・・・今回だけです」

海斗改めライ「ファイ・・・」

聖夜「同情する」

第八十七話 EXTREME（前書き）

count the memoleads 現在聖夜が持っているガイ
アメモリは？

A アクセル

B バード

E エターナル

N ナスカ

Q クイーン

V バイオレンス

Z ゾーン

第八十七話 EXTREME

side 聖夜

「全く、海斗の記憶は戻ったけど、ヤンデレ化した奴らもいるし苦
労が絶えないぜ」

もうなんか面倒くさくなってくるな。主人公っぽくない？うるさい、
主人公は面倒くさいんだぜ。そうしながらも俺はガイアメモリ回収
へと向かった

とある市街地

「俺こそ……ヒーロー」

「お前かよ……ロストドライバーとサイクロンのメモリ持ちや
がって」

俺はロストドライバーとライジングのメモリを取り出すと、ヒーロ
ー野郎を倒すために腰にドライバーを巻きつける。

『RISING!!』

「Haileyup!!」

俺は仮面ライダーライジングへと変身し、ライジングマグナムを取
り出す。そして、銃口をヒーロー野郎へと向ける

「さっさと持つているガイアメモリを渡せ。動くと撃つ」

「渡すわけにはいかない。これは力だ!!!!!!!!!!変身!!」

『サイクロオオオン!!!!!!』

どうやらヒーロー野郎の理性が崩壊して、ガイアメモリにもそれが
影響したみたいだ。あいつは仮面ライダージョーカーを緑色にした
感じのライダー、仮面ライダーサイクロンに変身する。そしてヒー
ロー野郎はこちらに向かうが、構わず俺はライジングマグナムを撃
つ。ヒーロー野郎は少し揺らぐが、止まる気配というものを知らな
いように突っ走ってくる。面倒だな……

『ACCELERATOR!! MAXIMUM DRIVE!!』

「アクセラースナップ!!」

そして左足を軸にして回転蹴りを放ち、熱された左足であいつに蹴りを入れる。ロストドライバーを直撃させた・・・はず

「コンナモノデハオレハヤラナイ!!!」

しかし、一瞬揺らぐ。そして、こちらにKのメモリが飛んできた。KEYだ。これは戦闘にはあまり使えないな。さてと・・・

『RISING!! MAXIMUM DRIVE!!』

俺はライジングのメモリをベルトのメモリスロットに入れ。大きくジャンプする

『サイクロオオン!!!!!! MAXIMUM DRIVE!!!!!!』

「ライダーアアキイイック!!!!!!」

そして上から俺のライダーキック、下からあいつのライダーキックがぶつかり合う。そして、さらにその途中に俺は鳥型ガイアメモリ、エクストリームをロストドライバーにつける。

『RISING EXTREME!!』

反則技だが勝つにはこれしかない。ちなみにロストドライバーの左半分のほうには、ダブルドライバーのようにメモリスロットがあるが、そこにメモリは入っていない。

『EXTREME!! MAXIMUM DRIVE!!』

「オラアアア!!!!!!」

そして、そのままやつを貫き、地面に着地する。そして、宙を飛ぶC サイクロンのメモリをキャッチする。終った

side out

第八十七話 EXTREME（後書き）

霊宮「にとりいいいいい！！！！」

BRS「せめてこの小説で報われる愛をおおお！！！！！！」

マズマ「ちくしょおおおっおっお！！！！！！！！！！」

聖夜「俺が介入してやるうっううう！！！！！！」

瞬「誰だああにとりを迫害したやつわああ！！！！」

蛇川「次回がまちきれねえ！！！！」

霊宮「修正したので次回も平常運航！！」

霊宮除く全「オンドウルラギッタンディスカー！！！！！！！！！！」

第八十八話 あゝ（前書き）

count the memoleads 現在聖夜が持っているガイ
アメモリは？

A アクセル

B バード

C サイクロン

E エターナル

K キー

N ナスカ

Q クイーン

V バイオレンス

Z ゾーン

pのパペッタードーパントの英語がでなくて無理です。マキシマム
ドライブ出せない

第八十八話 あゝ

side 聖夜

「それにしても……」のメモリとSのメモリ欲しい」

「お前のことだからwとスカルの奴集めたいんだろう」

瞬にいきなり突っ込まれた。だって欲しいんだもん」

「ジョーカーとスカルのメモリが欲しいのお！！！」

「だからってオーズ本編のメズールパロディをやるんじゃない」

俺は聖夜を気絶させた。え、どうやったかって。毒盛ったに決まってるじゃん。当たり前でしょ、そんなの。ちなみに永と書かれていたのは気にしないでくれ。読者のみなさん。俺はそういうと聖夜を押しつけてメモリ回収に行く。え、オーズドライバー？持っていないが何か？

とある世界の果て」

「お前がパペッタードーパントか。さてと……」

俺はオーズドライバーにタカ・トラ・バッタの順にコアメダルを入れる

「タカ、トラ、バッタ！！タ・ト・バ！！タトバタ・ト・バ！！！」

「行かせて貰う！」

そして俺はトラクロウを展開し、パペッタードーパントに斬りかかるが、パペッタードーパントが操る岩に阻まれる。なら……

「こいつだね」

「ライオン、カマキリ、チーター！！！」

俺はオーズの亜種、ラキリーターになる。そして阻む岩の間をチーターの速さで切り抜け、カマキリの双剣で岩を壊し、ドーパントの前まで迫ると、ライオディアスを発動させる。ドーパントは目がくらんだのか、あっちらこちらをフラフラと動いている。よし……これで決めるぜ

「スキヤニングチャージ！！！」

「セイヤアア！！！！」

ライオディアスで目をもう一度くらませ、カマキリの双剣で切り裂く。そして、パペッタードーパントはPのメモリへとなった。

「これでおしまい」

side out

第八十八話 あのを（後書き）

まさかこうなるとは

超番外 兆速 hyperspeed (前書き)

別世界の聖夜の「もしも」の可能性の中の1つです

超番外 兆速 hyper speed

side 聖夜

「おい、聖夜。待てよ」

「ああん？」

俺は高1の空刀聖夜だ。よく不良に絡まれる以外はまったくもって普通の高校生。まあ・・・面倒だけだな

「オラよ」

「グファー!!!」

俺は1人のチンピラの腹に鉄拳を叩き込む。さらにそいつの肩を使いジャンプして、もう一人にかかと落としをする。そして着地がてらに足払いを他の2人に叩き込み、ノックダウンさせる。

「あと一人♪」

「ひ、ひいひい!!!」

「逃がすかよ♪」

そして俺はコブラツイストをして、バックドロップで終わらせる。泡吹いていたけどまあいいや。そうして俺は帰ろうとしたが、不気味な気配がした。俺は後ろを振り向くと・・・そこには包帯ぐるぐるで顔と思われるところに黒い複眼がある。ざっと10体はいるだろうか

「チィ!!!!不幸だな!!!」

俺はその中の一つにニーキックをして、腹にヤクザキックをたたき込み後退させる。案外弱いなこいつら。そして俺はもう1体に回し蹴りをたたき込み、さらに落ちている鉄パイプを使って一体の首に当て、さらに、一気に横薙ぎにして5体を吹っ飛ばす。楽勝だな。

シューイイン

「!？」

そして俺はいきなり殴られ、宙に舞い上がる

「がはっ!?!」

さらに攻撃を連続で食らう。

「ガハア！？グファ！！！？」

ヤ・・・バイかもな・・・そうして俺の意識は闇へ消えた

side out

side 第三者

ここからの聖夜は、死ぬかと思われたが、蒼い戦士がその化物を倒した。そして、聖夜が目覚めたのは見事に病院のベッドであった。

「はあ？抜け出すか」

聖夜は抜けだそうとしたが、いきなりガシリ、と手を掴まれる。

「どこに行こうとしているの？聖夜」

「ア、コチヤサナエ様」

なぜ東風谷早苗がまだこの世界にいて幻想郷に行っていないかという、ぶつちやけ諏訪神社の風祝ではなく、普通の高校生の早苗である。パレルの「もしも幻想郷に東風谷早苗が行かないで、風祝ではない世界だったら？」の可能性である。聖夜が狙われる理由の一つでもある

「いやさ、病院辛気臭いから」

「だからって、そんな怪我して動いてもすぐに倒れるオチでしょ！？」

聖夜が自分の体を見ると・・・脱臼や骨折はしていないものの一日安静と言われるくらいの怪我ではある。

「へいへい、おとなしく寝てますよ」

「そうそう、それでいいですよ・・・それにしても、不良なら3秒ぼこしの聖夜が、ここまでやられるってもしかして、都市伝説にある化物にやられたんじゃない？？」

「都市伝説？なんだよ」

side 聖夜

俺は早苗の都市伝説という言葉に反応すると、話を聞いてみることにした。なんでも蟲の化物が高速で移動して人を襲うらしい。そし

て、それを倒す蒼い戦士がいるとかいないとか。

「なるほど、俺は都市伝説の生き証人ってことか」

「そゆこ……え！？あんた本気なの！？あんなの嘘だって」

「いや、間違いなく本当」

とりあえず俺は明日、その都市伝説を調べるとすることにした。余談だが……早苗が隣で寝ていたことはないことで。

「時間は流れるby十六夜咲夜」

「ここか……」

そして、唐突に奴は現れた。スズムシのような外見をしている。

「高速移動……やる前に倒す！」

そして相手に向かうが、そこに赤い何かが横切る

「！？」

俺は急に立ち止まるが、赤い何かはワームに突撃し、ワームを翻弄していた。そして赤い何かは俺の手にスポリ、とおさまる。そして、腰にはいつのまにかベルトが巻かれていた。

「なるほどな……」

俺はその赤い何かを上を持ち上げ、

「変身！！」

ベルトにセットした

『HENSIN』

そしてそこには、全身を装甲で包まれた、仮面ライダーカブト マスクドフォームが立っていた。そう俺は記憶する。そして、何故か使い方が分かるこの赤いカブトムシの角を反対側に倒す

『cast off、change beetle』

そして装甲ははじけ飛んでワームにぶつかった。そして俺は仮面ライダーカブト ライダーフォームへと変化する。そしてワームは高速移動したが、あせらずにベルトの左側を押す

『clock up』

そして俺も高速で移動する。そしてワームにカブトクナイガン、アックスモードで斬りつけ、さらにガンモードで撃つ。

「そろそろ決める」

『one、two three』

俺はフルスロットルスイッチを1、2、3の順に押すとゼクターホーンを戻し、そして再び倒す

『rider kick』

「はああ!!!」

そして俺はワームにライダーキックをお見舞いし、爆散させる

『clock over』

「ふう・・・」

俺は変身を解くと、どこかに赤いカブトムシ・・・カブトゼクターは去って行った。さてと・・・あいつは俺が呼ぶとくるみたいだな。

「hyper speed、俺の名は仮面ライダーカブトだ」
side out

超番外 兆速 hyperspeed（後書き）

オーズから屑やミー、カプトからベルクリケタスワーム。
ベルクリケタスワーム、スズムシが元のワーム
本編とは関係ありません

第八十九話 Xのメモリと海斗と乱太（前書き）

はい、今回で海斗が変身するライダー、仮面ライダーXが出ます
仮面ライダーX

X カイのメモリで変身する。白色のジョーカー。Xマグナム（トリガーマグナムの白色版）も使用できる。スペックはサイクロンジョーカーエクストリームなみにある。ガイアメモリ強化アダプターにより、仮面ライダーX endになる。この場合は仮面ライダーXに純白のマントがつく。

count the memory leads 現在聖夜陣が持っているガイアメモリは？

A アクセル
B バード
C サイクロン
E エターナル
G ジーン
K キー
N ナスカ
P パペッター
Q クイーン
V バイオレンス
X エクストリーム
Z ゾーン

第八十九話 Xのメモリと海斗と乱太

side 蛇川

「ライイイイイ！！！！！！」

「マスタアアア！！！！！！」

「マズマアアアリリオオオオ！！！！助けてくれえええええ！！！！！！」

今現在の状況は、海斗がWRSとキャスターに追いかけている。海斗はマズマとリリオに助けを求めるが・・・

「僕には荷が重い、無理だ」

「俺も無理だ」

と、あっさり断られた。そして窓を突き破り逃げて行った。そして二人は壁をぶち壊して追いかけて行った。

「『ギヤグマンガかよ！！』」

「総督・・・元に戻ってください」

サハだかザハだかわからないけど、かわいそうだな・・・本当に、リリオとマズマもとりあえず同意している。ちなみにマズマは2面で、リリオは4面で敗れているため、弱いというイメージがあるが、マズマのスペックが一番すごい、バイクに歩きで追い付いているからな。時速140キロに。リリオは・・・いいこと見つからん

「僕だけぞんざいだああ！！！！」

「そういう役割だと思ったが。俺は」

「確かに・・・俺は少しあの2人にOHAゲフンゲフン・・・お話しないとな」

アンタ怖つ！！！！もう総督アンタでいいよ！！！！最強だよ！！！！と、そんなこんなでマズマは出ていく

「僕もウボアとお話があつて」

リリオよ、ウボアではなくウヴァだ。名前間違えられてウヴァ泣い

ていたぞ。あいつ以外とうたれ弱いからな。あの人アंकのアイス
アイスやギルの良き終わり（ryとか力ザリ暴走とかガメルの世話
とかメズールの手伝いとかで忙しいんだよ！！！！

「名前を間違えないよーにな」

「それは分かっている」

そうしてリリオも出て行つた。

「うっぎゃああああ！！！！！！！！」

そしてまた海斗が戻ってきた。

「お前もう大人しくお縄につけそして永遠におやすみ」

「不幸な事を言うな！！！！それとドーパントだ。確か……………
ロケットドーパントとルナドーパントだっけ？」

あのオカマドーパントと乱射魔……………

「とりあえず行くぞ海斗」

「おk」

そして俺たちは目的の場所へと向かう

くまあ、説明も面倒だから多元世界、スパロボの

「さてと……………」

「X！！！！」

『カメンライド』

「「変身！！！！」」

『デイクライド！！！！』

俺は仮面ライダーデイクイド、海斗は仮面ライダーXに変身する。

海斗はいきなりXマグナムでロケットドーパントに攻撃する。しか
し、ロケットドーパントもまけじとミサイルを乱射するが、海斗が
全部打ち落とした。

「さてと……………次はこちらだな」

そして海斗はロケットドーパントを追いかけて行つた。俺もルナド
ーパントの相手しなきゃな……………

「うふ、イケメンね。優しくしてあげる」

「おええええ！！！！さっさとやる！！！！」

俺はケータツチを取り出す

『クウガ、アギト、リュウキ、ファイズ、ブレイド、ヒビキ、カブト、デンオウ、キバ、ディケイド!!ファイナルカメンライド、ディケイド!!!』

俺は仮面ライダーディケイドコンプリートフォームへと、ファイナルカメンライドする。

「さてと、仕事だぜ夜の王!」

『キバ、カメンライド、エンペラー』

俺は仮面ライダーキバエンペラーフォームをカメンライドする

「いくわよ!!!」

オそつ!!!!遅すぎるよ!!!。まあいいけど

『ファイナルアタックライド、キ、キ、キ、キバ』

「オラアア!!!!」

そして俺はファイナルアタックライド、キバでルナドーパントを粉碎する。

「終わった」

s i d e o u t

s i d e 海斗

俺はドーパントを追いかけて、追い詰める。ドーパントはまげじとまたミサイルを乱射するが、全て撃ち落とす。

「なんでだよ!!!」

「お前が弱いんだろ!!!」

俺はドーパントに蹴りを入れると、腹に零距离で弾を撃ち込む。ドーパントは大きく吹っ飛ばされた。こいつ・・・まったく使い方がかってないぜ

「もう終わりだ。そして・・・」

俺は親指を下に向ける

「kill you」

『X!!!MAXIMUMDRIVE!!!!!!』

「killend」

俺は白いオーラをまとった回し蹴りをドーパントに叩き込み、爆散させる。宙を舞う Rocket のメモリをキャッチした。

「帰ったら続きか……」

sideout

第八十九話 Xのメモリと海斗と乱太（後書き）

L & Rのメモリ介入

第九十話 アップグレード（前書き）

今回、後書にて重大報告があったりなかったり。なので本編は短い
です

count the memoleads 現在聖夜陣が持っているメ
モリは？

A アクセル

B バード

C サイクロン

E エターナル

G ジーン

K キー

L ルナ

N ナスカ

P パペッター

Q クイーン

R ロケット

V バイオレンス

X エクストリーム

Z ゾーン

第九十話 アップグレード

side 海斗

「平和だなー」

今日はWRSやキャスターに追いかけれなかった。リリオがミーに追いかけられていたけど気にしない気にしない。なぜなら、リリオが幸せのあまり叫んでいたからさ

「いや幸せじゃない!!!!!!!!!!死ぬうう!!!!!!!!!!」

「照れ隠しするなよ。幸せそうなのは一目瞭然だ」

「リリオオオオオ!!!!!!!!!!!!!!!!生きるオオオ!!!!!!!!!!!!!!」

マズマアアアアア!!!!!!!!!!なんかカーリーにまたがりながら叫んでるうう!!!!!!!!!!そんなに仲良かったのかお前ら!?シズはのんきにテレビみてるし!!!!!!!!!!昼ドラエイシ!!!!!!!!!!とりあえず・

「ガイアメモリ回収に行ってくるね」

「「「投げだすな!!!!!!!!!!」」」

無理

とある廃墟

「そついや聖夜が欲しがっていたJのドーパントだよな・・・やるか」

「X!!!!!!!!!!」

「変身」

俺はXのメモリをロストドライバーにいれ、仮面ライダーXに変身する。そしてガイアメモリ強化アダプターを使う

「X!!!!!!!!!!upgrade!!!!!!!!!!」

俺は仮面ライダーX endへと変わる。そして、ドーパントにXマグナムの銃撃をお見舞いし、さらにツ蹴りを入れる。

「さてと・・・こいつで決めるか」

俺は毒々しく、黒く、鮮やかに光るEのメモリを出した。そしてメ

モリをXマグナムに挿入する

『END!! MAXIMUM DRIVE!!』

「the end」

俺はマキシマムドライブをドーパントにお見舞いするが、ドーパントはそれをよけ、こちらに蹴りを入れる。

「がはあ!! やりやがったな。オーバーキルで悪いが・・・」

今度は赤いGのメモリを取り出し、Xマグナムに入れる。

『GUNNER!! MAXIMUM DRIVE!!』

「ストライク」

俺はドーパントにマキシマムドライブを撃ち込み、爆散させる。そしてJのメモリを拾い、変身を解く。そして、突如変な光景が見えた。それは俺が変な剣に機械のサソリをつけているところだった

「変身!!」

『HEN SIN』

さらに、サソリの尾を剣に差し込んだ

『cast off change scorpion』

「はああ!!!」

そこで映像は途切れた

「なんなんだよ・・・今のは」

side out

第九十話 アップグレード（後書き）

聖夜「何だよ作者、重大発表って」

霊宮「実は………映画化」

聖夜「はああ???」

霊宮「映画版の話を投稿するんだよ」

聖夜「いつもより長め？」

霊宮「仮面ライダーカブト劇場版を元にして、さらに超番外のキャラを使い、なおかつ本編聖夜も介入させる。大筋は出来上がっているけど………」

聖夜「けど？」

霊宮「20話行きそう」

聖夜「別によくね？つーか6話で納めるんだったら10000文字行かせろ」

霊宮「101話からやりたいので、よろしくお願いします」

第九十一話 予感と別の場所（前書き）

映画版ではなく長編になりそうです。

第九十一話 予感と別の場所

side 聖夜

「へえ・・・お前が仮面ライダーサソードねえ？」

「うん、何故か俺」

海斗が見たという、自分がサソードになっていたという光景だ。なんだろうね、パラレルの可能性かな？もしかしたら俺がアレな事になっている世界もあるから

「ま、気にしなさんな、平行世界の干渉は俺が一切妨害してるからさ」

「ならいいけど」

そういつて海斗はWRS宅に帰って行つた。それにしても・・・なんでだろうな？そして、俺の目の前には銀色のオーロラが現れた

「門矢士か！？」

俺はとつさに身構えると、その銀色のオーロラに光景が映し出された。そこには、俺がいた

「んな・・・！？馬鹿な！？！？」

別の俺は、満身創痍でありながらも、黒色のカブトの前に対峙して自分もカブトに変身した。そして、そこでオーロラは消え去った

「なんなんだ・・・調べよう」

そうして俺は次元の穴を開け、その中に潜って行つた

side out

side 第三者

この二人もまた、聖夜、海斗同様の現象に出会っていた。

「俺？」

「俺・・・だな」

上から瞬、乱太がそれぞれ気が抜けた声を出す。そこに映っていたのはガタツクに変身する瞬とザビーに変身する乱太が映っていた。

しかし、映る二人が走り出したところで映像は途切れる。

「まさか・・・な」

「ああ・・・」

side out

第九十二話 あんたらねえ…（前書き）

count the moleads 現在聖夜陣が持っているガ
イアメモリは？

A アクセル

B バード

C サイクロン

E エターナル

G ジーン

J ジョーカー

K キー

L ルナ

N ナスカ

P パペッター

Q クイーン

R ロケット

V バイオレンス

X エクストリーム

Z ゾーン

第九十二話 あんたらねえ…

side 蛇川

「おい、聖夜」

「……………」

「聖夜」

「……………」

「バカや」

「……………死ぬ」

「どういことだそれは!？」

俺は聖夜に声をかけていたのに、バカや言っただけなのにさあ……
・それにしても、赤色のGのメモリ？

「G、ジェノサイド、genocide。殺戮の記憶だよ」

「おい、ずいぶんとやばい記憶だな」

うん、それだけは絶対になくすなよ!？いろいろ大変なことになる
から!!!

「聖夜何してるちよい待てやあらあ!!! 何別の世界に送ろうとして
いるんだ!？」

「面白そうだから。ロストドライバー附属で」

「やああめええろおお!!!」

そうしている間に聖夜はロストドライバーと一緒に別の世界へ送っ
てしまった。ああ……大丈夫かなあ？そうして俺はまたガイアメ
モリ回収に行くのであった

〈某所〉

「はいはいはい……俺は今気がたっているのでオーバーキ
ルで」

『カメンライド、デイドイドイドイド』

俺はデイクイドに変身し、ケータッチを取り出す

『クウガ、アギト、リュウキ、ファイズ、ブレイド、ヒビキ、カブ

ト、デンオウ、キバ、ファイナルカメンライド、デイドイドイド
ケイド!!!」

俺はデイケイドコンプリートフォームに変身し、電王のマークを押す

『デンオウ、カメンライド、ライナー』

「普通クライマックスだと思うけどな・・・」

まあいいか

『ファイナルカメンライド、デ、デ、デ、デンオウ』

「電車斬り!!!!」

そういつてフアングドーパーントはやられた。はい、俺イライラして
いたので俺のせいです。最後に一言言わせてくれ

「聖夜のバカやるオオオオ!!!!!!」

side out

第九十二話 あんたらねえ…（後書き）

Fのメモリ介入

Gのメモリで別連載・・・できるかなあ？

第九十三話 クイズ大会？

聖夜「というわけでクイズ大会始めます。ドンドンパプパー」

海斗「古いぞノリが！！」

WRS「その通りだ」

BRS「コント50号より古いでしょ」

聖夜・海斗「それ知ってるお前もな」

WRS「さつさと始める。作者のPSPも隠されたんだぞ」

BRS「作者は気にしない」

聖夜「というわけで問題1！！東方の東風谷早苗の遠縁の祖先は八坂加奈子でしょうか？諏訪子でしょうか！？」

ピポーン

聖夜「おおっと、海斗さんが早かった！答えは！？」

海斗「諏訪子」

聖夜「正解、海斗さんにラウズカード一枚！」

海斗「何故？」

聖夜「第二問！」

海斗「スルーか」

聖夜「ちなみに効果音は海斗がピポーン、WRSがポペーン、BRSがパプーンです」

WRS・BRS「私たちの変だ！」

聖夜「問題！魔法少女リリカルなのはの主人公、高町なのははVID時点で結婚していますか！？」

パプーン

聖夜「BRSが速かった！！」

BRS「結婚していない！！」

聖夜「正解、BRSにガンバライドカード一枚！！」

海斗「だからなぜ！！」

BRS「いらねえや」↑ディエンドのカードをポイ捨てる

聖夜「オウノオオオX!!!」

海斗「速く聖」

聖夜「第三問、作者の期末点数は？合計点です」

海斗「知らんわ!!!そのころ俺いない!」

BRS「知らないよ」

ポペーン

聖夜「WRS」

WRS「370点?」

聖夜「一応正解。ブレイドの全ラウズカードを進呈。そして勝利」

BRS・海斗「なんじゃこりゃああ!!!」

BRS「はっ!!!グダグダすぎる話&夢だった」

第九十三話 クイズ大会？（後書き）

時間がなくて完成度低くなりましたたごめんなさい

第九十四話　さらば、聖夜

その日は、朝からカオスだった。

「あういいいいい！！！」

瞬がZセイバーを振り回し、

「カメンライドオオオッオ！！！」

『アタックライド、ブラスト、イリユージョン』

乱太はディケイドで分裂してブラストをぶっ放している。

「G2ウェーブ！！！」

海斗は異星人の技を放ち、周囲をがれきの山としている。

「バーストショット！！！」

BR Sは乱太のブラストと押しあいをしていたり

「旅団式エアコンカー改！！」

「マッドストライク！！！」

マズマVSリリオの戦闘の構図。つまり本編では有り得なかった闘いが展開されている。もはやカオス、混沌としか言いようがない。

「どちらが勝つかしらねえ？」

「知らないわよ」

ミーとシズは縁側でのんびりとお茶を飲んでいたり

「いっけー！！！」

ナフェはピンクラビットのコンパクトレーザーですべてを焼き払っていた。さらにサハ？ザハ？濁点がつくつかつかないか分からない名前前の人は病院で寝込んでいたり。さらにSBの人々は

「フォーゼのエレキスイッチについての件ですが」

「新たなフォーム追加ね」

上から相山、参太が霊宮（俺）に尋ねる

「ええ、俺は格好いいと思います」

霊宮（俺）が答える。残りの都山、駆動、神咲はというと・・・
「変身！！！」

「ネタばれ禁止よおオオ!!!」

「右に同じ」

神咲＆駆動が制止をするが構わず都山は変身！！と行きたいところですが

「『タバックス』ウウウウウウウウ
ウウウウウウ!!!」

聖夜がセイヤー繋がりでオーズ、タトバコンボに変身。さらに5人に分裂してタトバキックをかます。それは

聖夜除く全員「タジャスピナアアアアアアア！……！！！！！！」
そしてチュドドドドドーン

「何だ夢か……現実だったら大変だった」

そうして俺が窓を開けると、そこには

「嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼」

呼鳴呼鳴呼アア！！！！！！！！！！
「 「 「 「 「 「 「

L
L
L
L
L
L
L
L
L
L
L
L

総勢20名の神が蛇川にフルボッコされていた

「おまあああああああ」

おまああああ・・・おまああ・・・おまあ

「・・・という夢を見たんだ」

「みるなよ」

という炎忌と玲人がいたとかいなかったとか

第九十五話 殺戮者と雷神 前篇（時間の都合）（前書き）

count the memoleads 現在聖夜陣が持っているガ
イアメモリは？

A アクセル

B バード

C サイクロン

E エターナル

F ファング

G ジーン

J ジョーカー

K キー

L ルナ

N ナスカ

P パペティア

Q クイーン

R ロケット

V バイオレンス

X エクストリーム

Z ゾーン

第九十五話 殺戮者と雷神 前篇（時間の都合）

side 炎忌

「何だここは？」

俺はさっきまでジェノサイダーで走っていたところがいつの間にか廃墟になっていたので驚いた。玲人でも出来ないぞ。空間転移には無理があるらしい。人間の質量は無理はないらしいが、人家などは質量が大きすぎてできないらしい。プレシア・テストロッサとか言うやつのは行方は無理に近かったらしい。

「それにしても・・・ドーパント風情が俺の目の前に立つんじゃねえよ」

『GENOCIDE!!』

「変身」

俺は仮面ライダージェノサイドに変身し、ベルトの左側をたたく

『GENOCIDEMAGNUM!!』

「オラオラ!!」

俺はドーパントに零距离射撃をしながら、蹴りを入れる。さらにパンチを入れてマグナムにメモリを入れる

『GENOCIDE!! MAXIMUMDRIVE!!』

「吹き飛ばす」

そして零距离でマキシマムを放つが、ドーパントはその前に逃げてしまったらしい。俺は変身を解くとジェノサイダーにまたがり、また走る。

side out

side 聖夜

「おお・・・めぐりあうとは・・・」

俺はジェノサイドのメモリの持ち主がバイクにまたがり走りぬけていくのを見た。こいつはすげえや・・・あのメモリを手に入れるの

にー役買ってくれそうだ。あのじゃじゃ馬メモリをな
side out

第九十五話 殺戮者と雷神 前篇（時間の都合）（後書き）

今の本編の2、3話この炎忌です。知りたかったら読んでね！！空の刀が目指すは雷の神 外伝 正義の殺戮者を見てね！そして短くて済みません時間ありませんorz

第九十六話 殺戮者と雷神 中編（前書き）

count the memoleads 現在聖夜陣が持っているガ
イアメモリは？

A アクセル

B バード

C サイクロン

E エターナル

F ファング

G ジーン

J ジョーカー

K キー

L ルナ

N ナスカ

P パペティア

Q クイーン

R ロケット

V バイオレンス

X エクストリーム

Z ゾーン

第九十六話 殺戮者と雷神 中編

side 炎忌

「それにしてもここは・・・？まあいいとして・・・」

俺はたらたらバイクで走りながらこの道を抜けていくことにしたが、先がなかなか見えない。そして、その場でバイクごとジャンプする瞬間、その場が爆ぜた。

「！？直感って当たるもんだねえ」

アクシデントもあつたが、まあ街に抜けられる・・・と思いきやいきなり建物ぶち抜いて通りました。

「逃げる　！！」

「おいまてええ！！」

変態（確定）に言う。そして俺はアクセル全開で逃げるが、動かない。あやややや！！！！！！

「あぎやあああああ！！！！！！バイク壊れるうううう！！！！！！玲人に殺されるうううう！！！！」

『GENOCIDE』

「ぎやあああ！！！！」

ぎやあああの掛け声でジェノサイドに変身してシャフト振り回してバイクにまたがり逃げる！！！！玲人に殺される！！！！

「ぎやあああ！！！！」

変身を解いてぎやあぎやあわめきながらバイクで逃げる！！！！動いてよかつた！！！！

「お許しをおオオオオオ！！！！！！」

side out

side 聖夜

「何この力オス？」

「さあ・・・？ていうかあの人なんですか！！！！」

久々のウェンディ、久々のFT。それにしても・・・

「ぎゃあぎゃあうるさい！！！！！」

「えRHべいひー！！！！！！！」

その玲人つつう奴は誰だ？それにジェノサイドメモリを持っているし。まあいいか・・・

「玲人つつうのは単独でアルハザードへ行ったり次元の壁をぶち抜いた！！りする奴」

「神か！？」

どうやら玲人と言うのは相当の科学力を持つ者らしいな・・・

「んで、お前の名前は？」

「慈円炎忌、よろしく」

「！！！！？？？」

慈円炎忌だと・・・ジエンエンキと語呂が似ている、あいつの魂は受け継がれるのか・・・まあいい

「そんなに驚くな」

「ああ、すまん」

まあエンキとは別だよな、炎忌は・・・

side out

第九十六話 殺戮者と雷神 中編（後書き）

ジエンエンキとは、大和の時代の人間である。ただそれだけ

第九十七話 殺戮者と雷神 後編（前書き）

書き直し・・・めんどろ

count theme leads 現在聖夜陣が持っているガ

イアメモリは？

Z X V R Q P N L K J G F E C B A

後編

Side
炎忌

「というわけで……お前の世界に俺が狙うドーパントがいるんだけど……一緒に殺ってくれない？」

「いいが……それ相応の対価は？」

「エクストリームメモリ」

「いいだろう」

俺は強化のためにあるメモリ、エクストリームメモリを報酬に貰うことでその契約を了承した。その契約とは、管理局に聖夜、乱太、瞬、海斗、神咲、駆動、参太、都山、相山、FTのメンバーの存在を秘匿することだ。なぜなら、管理局にばれてしまえば、聖夜達は生体ロストロギア、他のFTメンバーや魔導士は管理局の管理のもとで行動しなくてはならず、魔法もリミッターをかけられ、強い魔法、おもにマスターなどには洗脳を行使する可能性があるためだ。聖夜達がこの世界の存在を秘匿しておいたのも管理局がらみが多い。

「契約成立だ……慈円炎忌」

「ああ……空刀聖夜」

闇の中で俺たちは握手をし、俺の世界へと飛んだ

ゝ炎忌の世界ゝ

「俺たちはいらねえかも」

「ああ……」

俺の目の前にはリュウガがアドベント〜ファイナルアドベントすべてのカードを使いぼこしていた

「よくも女性を才才才才！！！！！！」

「!!おvdoほ0hf9-grbagg3uh!!」

「あいつ誰だ？」

「神山零時、フェミニスト」

零時リユウガは最後に

「いいか・・・俺の心情は、イエス・レディース・ノータッチな
んだよおお！！！！」

「wぐh9sdでdふいhdfぶくいおpk sjfbkあじ」・・・
djv hklf！！！！」

オーシャンメモリを聖夜がキャッチ。そして一言

「作者出てこい殺すぞ」

「だって書き直しん」五月蠅い！！！！」うsqefyuiwui o
phgi oaweruohqjdpnkfbjasjolibk！！！！
！！！！」

「読者の皆様すみません」

side out

第九十七話 殺戮者と雷神 後編（後書き）

読者の皆さま本当にすみません！！

第九十八話 部数では100話こえているのに本編話数じゃ後二話・・・(前書

今回はガイアメモリからまないのですね。これからは映画予告
みたいになります

第九十八話 部数では100話こえているのに本編話数じゃ後二話・・・

クロックアップ・・・とある世界で人類がワームに対抗するために生み出した兵器ともいえる技術

自分の時間を早め、常人よりも速く動く。しかし、上には上がいる。自由に時を越えるハイパークロックアップ、それを使いこなすライダー・・・仮面ライダーカブト、彼もまた・・・守るものがあつたのであろう

くクロックアップ理論

著 東風谷早苗く

side 第三者

読者の皆さま・・・何故ここでこんな番外編のようなものを挟んだのかは、お見通しの方も居るであろう。とある世界に仮面ライダーカブトがいた。その仮面ライダー・・・空刀聖夜はすべてを救おうとは思わず、目に見えるものだけ救うという何とも合理にかなったやり方だった。ただ一人、幼馴染の東風谷早苗を除いて。しかし・・・ある日の巨大隕石、strikemeteorと名付けられるこの事件により、全てが変わった

東風谷早苗は、博士号を3カ月で取得し、ZECTへ聖夜と同時期に入るが、離反しNEOZECTを立ち上げた

空刀聖夜は、さらに鍛錬をし、ZECTへ入った。早苗の離反の際に「こんな組織に居ても・・・世界は何も変わらない。だから私は行動を起こす。貴方がいれば・・・」

「無理な相談だな、東風谷。お前と俺は両方、変わったんだよ。俺は俺の道に行く。お前はお前の道を行けばいい。ただし・・・その道を俺が今ここで、壊すがな」

彼は親友を殺そうとしたが・・・とあるライダーの介入により失敗。彼は再び早苗と真見えるその日まで・・・ワームを狩り続けるであらう

第九十八話 部数では100話こえているのに本編話数じゃ後二話・・・（後書

説明みたいなもので短いです

第九十九話 ついに目前、イエーイー!!!

前回に引き続き……説明していこう。なに、ゆっくりしてくれ。すぐに終わる。別の空刀聖夜の物語は劇場版仮面ライダーカブトに似ているが、まさにその通りなのだ。彼は天道総司のように自分を絶対とはしない。彼も、「俺は空の刀となり、聖なる剣で夜を切り裂く男だ」という名乗りをしていたとかしていなかったとか空の刀とは意味不明であるが

話がそれってしまったな。すまないが、たわごとを聞いて言ってくれ。彼は予期せぬ時に力を手に入れた。その力で人を守ろうとした彼。出来うる限り救おうとした彼、空刀聖夜である。

しかし、東風谷早苗、東方projectの早苗とは違い普通に生きてきた彼女。風祝としてではない、普通の東風谷早苗として生きてきた。彼女もまた、運命にあらがうことなく巻き込まれた。

隕石、strike meteor、ストライクメテオが地球に飛来し、地球の水分の3分の2が蒸発してしまった世界にとって水と私たちの世界より価値が増している、コップ一杯10000円などはざらだ。水も無限ではなく、やがては尽きてしまうものなのだ。東風谷早苗は平行世界から水を奪い取ることと技術を作り出した。空刀聖夜は宇宙から飛来する彗星の水を浄化すればいいといった。戦いの神も空刀聖夜に票を投じた、またある部隊の隊長は東風谷早苗の案に猛反対し、空刀聖夜の案に賛成した。ある紫の剣士も空刀聖夜の案に賛成した。

二つの勢力——聖夜派と早苗派は対立し、早苗派やそれに賛成した者たちだけでのZECT、NEOZECTを立ち上げた。マスク

ドライダーも二分された

ZECTに残る空刀聖夜：仮面ライダーカブト、織斑瞬：仮面ライダーガタック、蛇川乱太：仮面ライダーザビー、海原海斗：仮面ライダーサソード

NEOZECTになった神山零時：仮面ライダードレイク、相山遼：仮面ライダーキックホッパー、参太空：仮面ライダーパンチホッパー、神山玲人：仮面ライダーケタロス、都山修太：仮面ライダーヘラクス、そして黄金の戦士、仮面ライダーコーカサス

NEOZECT側のライダー達が多いのかは・・・ドレイク、ダブルホッパー、ケタロス、ヘラクス、コーカサスが東風谷早苗の作ったものだからだ

対するZECT側のライダー達のゼクターの製作者は別人の、神咲紅葉である。この科学者がいたからこそマスクドライバーシステムは出来たのだ。しかしその上の領域に紅葉はたどり着こうとしなかった。否、出来なかったのだ。それは時を超え時間を変えるほどの魔の力を秘めたもの。紅葉には到底やるうとはしなかった

しかし、東風谷早苗は作り上げたのだ。そう、××××××××××を物語は、今動き出す

第百話 長かったな（前書き）

読者の皆さま！！今まで本当にありがとうございました！！最終回まで突っ走りますのでよろしくお願いします！！

第百話 長かったな

聖夜「というわけで・・・今日は諸君に重大な発表があるのだ」

聖夜の言葉から始まる重苦しい雰囲気、しかしそれを破るのは

霊宮「今回で百話なのだああ！！！！」

全（聖夜、霊宮抜く）「ウソダンドドコドーン！！！！」

霊宮「オンドウルな！！！！」

相山「すごいな・・・」↑次回からの長編の出番がある人

参太「1年たったんじゃないね？」↑次回からの長編の出番がある人

神咲「いや、たつてないからね！？」↑次回からの長編の出番あり

都山「うん、出番が欲しい」↑次回から出番あり

神山零時・玲人「俺たちも出るぞ！！」↑別連載から参戦

駆動「いいよなあ・・・出番パラレルでもある人は」↑出番あまり

なし

全（聖夜、瞬、乱太、海斗抜く）「主人公クラスは！」

瞬「初めてのセリフこれ！？」

蛇川「作者が連続投稿するらしいぞ！」

海斗「蛇川関係ないだろその話題」

霊宮「あのなあ・・・次回の長編俺も出るぞ？」↑物語のキーマン

海斗「うわあああ！！！！それ以上はネタばれ！！！！」

？？「おい、そろそろかけよ！」

？？「その通りだ。読者を待たせてはいけないでしょう？」

？？「隊長として命令する・・・執筆しろ」

？？「俺は命令においても頂点に立つ男・・・楽しみにしているぞ」

聖夜「では、全員声を合わせて・・・」

全「では、FAIRYTAIL 空の刀が目指すは雷の神 劇場版
長編『仮面ライダーカブト Another episode 時
を超える兆速 hyper speed』を数十話にわたりお楽しみ

ください! !」

第百一話 劇場版長編 hyperspeed prologue (前書き)

はい、始めました！！

第百一話 劇場版長編 h y p e r s p e e d p r o l o g u e

これは・・・カブトの世界で起きた異変。しかし、主人公は空刀聖夜、仮面ライダーカブトであつた・・・

〔2019年〕 s i d e 聖夜

「なんだよ・・・これ・・・」

なんだいよこれ・・・ついさっきまで普通に生きていた街の人間、それが3分後にはこうなつていた。幸い俺と東風谷は無傷だったが・・・見事なまでに自分たち以外の人間という種族は死んでいた
「聖夜・・・まさか・・・」

東風谷が俺の肩をた叩きながら言うと、俺は東風谷が指差すほうを見る。

「海が・・・消えた!？」

そう、海が全くない。これしか言葉はない。海が跡形もなく消えていた。そこに水棲生物の死骸などを残して。その代わりにおびたらしいほどのワームのサナギがいた

「東風谷!!!お前はどっかに隠れてろ」

俺はカブトゼクターを呼び出し握ると、腰にベルトが構築される。そこにカブトゼクターをつけ、

「変身!!!」

『H E N S I N 』

そしてカブト マスクドフォームになりワームのところへ突っ込むために走った。そしてワーム達の大群に飛び込むとカブトクナイガ

ン アックスフォームで次々と切り裂く。さらにアックスの斧の部分に持ち帰るとカブトクナイガン ガンモードにして撃ち抜く

「くたばれ!!!」

さらにワームの何匹かが脱皮し、クロックアップした。俺はゼクタ
ーホーンを180°回転させる

『cast off change beetle』

そしてカブトライダーフォームになった

『clock up』

そしてクロックアップ空間に入りワーム達に蹴りや殴りの連打を浴
びせかける。がワームの人数が多いことが災いした。

「ぐあああ!!!!!!」

ワームに蜂の巣にされ、クロックアップが解ける……………まず・
・い・・かも・・な

『HENSIN change stag beetle』

「大丈夫か!」

そこに居たのは青色の戦士だった。俺がワームとかかわる少し前に
見た戦士に似ていたようだった

「ああ……それよりもこいつら……………」

「今はお前のほうが先だ!!」

俺はそいつに担がれると、次の瞬間にはさっきの街と呼ばれたモノ
のところに居た。変身は解かれていて、青色のほつも変身を解いて
いたようだ

「俺は織斑瞬、ガタツクの資格者です。貴方は?」

「俺は空刀聖夜、お前みたいに言くとカブトの資格者だ」

そうして俺たちはそれ以来二人で行動するようになった。時間を少
し進めよう

〔2019年 12月30日〕

年末だが、ZECTに入った俺・空刀聖夜に休みなどあつてないよ
うなものだ……なぜなら、海の3分の2が蒸発してしまった隕石

『strikmeteor』のせいで水が急激に不足してしまった。常に水を求めている暴動・・・それを鎮圧するのも俺達『SHADOW』の任務だ。俺達（俺、瞬、東風谷）の3人はそれぞれ戦闘系と技術系に回された。俺と瞬はSHADOWに配属された。SHADOWとは言ってみればなんでも部隊みたいなもので、総合的な隊長でありマスキライダーシステム ザビーの資格者である蛇川乱太、A部隊隊長にサソードの資格者である海原海斗。そしてB部隊隊長の俺にC部隊隊長の瞬で上が出来ていて、その下にゼクトルーパー達がいるというわけだ。SHADOWは精鋭がそろっていると上の評判もある

「聖夜あ！！大変だぜ！！」

「どうしたんだ蛇川！！??」

俺は走ってきた蛇川に言うと、蛇川は肩で息をしながら言った

「やばいぜ・・・東風谷がSHADOW以外の戦闘部隊の過半数を引き連れて裏切りやがった！！上まで一緒にだ」

「何...だとお...!!」

「聖夜待て！！」

俺は急いで走りだした。向かう場所？決まってるだろう。あの東風谷^かのところだよ！！

（三時間後）

「瞬、海斗！！」

「聖夜！！どうしたもこうしたもねえぞ！！東風谷が裏切りやがった！！」

「ああ・・・こちらにはライダーシステムを使うものが4人しかない・・・神咲博士を一応残ってはいるが・・・」

瞬と海斗が重々しい感じで言った。さっき東風谷にあったが変わっていたぜ・・・

「で、状況はどうなっている。海斗」

「はい、こちら側のライダーは4人ですが、あちら側のライダーはドレイク、ヘラクス、ケタロス、キックホッパー、パンチホッパー、

「コーカサスです」

そう、ここから俺達の世界は泥沼になっていたんだと思う・・・

side out

次回へ続く

第百一話 劇場版長編 hyperspeed prologue (後書き)

聖夜回想での戦闘時BGM ETERNALBLAZEでお願いします

第二百二話 hyperspeed

side 聖夜

「それにしてもなあ・・・」

そう、俺はZECTの訓練を見ているが、連日連戦のせいで疲れているのがありありと分かる。俺たちマスクドライダーはまだしも、隊員たちは普通の装甲で戦っているのだ。しかし・・・

「東風谷の野郎は・・・」

本当だぜ・・・バカげたこと考えてよ、やってのけようとするし。俺達でも無理そうなことを突拍子もなく考えては一人でやろうとする・・・それにしてもハイパーゼクターはまだ完成しないのか・・・東風谷に先を越されたらやばいな。歴史を変えようとする。

「聖夜さん、ワームです」

「おう、こいつらには言わないでおいてくれ」

「なんだかんだで聖夜さんが一番無茶してるじゃないですか」

俺は苦笑交じりに外へ走る。そしてカブトエクステンダーにまたがつて走り出す。そしてゼクターを呼び出すと構築されたライダーベルトに滑らせて変身する

「変身」

『HENSIN』

そして目的の場所まで走ると、サナギワーム5体、脱皮したワームが五体いた。その俺は速攻で勝負を終わらせるためにカブトゼクターのゼクターホーンを180°反対にする

『castoff change beetle』

同時にカブトエクステンダーもキャストオフして収納されていた甲虫の角のような突起をだし、ワームを蹴散らす。俺は飛び降りてベルト左側のボタンを押す

『clockup』

世界が一瞬にしてとまったように見えると、俺はカブトクナイガン・

クナイフォームでスローになっているサナギワーム5体へ向かう

「オラ、釣りはいらないぜ!!」

そして一人にアバランチスラッシュを放つと、カブトゼクターの脚のボタンを一気に押す

『one two three』

さらにゼクターホーンを元の状態に戻し、一気に飛び上がる。後ろから成体ワームが近づいてくるが、その前に決める!!

「ライダーキック」

『riderkick』

そして4体を一気にたたき殺すと、その途端に

『clockover』

クロックアップが停止する。まずいかもなあ……さすがに2回連続だと短期間で決めなきゃいけないし……

「聖夜!! さつさとやれよ……たく」

「乱太!? なら手伝え!!」

「はいはい」

乱太が空中に手を伸ばすと、そこにはザビーゼクターが止まり、右腕にライダーブレスが構築される。本来は右腕らしいが、乱太が右利きだかららしい。

「変身」

そしてゼクターをライダーフォーム状態のときのように、羽を広げて反対にする

『HENSIN changewasp』

いきなりライダーフォームになるとベルトの後ろに手を伸ばす。なるほどですね

『clockup』

そして同時にクロックアップすると、乱太はゼクターの上のフルスロットルを押す。俺もさっきのようにゼクターの足のボタンを一気に押し、ゼクターホーンを元に戻す

『one two three』

「ライダーキック」

「ライダーステイング」

そして俺はゼクターのホーンをライダーフォーム時に戻す

『rider kick』

『rider sting』

そして同時に必殺技を、それぞれ2体のワームに放ち、倒す。

『clock over』

変身を解くと、乱太に向き直る。その顔は少し疲れているような立った。ここはからかってあげますか。それが優しさ？だ

「蛇川隊長は神咲博士とまたお楽しみですか・・・こんなご時世なのにあつゝいいですねえ？？」

「違う！！あいつが勝手にベットにもぐりこんでてアー！！！！になっただけだ！！」

「マウントポジションから逃げればいいでしょーが！！しねリア充！！！！」

「うるへー！！！！」

俺たちの言い争いは、ここが戦場であつたかを忘れさせるほど、日常だった

side out

第二百二話 h y p e r s p e e d (後書き)

雑で済みません。

第百二話 h y p e r s p e e d n e o - Z E C T (前書き)

ネオゼクト s i d e を書こうと思います

第二百三話 hyperspeed neo-ZECT

side 神山零時

「おい、こんなんで計画を成功することが出来ると思うな!!」

『はい!!』

俺はneo-ZECTの仮面ライダードレイクこと神山零時だ。俺は前々から早苗様の役に立ちたいと思っていた。そしてあの計画を実現するために動こうとしたときに真っ先に動いたのは俺だ。あんな兄貴じゃなくてな・・・さてと、俺もワームを狩りますか。俺はドレイクグリップの引き金を引き、ドレイクゼクターを呼び出す

「変身」

『HENSIN』

この仮面ライダーはドレイク、マスクドフォームでは全ライダー中最強の防御力を持つ。遠距離主体だが、近接戦闘のときもある。戦場の状況は常に変わる

「はあ!!」

そしてサナギワームに銃撃を浴びせる。ワームの何体化は爆発して死ぬが、殺せなく、脱皮したものが3体ほどいたため、ドレイクゼクターの尾の部分を引っ張り、引き金を引く

『castoff change dragonfly』

先手必勝。俺はベルトのスライドできる部分を一回スライドさせる

「クロックアップ」

『clockup』

そしてクロックアップをして、ゼクターの羽をたたんでライダーシューティングモードにし、尾の部分をひっぱる

『ridershooting』

「ライダー・・・シューティング」

そしてクロックアップをまだしていない成体ワーム3体めがけてライダーシューティングを放つ。そして爆散させると、同時にクロッ

クアップが解ける。

「何だよ・・・こなけりゃよかった」

「んだよ兄貴。てめえなんて早苗様のところに情けをかけてもらっているんだろうが。目上の者に対して敬え！！この俺様をな」

「勘弁させて貰うぜ・・・」

そうして兄貴こと、神山玲人はヘラクスゼクターを伴い歩き去って行った。なんだよカス兄貴・・・できそこないのくせによ

side out

side 玲人

「さて・・・情けをかけてもらっているのはどちらかな？」

俺は静かに東風谷様のところへ行く。エレベーターの30階を押し、無機質な自動ドアの前に立つ。そして掌をドアの右隣にあるパネルに押しつける

『scanning・・・complete』

変な音声だが仕方ない。

「入ります」

俺が入ると、東風谷様は白衣を着て窓から外を見ていた。砂漠で荒れはてていたが。昔のことを思っているのだろう。

「神山零時の事です・・・」

「ええ、始末していいわよ。あんな奴使えないだけだから」

そこで言葉を一回区切ると、手に黒色の甲虫・ダークカブトゼクターと言っらしいが、それを握りしめながら言った

「ZECTとの戦争のどさくさにまぎれて始末しなさい。Kなら協力してくれるでしょ」

「はい。ではその通りに」

俺が部屋を出ていこうとすると

「ねえ・・・玲人」

「なんでしょうか」

「貴方はどう思う？時間」

時間・・・か。俺もどれだけ時間が巻き戻れば、どれだけ時間が消えてほしいと願ったことであろう。だが、変えられない。しかし・・・あのゼクターさえあれば！！ハイパーゼクターさえあれば変えられる

「時間ですか・・・あのゼクターで変えたいですね。あの時間を」

「ふふ・・・残念だけどあのゼクターはえり好みするわよ？貴方にそういう魅力があるかしら？Kの魅力はさしずめ・・・その優しさかしらね」

「そうですね・・・では失礼させていただきます」

そう言つて俺は部屋を出て、Kのもとへ行く。Kはいつも自分の水を誰かに与えてしまう。必要最低限の量はとっているらしいが。

「K、東風谷様からの任務だ。神山零時をZECTの抗争のどさくさで始末城との命令が出た」

「そうですね・・・悲しいですね」

「そうか？しかし命令は絶対だ」

「残酷ですね」

Kは優しすぎる。あまりにもだ。俺はそこが心配なんだけどなあ・・・それにしても東風谷様が戦場に出ないように俺たちでしなければ・・・その為には・・・

「ハイパーゼクターはえり好みますよ？」

「東風谷様と同じこと言うな」

そう言つて俺は部屋を出て行った・・・Kなんかだますのは簡単だな。俺はZECTとも内通しているのによ。

side out

side 聖夜

「ネオゼクトが？」

「ああ、近々襲撃するかもしれない」

俺と瞬はZECT本部の研究室に居た。何故か神咲に呼び出されたのだ。神咲紅葉とは俺たちのゼクターの開発者である。ちなみに乱太の同期らしい。高校でも、ZECTでも

「ああ、聖夜君に瞬君ね、入って入って」

「入ります」

「入るぜ」

俺は一応敬語を使うが、瞬はバリバリタメ口だ。なんでかな……

「んで、何の用だよ紅葉」

「ええ、ハイパーゼクターが完成したのよ。ただし、一つだけどねハイパーゼクターが！？あれはneo-ZECTしか作成方法を知らないはずなのに……ハッキングも何回と数えきれないほどかけたが、ファイアウォールは破れなかった。破れたとしてもさらに強いセキュリティで行けずじまいだったのだ

「ネオゼクトの内通者よ。いたでしょ。神山玲人とかいうヘラクスの資格者。あの子が裏切って情報を流しているのよ」

「ああ……そんな奴いましたね」

「自分の弟裏切ってまで……いや、にくいのか。自分より大きい地位についた弟が」

あいつはどうやら早苗からの命令で弟を始末せよとの命令が出たらしく、そのどさくさに紛れて殺害し、ドレイクグリップを手に入れようとするらしい。俺達も一応行くが、行くのは俺と乱太隊長だけだ。

「あとハイパーゼクターだけど、マスターにするならカブトの奴だつて。ご指名ね、聖夜君」

「逃げろお才!!!!!!」

「逃がすかあああ！！！！！」

〓
 -
 -
 -
 -
 -
 !
 !
 !
 !
 !
 !
 〓

そうして俺とカブトゼクターと神咲のデス鬼ごっこが始まるかと思われた……が

「何してるんだお前ら!？」

「乱太!？」

「らーんたー！！！！！」

俺たちはそこから即、逃亡した。乱太？知らないよオオオオ！！！！！！

「ぎゃあ あああああ！……やめろ おおお！……！」

「いやだ、今日は一日このまま」

side out
という声が聞こえたそうなの聞こえていなかったたそうなの

第百五話 neo-ZECTVSZECT 本日

side 聖夜

「おい……こんなところに来るのか？」

「ああ……紅葉の情報は正しい……筈だ」

乱太も自身がないようだ。昨日……遂に押し倒されたらしい。
神咲にだ。乱太と神咲お幸せに！！

「おい殺すぞ貴様」

「すみえゝん」

「何の略語……来たようだな」

乱太がザビーゼクターを手に取ると、目の前には情報では俺たちから見て右が神山玲人、神山零時、都山修太なる奴らだった

「は！！3人とはなめられたものだ！！俺たちの強さ「うるせえなあ……」何だと！！貴様らこそ早苗様の崇高な目的を「黙つてろ！！」もういい！！！！変身！！！！」

そして神山零時はドレイクグリップの引き金を引き、ドレイクゼクターを呼び出す。

『HENSIN』

そして玲人もヘラクスゼクターを呼び出した。さらに都山もケタロスゼクターを呼び出しライダープレスにつける

『HENSIN change beetle』

「変身」

俺たちもそれぞれゼクターを呼び出して、ライダーベルト・ライダープレスにつける

『HENSIN』

「こざかしいいい！！！！」

『rider beat』

その時、玲人が変身するヘラクスがライダービートを発動し、ゼクトクナイガンのアバランチブレイクがライダービートにより強化。

それを一気にドレイク・マスクドフォームに切りつけた

「があああ！！！！何しやがる兄貴！！！」

「何するんですか玲人さん！？」

そして玲人がこちらに、「都山を殺せ」との合図が出てきた。俺たちはそれを受け取り、ケタロスのほうへ走り込む

「「キャストオフ！」」

『cast off change beetle』

『change wasp』

そして乱太がケタロスに蹴りかかって態勢をぐらつかせる。そこにカブトクナイガン・アックスモードで斬りつけひるませる。

「つく・・・一時離脱しないと・・・」

「そうはさせないぜ」

そして乱太がゼクターニードルの上のスイッチを押し、ライダースティングの態勢になる

『rider stinging』

「死ね」

そして乱太がライダースティングを発動し、ケタロスは逃げようとするが、時すでに遅し。乱太隊長のライダースティングがケタロスゼクターに直撃した。

「ば・・・ばかなあああつあああああああああああああ
！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

都山は絶叫しながら変身を解除した。否、強制解除されたのだ。そして血まみれで砂漠に崩れ落ちた。そしてザビーの脚にすがりついていた

「なあ・・・助けてくれよ・・・いい情報を渡す・・・」

「無理だな」

言いきつた乱太隊長はまたゼクターニードルの上部ボタンを押す

『rider stinging』

「痛みは一瞬だ」

side out

「そんなはず・・・」

「残念」

そして玲人は変身が解けていた零時にゼクトクナイガン。クナイモ
ードをさし、殺した。よくもまあ、自分の弟をそこまで出来るとは・
・・・称賛にあたいするぜ

「さてと・・・ZECTのSHADOW隊長、蛇川乱太」

「ああ・・・行こうぜ」

俺たちはneo-ZECT打倒の道を歩み始めたと思いたい。

side out

第百六話 神山玲人の話（前書き）

風邪で少し更新が遅れました

第百六話 神山玲人の話

side 聖夜

「さてと・・・玲人。東風谷のバカはどうしている？」

「ああ・・・自分が高いところに上り詰め見下し、最強の力をちらつかせ、あたかも仲間を信頼したように見せかけ、その実使えなくなったらすぐに殺す。自分の手を汚さずにな」

「そこまで最低になっていたとはねえ・・・もう殺すしかねえか。その最強の力が俺のパクリならなおさらだね」

「最低ですね」

「虫唾が走るぜ・・・」

「ああ」

海斗、瞬、乱太がそれぞれの感想を漏らす。あいつらは自分の手を汚さずにのところに切れたんだろう。

「そして、ハイパーゼクターを完成させた。これはトントンだな。」

そして、ハイパーゼクターが数百個あつたらどうなる？」

「・・・まさか」

「ああ、平行世界を飛ぶことが出来るだろう。その平行世界から水を奪い取る・・・略奪だな」

なるほどね・・・それで世界の救世主になろうってか。そしてZECTは一瞬で終わりだな。国や人民から糾弾され、根本から崩れて・・・

「最悪の結末ですね・・・僕たちにとってはですが。相手側にとってはこの上無いほどの好都合だ。アメリカ、NY、アジア各国、大國や小國全てを支配下における。つまりは・・・」

「世界征服だな・・・水を制するものはすべてを制す・・・か」
海斗が言うと、それに続く形で瞬が言う。確かに、大國を支配下に置けば、その下にある小國を支配できる。全てを支配できるということだ。水を他國が独占しようとすれば、いずれ量産できるである

うマスクドライダーシステムを使い全制圧できる。逆に暗殺・奇襲など持ちうる限り全ての方法を使っても、ゼクターの力を使えば全て完封だ。もう世紀末救世主でも呼ばないかぎりは無理である

「ああ．．．．．そう。今やらなきゃいつか．．．俺たちは終わる。いや．．．俺ももうおわ．．．て．．．い．．．る．．．」

「！！！！！！まさか！！？」

「ありえねえ．．．」

「そんなはずは．．．」

「はあ！？！？」

上から俺、乱太、海斗、瞬の順番で言った。なぜなら、玲人が力尽きて倒れた。背中に刺さっていたのはゼクトクナイガン・クナイフォーム

「オ．．．俺は．．．．．手柄を立てるまでは．．．ナ．．．」

壁に寄りかかりながらクナイを投擲したのである男．．．都山修太はライダーステイングで一発目に受けた肩をかばいながら、右手で投擲していた

「貴方ですか」

海斗の動きは早かった。わずか3秒で接近し、サソードヤイバーを突き刺していた

「は．．．はははははははは．．．ネオゼクト．．．ば．．．んざ．．．い．．．」

そして絶命した。玲人のほうは神咲のおかげで事なきを得ていた。当たり所が悪ければ生きていても身体の一部が使い物にならなかつたであろう．．．今神咲が高速で治療しているが

「当たり所がよくてよかった．．．1？ずれてたら即死だったわね．．．」

とりあえず俺たちは．．．都山修太の遺体を、静かに弔った
side out

第百七話 そのころのneo-ZECT（前書き）

マスクドライダー全員（残っている人は）全てZECTに入ってます。
展開？なにそれおいしいの

第百七話 そのころの neo-ZECT

side K

「零時さん……都山さん……冥福を祈ります……」

玲人さんが裏切るなんて……零時さんの自業自得でもありますね。まあそれは置いておき……ライダーシステムが2つもZECT側に入ってしまった。ドレイクグリップがあちら側に渡ってしまった以上、ドレイクゼクターを回収するべきですかね……。ZECT側にゼクターが渡ってしまった場合は……。最悪ゼクターを破壊するべきですかね……。それはいいとして

「ひどくないですか!?あの女!あんな子供を鞭うちにするなんて!」

「『五月蠅い』」

早苗さん、相山さん、参太さんがはもった……。これは素晴らしい!!(某会長風に)正直言つてあの人酷いですね。はいはいはい……

「兄貴……俺たち帰ろう」

「弟よ……その通りだ」

「フェイト……。よしつk」やめてください!!!マッドサイエントリストじゃないんですから!」はいはいはい」

あらら……。もうはいはい病が移ってしまったようですな。

でもほのぼのとした日常がある中で、ZECTとの闘いは熾烈を極めていきます。あと1カ月ないに平行世界から水を略奪しないと……

計画は失敗に終わり、ZECTがこの計画の代わりに、天の梯子計画を実行してしまう……。SHADOWは認めていないつかSHADOWが一番上ですからね……。いや、僕も裏切るつもりですけどね。こっちついていても利益も何もなかった死ぬだけ……

早苗さんはフォトンブラッドというエネルギーや音の力、ゲッター線なるエネルギーを持つ狂気の科学者、早乙女や管理局とかいう組

織とのつながりからこの技術を取得しましたからね・・・ありや・・・？あのビデオは音の力の世界から手に入れたものですか・・・そろそろZECTに合流しますか・・・相山さんも参太さんも・・・

「早苗さん・・・貴女は負け組ですね」

「へえ・・・薄々気づいてはいたけど・・・」

『HENSIN change beetle』

隠し持っていたゼクターで変身し、ハイパーゼクターに手を伸ばそうとしたが、その時にカブティックゼクターを180°回転させる『rider beat』

「置き土産・・・残しておきますよ」

そして足で今立っているところを強化されたキックで踏み貫くと、ハイパーゼクターに手を伸ばす

『hyper clock up』

「kill you」

そしてハイパークロックアップでついさっき出て行った相山と参太のところへ行く

「Kか・・・行くぞ」

「兄貴・・・用意できてるよ」

そして二人がホッパーゼクターを呼び出し、ライダーベルトに、相山が緑色の面、参太が茶色の面を表にしてライダーベルトにつける。

『HENSIN change kick hopper』

『HENSIN change punch hopper』

相山がキックホッパー、参太がパンチホッパーに変身する。そして、一気に地上数十階から飛び降りる。

「あいやあああ！！！！！！」

「兄貴いいいい！！！！Kがやばいよおおお！！！！」

「弟オオオオ！！！！Kは高所恐怖症なんだあああ！！！！いや違ううう！！！！こいつは・・・地上3000メートルは平気だが地上300メートルとか、100〜2900の高度で恐怖症が発動する

んだアアアア！！！」

「有り得ないよ兄貴イイイイ！！！」

「あいやああ！！！！！！！！O T A S U K E！！！！！！！」

「Z E C T きてくれえええ！！！！！！！」

いやああああ！！！！！！！！あ、地面が近dがあつやややややゆあう
dすhdすdhh！！！！！！！！

「大丈夫ですか！？霊宮先輩！？」

「「本名知ってたんですか海斗先輩！？」」

俺は海斗の後輩で、相山と参太は海斗の後輩なんだorz
side out

第百八話 東風谷早苗、最強の兵隊を手にする ZECT 結集するライダー

今回は短めです

第百八話 東風谷早苗、最強の兵隊を手にする ZECT 結集するライダー

side 第三者

「で、キングダークさん？あの件は・・・」

「その件は、仮面ライダーのデータを複製して出来た兵隊を送る」

「ありがとうございます。仮面ライダーなんて大層なものの名乗りたくありませんよ。あんなことしたくない。平和なんて守りたくないわ。平和を壊すから面白いんでしょ？」

東風谷 早苗は最強の兵隊を手に入れた。

怪人で出来たショッカー軍団

疑似ライダーで出来た軍団

を、彼女はZECTを全力でつぶす。自分の目的の前には、かつての仲間、恋していた男などは路傍に転がる石ころ以下の価値しかない

「ええ・・・聖夜・・・あなたを私の色に染め上げてあげる」

訂正しよう。東風谷 早苗は愛している男を自分の狂気に染め上げるためには、かつての仲間などは路傍に転がる石以下の価値しかない

ZECT

「というわけで・・・neo-ZECTをつぶすぜ。気合い入れてけよ！！！！」

『はい！！！！』

ZECTの人間も、neo-ZECTをつぶすことにした。Kからの情報と、マスクドライダーが増えたことにより、勢いに乗ってつぶそうという考えだ。そして、この言葉を言った蛇川は、静かに夜空を見上げ、涙を流しかける。何故泣いている？それは、つい先日、ワームとの戦闘で死んだ仲間達に対しての、弔いの涙であった。

「ごめんな・・・無駄死にさせて。こんな闘い、はやく終わらせて平和にするから。俺たちが」

決意を新たにした蛇川は、ZECT本部に戻って行った。胸に決意の炎をともらせながら

第百九話 長編の途中ですが・・・ 本編もやるよ！

まずは……………

聖夜「重大発表するらしい」

??「へー」

瞬「お前は出てくるな！！」

??「いいだろうが・・・帰ります」↑退

聖夜「実は・・・リアルの事情や3作品同時連載やなんやで一週間に2～3回くらいの更新になるらしい」

瞬「以上なので・・・本編どうぞ」

ここから本編だよ！！

side 聖夜

「neo-ZECT襲撃は明日か・・・あっちの戦力もすごい多いらしいからな、戦車でも用意しといて、遠距離からの攻撃で攻めたほうがいいんじゃないか？」

「いや・・・クロックアップで突っ込んで戦力を減らせばいい」

「それだと人員が少ない。ライダーシステムが量産できるわけでもないんだし」

上から俺、瞬、乱太が発言をしている。俺は遠距離からの被害が少ない方法、瞬がライダーシステムの資格者全員でクロックアップをして戦力を減らせばいいという意見だが、乱太が人が少ないということで却下していた。

「ですが……相手の戦力を細かく調べてみると……シヨッカーとかいう組織の怪人、擬似ライダーとかいう兵器の情報もありました」

「なら……聖夜の案でいいだろう。他に何かあるか？」

乱太が聞くと、全員が賛成をした。この場に居るのは俺、瞬、海斗、乱太の4人しかいない……漏れる危険もないしな。

「明日は……絶対に勝つぞ手前ら!!」

「『『応!!!!!!』』」

俺達は明日の決戦に向かって気合いを入れていた。しかし……俺達は気付かなかった。早苗の戦力の規格外さ。そして圧倒的な物量を……

side out

第百十話 宇宙のライダーキターーーーー!!!! (前書き)

一回全部パーに・・・orz

第一百十話 宇宙のライダーキターーーーー!!!!!!

N O s i d e

聖夜達はneo-ZECTに戦いを挑んだが・・・その経緯はそれぞれで察してもらいたい。8人のライダーで、大シヨツカー&疑似ライダー勢に勝てるだろうか？答えは、無理である。敵の合計が1000人を軽く超えている。それに8人が対しているため、ZECTは敗走しているところである

「はあ・・・はあ・・・多すぎたぜ・・・」

「あいつらの戦力は底なしだよ・・・」

聖夜と瞬がそう言いながら、ZECT本部で警備をしていた。なんとかZECT本部までついたライダー達は2人交代で見張りをしていた。しかし、ゼクターがそれぞれすこし壊れてしまったために、ライダーに変身出来ない状況なのだ。この状況で成虫ワームが出たらおしまいであろう。

「・・・・・・・・ワームか・・・・・・・・」

「今の体力じゃ・・・戦うのは無理だぜ・・・」

幸いなことに、成虫ワームではなく、サナギ体ワームだが、今の体力の聖夜と瞬では太刀打ちはほとんど出来ない。しかし、足止め程度に戦闘はできる。つまり、聖夜と瞬はワームに戦いを挑んだが・・・

「がはあ!!--」

「ぐはっ！」

案の定、すぐにやられて地面に倒れていた。聖夜と瞬は、死ぬかもしれないと思ったが、次の瞬間にとてつもないエネルギーを感じた。聖夜と瞬の目の前には銀のオーロラが現れていて、そこからリーゼントに学ランの不良が出てきた・・・

「どうなつてんだよ！？ちょっとまってるよ・・・」

彼・・・如月弦太朗は、フォーゼドライバーを取り出して腰に巻いた

『3・・・2・・・1』

「変身！！！」

弦太朗はそう言ってベルトにあるレバーを押すと手を上にあげた。そして、光の輪が弦太朗を包み、姿を、仮面ライダーフォーゼに変身した

「宇宙キターーーーー！！！！！」

第百十話 宇宙のライダーキターーーーー!!!! (後書き)

中途半端ですみません。

第百十一話 強い・・・

side 第三者

「宇宙キターーーーー！！！！！！！！」

如月弦太郎・・・仮面ライダーフォーゼはそういうと、ワームの一体に殴りかかり、胸倉？を掴んで頭突きをくらわせていた。さらにベルトにあるスイッチの一つ、ランチャースイッチをチェーンソースイッチに入れ替えると、そのスイッチを起動させる

『chain saw on』

「おらあ！！」

そして、右脚にあるチェーンソーでワームを二回、三回と切り裂くと、ベルトにあるレバーを押す

『chain saw limit break』

「ライダーど根性スラッシュー！！」

ネーミングセンスはあれだが・・・威力は相当あるようで、一気にワームを切り裂き、倒す。

「???こいつスイッチを使っていないのか?まあいいか」

そして、赤いスイッチを全て上にあげると、変身が解除されて如月弦太郎に戻る。そして、聖夜と瞬はふらふら立ち上がる

「あんたか・・・ありがとうな。助かった」

「ああ？当たり前だろ、俺は仮面ライダーだからな」

「仮面・・・ライダー？なんだそりゃ」

聖夜が礼を述べると、弦太郎は当然と言う風に言い、瞬は仮面ライダーという単語に疑問符を浮かべる。そして、聖夜が

「ま、立ち話は難だし、本部へ戻るか。ちょうど交代の時間だしな。乱太と海斗が来るだろうし」

「ま、みすばらしいけどな」

「お、おう」

とりあえず弦太郎をZECT本部へ案内した聖夜と瞬だった・・・

side 聖夜

「・・・というわけだ」

「ずいぶん大変だったんだな・・・あんたらも」

とりあえず俺は、如月弦太郎とか言うやつを研究室まで連れてきた。神咲が、弦太郎の持つアストロスイッチに興味を示したのを見て、弦太郎が10番の『エレキスイッチ』を貸したらしい。神咲はずっとアストロスイッチに向きっぱなしだ

「まあ・・・ゼクターが直ったんだし・・・いいじゃん」

瞬がそう言うと、ガタツクゼクターを伴い、「俺は寝る」といいながら研究室を出て行った。弦太郎もその辺にあったソファに寝転がって寝始めた。スゲーいびきだな・・・ヲイ

「ま、俺も少し寝るか」

俺も椅子に身を預けて眠りについた

side out

第百十一話 強いな・・・（後書き）

弦太朗の使えるスイッチは20番までです。
全部使えるかな・・・

第百十二話 雷神・破壊者（緑）・紅英雄

side 聖夜

「きやがつた!？」

俺は外に居る疑似ライダー軍団を見据えながら、カブトゼクターを構えながら。ベルトに装填しようとしたが、

「「「ちよつとまつたああああ!!!!!!」」」

そこに割り込んできたのは…….NANDATOOOOOO
!!!!

「俺!？しかも乱太に瞬!？」

が何故かいた。ここに俺はいるぞ!？

side out

side R 聖夜

「俺と瞬と聖夜か…….」

蛇川がそう言いながらディケイドライバーを腰に巻きつけて、バツクルを開く。そして、ディケイドのカードを装填する

『KAMEN RIDE DECADE!』

そして、黒色のスーツに蛇川が包まれ、ライドプレートが頭に10枚刺さる。そして、ライドプレートからマゼンタ色が通り、ディケイドへの変身が完了する。そして、カメンライドカードを一枚取り出して、バックルを開いて装填する

『KAMEN RIDE KABUTO!!』

そして、カブトにカメンライドすると、もうひとつのカードを装填する

『ATTACKRIDE CLOCKUP』

そして、不可視の空間、クロックアップ空間に入り込むと、瞬く間にワームを倒していく。それをみて瞬も黙っていないのか、ダブルドライバーを装着している。そして、ブリザードのメモリを構える。そして、俺も、ライジングのメモリを構えると、スタートアップスイッチを押す

『RISING!!!』

ベルトのソウルサイド側に入れると、俺の意識はメモリに転送された
side out

side 第三者

そして、ライジングのメモリと聖夜の意識と一緒に転送した。そして、瞬がライジングのメモリを押し込むと、自分の持つメモリのスタートアップスイッチを押す

『BLIZZARD!!!』

『「変身!」!」』

『RISING・BLIZZARD!」!』

そしてブリザードのメモリを押し込んで、Wを描くようにドライバ
ーを右左それぞれに倒す。そして、瞬の体を細かい装甲が張り付い
ていく

「俺の名は……」

『仮面ライダーW』

『「さあ、お前らの罪を償え」』

第百十三話 雷神・破壊者（緑）・紅英雄

『「さあ・・・お前らの罪を償え」』

そう言つて仮面ライダーG^{ゴッドダブル}Wは駆け出し、近くに居た一体の疑似ライダーを、“聖夜”が蹴り飛ばした。まあWと同じだが。

『なるほど・・・こいつらは疑似的に作られたライダーだ。手加減なしでいい』

「なるほどな・・・ならこいつでいいか」

そして瞬の方がブリザードメモリを引き抜いて、黒色のRのメモリを入れる

『RISING・LANCE!!』

Wの亜種体系・ライジング・ランスへと変わると、背中に現れたランサーシャフト・を瞬・聖夜が息を合わせて振り回す。雷が纏っているその槍を受ければ痺れる。そして、聖夜のほうがライジングメモリ

を引き抜いて、青いAのメモリを入れる

『AQUA・LANCE!!』

さらに、アクア・ランスへと変わるとランサーシャフトを振り回し、水流と共に敵を押し流す。そして、Rのメモリをランサーシャフト、Aのメモリをベルトのマキシマムスロットへと入れると、ツインマキシマムの態勢へとなる

『「ツインアクアブレイバー!!」』

そして、ランサーシャフトを振り回し、それから投げ捨てて飛び上がり、擬似ライダーの一団へと王蛇のキックと同じ蹴りを入れる

「さてと、次は乱太に任せるか」

一方、蛇川のほうは、蛇川がケータッチを取り出していた

『KUUGA・AGITO・RYUKI・FAIS・BLADE・
HIBIKI・KABUTO・DEN・O・KIVA FINAL
KAMEMRIDE DECADE!!』

そして、ファイナルカメンライドして、ディケイドコンプリートフォームへと変化し、一枚のカードを取り出す

『ATTACKRIDE ALLRIDER』

そして、クウガ〜キバまでのライダー最終形態を呼び出す。（アタックライド・てれびくんのようなものだと思っしてほしい）。そして、それぞれが蹴り技や遠距離技を叩き込んだ

「はあ!!!!」

クウガアルティメットフォームは、アルティメットキックを敵の一団へと叩き込み

「うおおお!!」

アギトシャイニングフォームは、シャイニングキックを敵へと叩き込む

「うりゃあああ！！！！」

龍騎サバイブは、シュートベントのカードで使うことのできる技を敵へと撃ち込む

「おおおお！！！！！！！」

ファイズブラスタフォームは、ファイズブラスターのでの砲撃を敵へと撃ち込む

「うええええええいいいい！！！！！」

ブレイドキングフォームは、ロイヤルストレートフラッシュを敵の集団へ決める。

「うらあ！」

装甲響鬼は、鬼神覚醒を敵へと叩き込んで、切り裂く

「・・・はあ！！！！！」

カブトハイパーフォームは、ハイパーライダーキックを敵の集団へと叩き込み、天の道を生き総てを司る男のポーズをとっていた

「…………俺達の必殺技・クライマックスバージョン！！！！！！！」

電王クライマックスフォームは、ボイスターズスラッシュを敵に決

める。うん、格好いい↑作者の意見を入れるな

「はあああああ!?!?!」

仮面ライダーキバ・エンペラーフォームはエンペラームーンブレイクを敵に決める。

「俺の必殺技……コンプリートフォーム!?!」

そして、10枚のカードをくぐりながら、ライドブッカー・ソードモードを残りの敵全員に決める「コンプリートスラッシュ」を決める。そして、召喚されたライダーはすべて消える

「さてと……この世界は何だ?」

第百十四話 雷神・太陽神（雷神と同一人物）

Side A 聖夜

「俺・・・ですよね？」

「俺・・・だぞ？」

俺の目の前にはさつき変なライダーに変身したほうの俺。とりあえず俺をA聖夜とすると、あつちはP聖夜か？いや、アナザー聖夜とパラレル聖夜だけだ。意味ない」

「とりあえず、こうすればいいだろう」

P聖夜が突然自分の髪を鮮やかな金色に染め上げていた。こうしてみると女の人みたい・・・何で同姓に・・・

「ま、俺は元々金髪だしさ・・・やろうと思えば女にも男にもなれるしな」

「ぬ！！！！！！」

「ほれ」

そう言いながらP聖夜は一回転すると、若干女っぽい顔立ちがさらに女っぽくなり、体つきも・・・ておいおいおいおいおい！！！！！！何で自分に欲情してるの俺エエエ・・・！！

「かわいいだろ？」

「分かった・・・他の乱太隊長と瞬は？」

「あいつらと同じことやってそうだな・・・乱太はしぶしぶ、瞬はワルノリで」

はあ・・・？もう別の俺達マジ怖い怖い怖い。そう思いながらP聖夜に引きずられるというより俺がP聖夜をおんぶするような形で乱太隊長と瞬に会いに行くと

「GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!」
「!!!」

「何やらせてるんだよ瞬!!!!!!」

「YU・KA・I!!!!!!」

俺のところの乱太隊長&瞬が、大変なことになっていた。まあ現在の状況を説明すると・・・赤い髪で女になった隊長がP瞬に押されてA乱太に押し倒すような形でA乱太に落ちちゃって、P乱太赤面、A乱太ラッキースケベ。A瞬は瞬で女体化したP瞬に抱きしめられてた。混沌^{カオス}すぎだろおおお!!!!!!

「もう、嫁にいけないぜ・・・」

「やめてそっちの俺EEEEEEEE!!!!!!」

「いやだあゝ今女だし」

もうやめてくれ・・・胃が痛い

s
i
d
e
o
u
t

第百十四話 雷神・太陽神（雷神と同一人物）（後書き）

うわぁ・・・粗末だ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2342r/>

F A I R Y T A I L 空の刀が目指すは雷の神

2011年11月22日18時06分発行